

特20
505

釧路人物評傳

明治
44. 8. 7
丙寅

酒銘良優

酒銘良優



油醬上最

發賣元

函館



林豊三郎本店

電話一〇六番



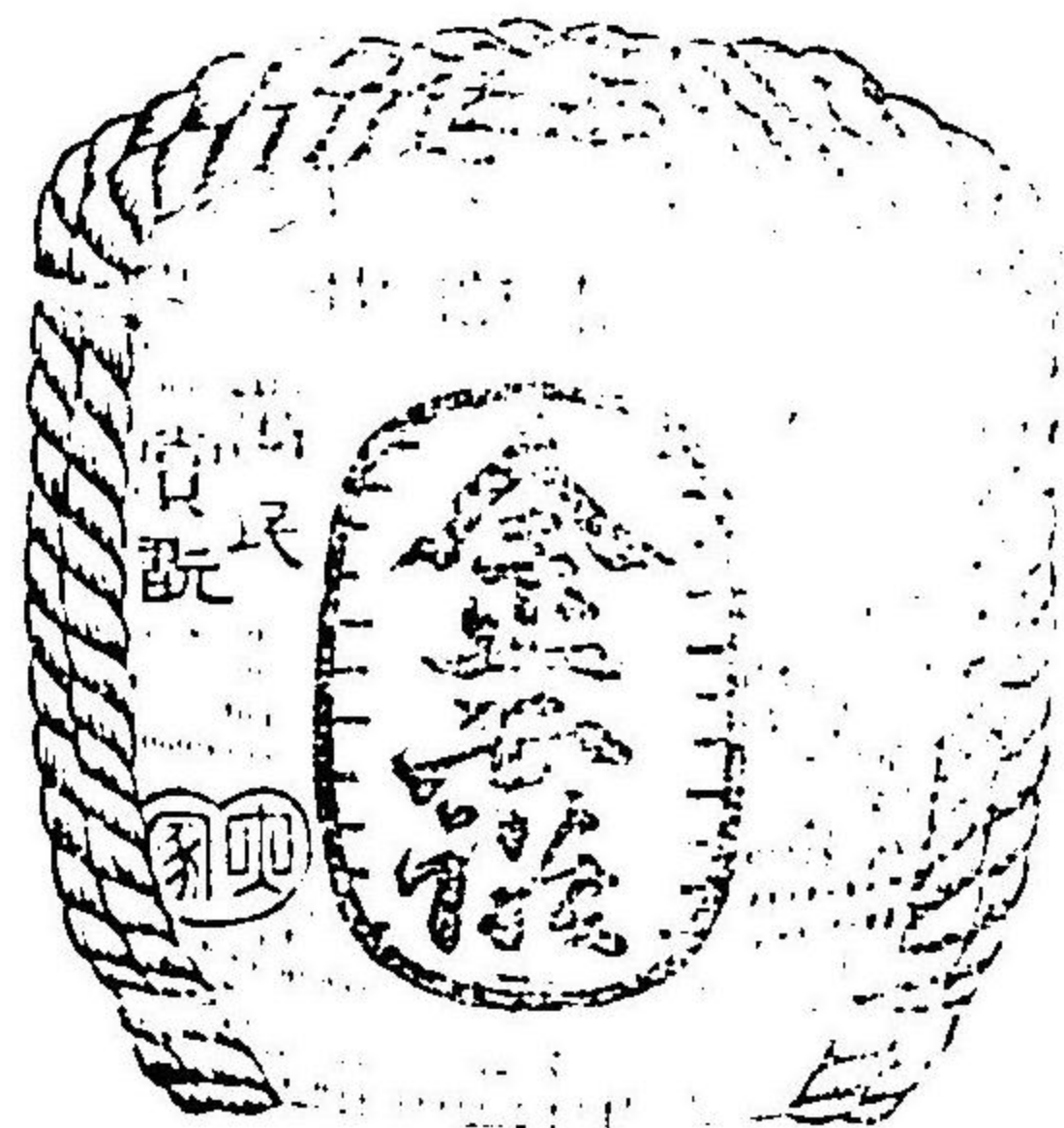
釧路



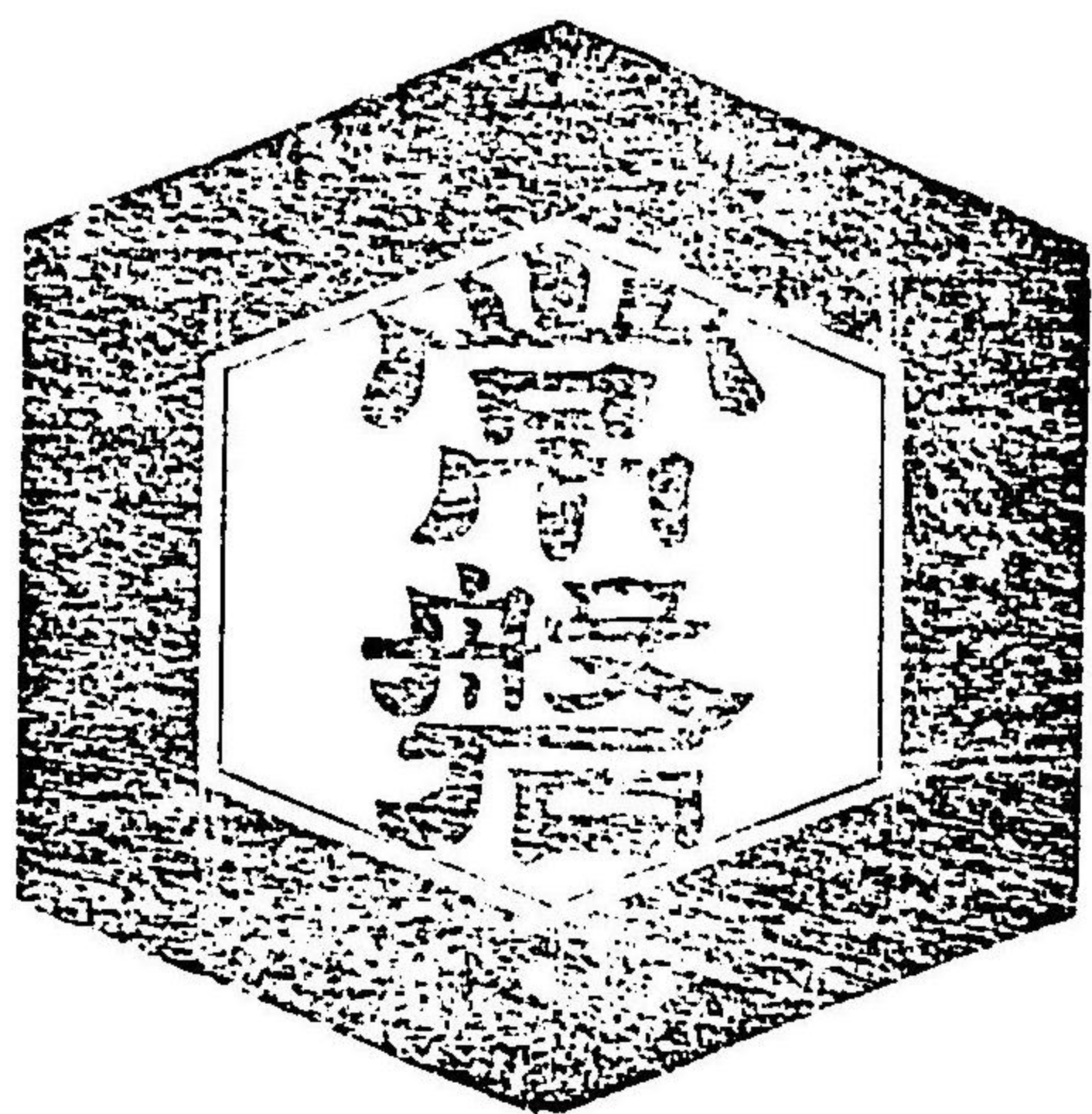
林豊三郎支店

電話四七番

酒銘良優 酒銘良優



油醬上最



發賣元

國館

林豐三郎本店

電話一〇六番

釧路 林豐三郎支店

電話四七番

釧路

萬澤病院

釧路支廳坂上
電話三十八番

內外科 產婦人科 各科專門治療

院長 醫學士 萬澤 晉

醫長 醫學士 藤澤 高範

藥局長 勳六等 飯田源一郎

囑托醫 勳六等 松兼淳一

附屬 認可 釧路產婆養成所

每年九月

講習ヲ開始ス

釧路港眞砂町四十九番地

發電略號 (一五二)
受信略號 (クシロヒシニ)



釧勝興業株式會社

電話 貳番

資本金

五拾萬(圓拂込濟)

創立年月

明治四拾年壹月

營業種目

鑛物採掘販賣
製材 造林
牧畜 海運
解代理業

瀛車瀛船聯絡貨物取扱

釧勝北運送業同盟店

釧路停車場前



三浦運送店

店主 三浦榮一



日野運送店

店主 日野桑吉



高野運送店

店主 高野豐藏



茅野運送店

店主 茅野滿明



三上運送合資會社

代表者 三上貞治

海陸物產
委託買賣問屋



岩水口常吉商店

本店 釧路港洲崎町

電話一二九番

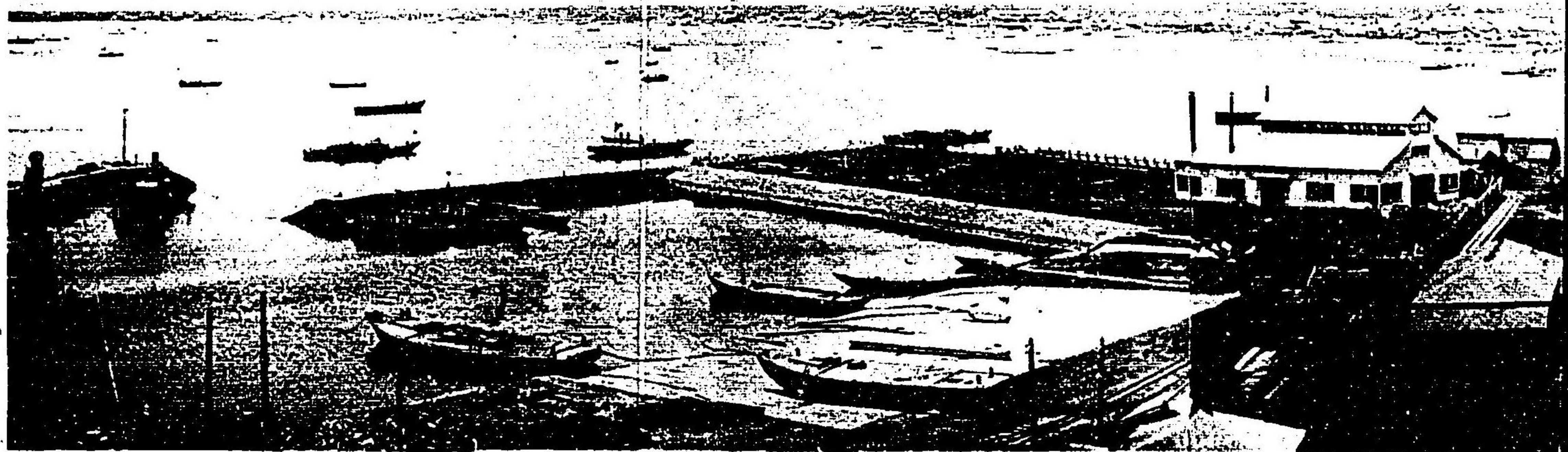
出張 釧路港西幣舞

電話一三〇番

岩西幣舞出張所

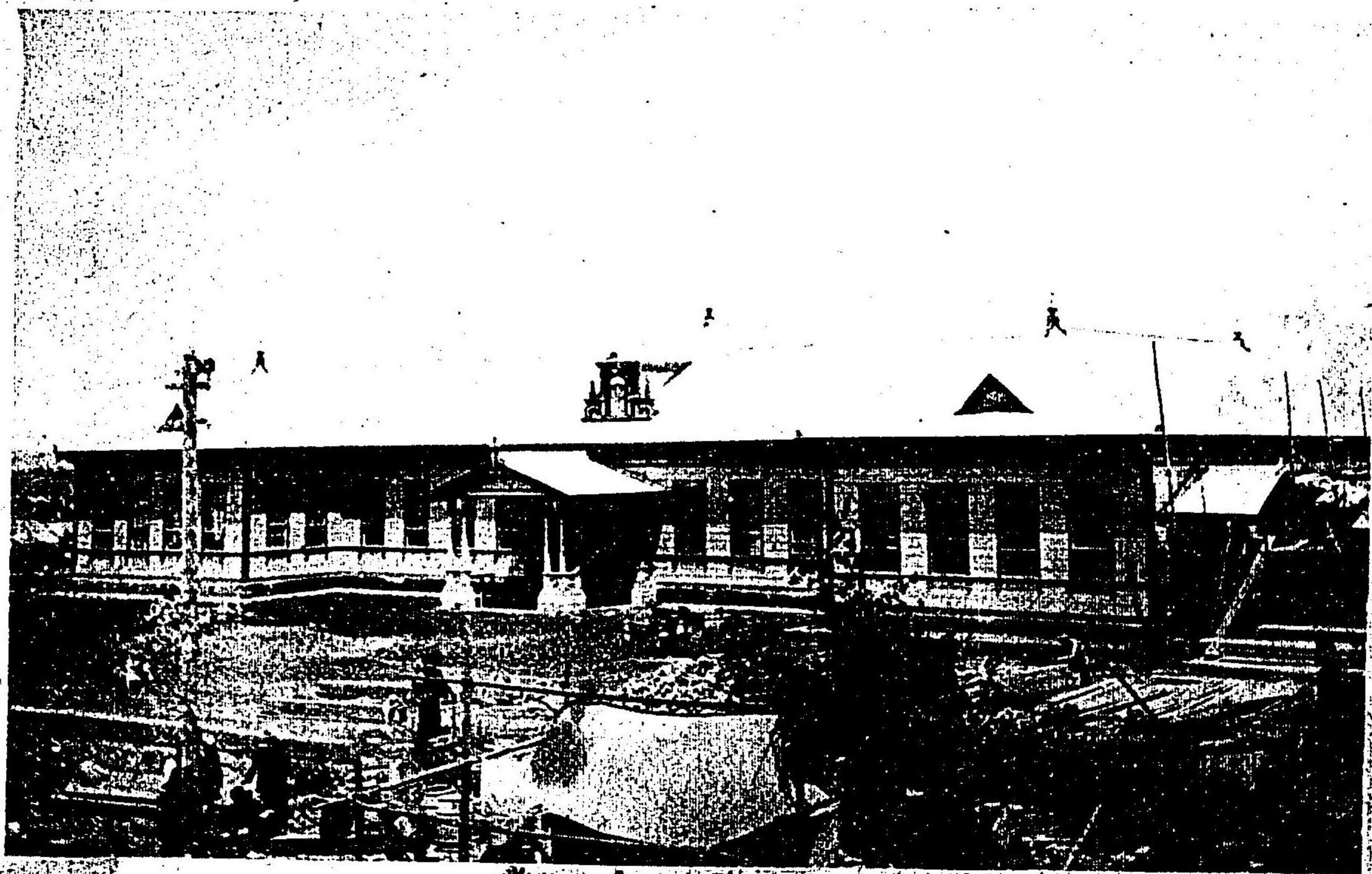


港 路 鋼



製社民機札

景 全



堂 會 公 路 鉤

目次

前田正義君	一	溝江定一郎君	三九
秋元幸太郎君	五	佐々木市四郎君	四三
佐々木與兵衛君	九	上田勘兵衛君	四六
萬澤普君	一三	納谷留藏君	五〇
藤澤高範君	一七	中谷虎雄君	五三
磯部定藏君	二〇	奥田平藏君	五六
臼井拾君	二四	阿部六吉君	六〇
茅野滿明君	二八	松本文太郎君	六八
前田政八君	三一	吉田七右衛門君	六六
城川竹次郎君	三五	池田初太郎君	六九

本書掲載の順序は何等標識するものあらす材料寫眞を得るに從ひ印刷に附したれば順序は之に依つて造られたる也

森	本	金之	亟	君	七三	三	井	謹	一	君	一一一			
吉	田	每	太	郎	君	七六	中	戶	川	平	太	郎	君	一一五
中	村	惣	吉	君	七九	白	石	義	郎	君	一一八			
松	村	留	治	郎	君	八二	遠	藤	清	一	君	一二三		
三	浦	繁	松	君	八五	中	川	久	平	君	一二五			
豐	島	庄	作	君	八九	中	川	熊	三	郎	君	一二八		
尾	崎	常	次	郎	君	九三	立	木	源	治	君	一三二		
原	田	宗	二	郎	君	九六	嵯	峨	久	君	一三五			
藏	本	藤	太	君	一〇〇	逸	身	豐	之	輔	君	一三九		
土	田	李	平	君	一〇三	名	西	惣	吉	君	一四三			
柿	田	享	君	一〇六	佐	々	木	松	三	郎	君	一四七		
寺	戶	英	介	君	一〇九	松	澤	善	二	君	一五〇			

福	井	邦	雄	君	一五二	坂	本	彌	太	郎	君	一九四	
兩	角	榮	治	君	一五六	橋	本	清	助	君	一九七		
大	村	吉	太	郎	君	一五九	藤	原	二	男	治	君	二〇〇
藤	田	春	吉	君	一六二	渡	邊	藤	七	君	二〇四		
戶	田	猪	八	君	一六六	外	山	治	吉	君	二〇八		
横	田	善	之	亟	君	一七〇	岩	堀	氏	俊	君	二一〇	
佐	藤	伊	藤	次	君	一七三	西	村	真	雄	君	二一四	
岡	田	伊	之	助	君	一七五	吉	田	善	助	君	二一七	
永	江	雄	平	君	一七九	今	村	淺	次	郎	君	二二〇	
佐	藤	國	司	君	一八二	飯	塚	城	之	助	君	二二三	
中	山	惣	次	郎	君	一八六	三	井	德	寶	君	二二六	
馬	場	吉	郎	君	一九〇	高	倉	安	次	郎	君	二三〇	

黒澤 丑五郎君	二三四	高野 豊藏君	二七二
中野 米藏君	二三七	渡邊 政次郎君	二七五
中元 寺豊君	二四〇	沼田 八右衛門君	二七九
柿崎 助吉君	二四三	吉村 眞貴君	二八二
中西 六太郎君	二四五	北守 政一君	二八五
三井 玉三郎君	二四九	古瀬 恒次郎君	二八八
前田 榮次郎君	二五二	山田 駿三郎君	二九一
河村 三雄人君	二五六	中川 保平君	二九四
中川 彌一郎君	二五九	戸田 與太郎君	二九七
山崎 常吉君	二六二	山縣 秀輔君	二九九
齋藤 榮太郎君	二六五	福田 三太郎君	三〇三
五寶 仙吉君	二六八	土屋 金次郎君	三〇六
		故武富善吉君評傳	

自序

釧路の地形地利が、本道東部海岸の關門港として、刻次に興隆を見んとするに於ては、釧路町及び釧路全管は勿論、其の關係地域たるべき十勝、北見、若くは根室に於ける住民の、常に精氣の潑刺たるものあるは、蓋し疑ふべくもないのである。而して夫等住民の生活状態、事業の情勢を知るは、即ては、釧路港の興隆を意義あらしむると共に、過去の推移に觀、現在の變遷に察して、其の奮闘的徑路を究むるは、更に將來の活動を助成する上に於て、効果の甚だ尠からざるは、亦勿論とすべきである。本書は此の意味に於て、各種階級の人物を網羅して、其の奮闘的成功の跡を叙し、以て時代變遷の考證たらしめんと、期圖する所ありたるも、遂に所期の目的に副ふを得ず、僅かに釧路町及び釧路國の一部を收めれば、仮に之を「釧路人物評傳」と題して、刊行したのである。釧路港が、單に釧路町にのみ依り、司配されざるに於ては、本書が關係地域の總てを、收むるを得ざりしは、

編者の深く遺憾とする所である。而かも本書中に於て、十勝國の若干を収録したるは、尙し關係地域の全部に及はずとせば、切めては關係の最も密なる、釧勝二國を收むべく、材料の蒐集を試みたるも、或者は之を得、或者は之を能はずに畢つたので、其の得たるものゝみを収録したのである。而して本書の題名に、釧路の二字を冠したるは、實に釧路なる、地方的意味に出るにあらずして、釧路港に關係ありと云ふ、寧ろ廣義の解釋に因るものなれば、他日再刊を期して、此の意義を明確ならしむるのである。終りに編者は、本書の行文、甚だ振はざるを讀者に謝するのであるが、如上は、編者の用意の到らざるに因る勿論なるも、編纂日時に餘裕なかりしは、亦之を餘儀なくせしめたのである。唯夫れ本書の刊行を、千載の一遇事たる、東宮殿下の行啓時に於てするを得たのは、光榮とする所である。

明治四十四年七月廿日

古川忠一郎識

前田正義君

釧路町支廳官舎
現任釧路支廳



前田正義君

新進興隆の釧路町を本城とし、面積四百五十七方里、廣卅八里廿六町、袤廿四里廿九町、周圍百六十八里、沿海線五十四里廿六町を有する、釧路國一圓の政令發動の府たる、釧路支廳の司命者として、釧路支廳長の職に在る從六位勳五等前田正義君は、高知縣高岡郡仁井田村の産出で、其の呱呱の第一聲を擧げたるは、明治元年七月廿八日とあれば本年は當に四十四歳の男盛りである。君の腕白時代は、維新の大業漸く緒に就きたるも、風雲の急、尙ほ收まらざる時であり、且つは列藩の間に、薩長土肥と並稱されて、幾多の俊傑を輩出したる、土佐の流れを吸ひのであれば、尙し君が、

前田正義君

一

風雲を夢むの奇蹟兒であつたならば、君の運命が奈何の經路を辿つたかは、蓋し測るべからずであつた。而も幸か不幸か、君には爾かき大膽も野心もなく、極めて平凡々たりで、明治十五年まで郷里に在りて、小學校卒業後は、私立猶興學舎に入りて普通學を了へ、全年出京して私立共立學校に英語を學び、文武講習館に漢學數學を修め、最後に東東法學校(和佛法律學校の前身)に入りて、法律經濟を研究し、始めて社會の人となつたのは、全廿三年の頃である。即ち明治廿二年に法學校の門を出で、翌廿三年、司法省文官普通試験に合格して、裁判所書記となり、爾來は千葉、高知、前橋、根室、札幌の各地方裁判所に歴仕し、全卅二年札幌稅務監理局屬に轉し、全年一躍して、札幌稅務署長となり、稅務の上に、君は其の手腕を揮ふことになつた。全卅五年更に轉して、北海道廳屬となり、殖民部通商課勤務より擢んでられて、全卅八年第一部地方課長の椅子に倚り、稍や其の進路を開き、全卅八年十月北海道廳支廳長に榮進して、宗谷支廳長となり、此に

始めて屬僚生活を脱したのである。在職前後五年に亘り治績大に擧るの故を以て由來難治の稱ある釧路に松方勇助君の後を襲ふて、釧路支廳長として來任したのは、實に一昨四十二年五月である。君が釧路支廳長としての在職は、其の手腕、其治績を如何に評騰し、如何に定價すべきやは、今之を云ふの時期にあらず、否云ふを憚かるを寧ろ禮とすべければ、他日の機會を俟つとするも、君が過去の半生を觀すれば、明治廿三年より四十四年の今日に至る、二十餘年の久しき、曾て處世の針路を改めず、身を官海に投して、其の生涯を送つたのである。倘し歴史は、性格の總てを語る説明者なりとせば、君が二十年間一日の如くに、簿書堆裡に渾身の精力を傾け、克く其の職に忠なりし以所は、偶ま以て君の性格の一斑を窺ふに足るべしで、君には嶮坂馬を驅るの快は、望むべからずとするも、摯實堅忍の裡に、功を逸せざるの妙は、君の最も長とする所である。即ち君に、處世の要道なるものありとせば、突飛、妄動、浮華、輕佻は大の禁物で、極めて眞面目

に、秩序的なるは、君の既往現在を一貫し、將來も亦此の軌道に依り可配さるべく、君も常に此の信條を以て誇りとし、且つ人に語つて居る。君が事を處する、理に依つて判断し、情の外に超然す。此の意味に見るも、君は情熱の人にあらずる如く、理性の人である。君が前任地宗谷に在る、未開地處分の紊乱は、殆んど其の極に達し、宗谷支廳は、宛かも一種の伏魔殿なるかを疑はしむるの觀ありとし、銳意其の廓清に力めたる如きは、君の性格の美を發揮したりと云ふべきである。君釧路に來るの日に於て、直ちに首席を誡り、而して屬僚の總てを代へたるは、或は釧路支廳を、第二の宗谷支廳として、伏魔殿視せし意底に出でたるは勿論であらふ。唯夫れ君が、事を處するに當りて、餘りに理性に走り、而して時に術策の跡を貽すは、士佐人的性格の表現と見るべきで、君も之を首肯せざるを得ずである。君の居常に於ける嗜好は、圍碁と釣魚で、酒は絶對の禁物である。父母尙は郷里に健在し、夫妻の間男四を擧げ、洋々の和氣、常に家庭に滿つ。

秋元幸太郎君

釧路町浦見町
現任釧路町長



秋元幸太郎君

單に釧路町長たるが故にあらず、其の實勢力の上に於ても、秋元幸太郎君は釧路町に於ける、代表的人物の一人で、或る意味に於ては君は寧ろ其の主班者とも觀るべきである。君は如何なる經路に依りて、此の實勢力を占め而して代表的人物の主班者たるを得たのであるか。

是れ君の生涯を研究する上に於て、最も趣味ある問題で、亦君の面目も、之に依つて躍如たるを得るであらふ。君は安政五年四月十八日、秋田縣秋田市本町に生れ、縣立傳習學校(現今の師範學校)卒業後は、郷里に在つて訓導として、教鞭を執つたのである。當年の小學訓導たる君が、富巨萬を累ねて、地方の代表

的人物たるを想へば、何人も其の榮達を羨まない者はないであらふ。君が釧路の人となつた動機は、明治十四年十二月、東京第四十四国立銀行本店より、小樽全支店詰に轉勤したのが、渡道の第一歩で、其後四十四銀行は、第三国立銀行に合併し、更に第三銀行北海道營業部は、私立山田銀行の管理に移つたのであるが、其間君は、營業主權の轉移と共に、山田銀行員となり、札幌全出張店を司配するに至つたのである。當時山田銀行の關係に在りたる、本道著名の跡佐登硫黄山事業は、東京安田善次郎氏が譲受け、標茶、跡佐登間に鐵道を敷設し、大に事業の擴張を圖り、且つ全時に春採に於て、石炭採掘業をも開始することになつたのである。更に安田氏の礦業所に入り、全廿年四月、始めて釧路の土地を踏むたのである。爾來君は安田氏の礦業所に在りて、跡佐登硫黄山事業の經營に當り、全卅一年六月安田礦業所を去つたのである。君は此の時代に於て、既に夙くも將來の立脚地底を造らんと思慮せしもの、如く、勤儉貯蓄に専念したのである。蓋し君の信念

は、恒心は恒産に依つて造られ、最後の勝利は、財力の強大に在りとして、盛んに財慾性を發揮して、貨殖の部面に努力したのである。果然、此の信念は、君をして成功の第一歩を踏ましめたのである。君は安田礦業所退任當時、既に相當の産を擁して、獨立獨歩の天地を開拓し、常に硬論を唱へて、釧路の町政に参加したのである。即ち自治制施行以前は、釧路郡總代人として、町村經理の樞機に參與し、埋立事業當時に於ける、正義、公民兩派の確執に際しては、公民派の領袖となりて、個人經營を粉碎し、明治卅三年自治制施行と共に、直ちに其の議員となり、全卅七年九月白石義郎氏の退職後、釧路町長の任に就き、全四十一年九月北海道會議員に當選し、全四十三年八月再び釧路町長となりて、町政經理の任に當る等、君の政治的生涯は、釧路の政治史と始終して、常に其の中心人物たるのである。由來君に對する世評は、紛々として毀譽相半はするも、意思の極めて強健にして、精力の絶倫なるは、何人も認むる所で、此の意味に於て、君は一種の傑

物である。倘し君に人物材幹の或物を求めば、機界機變の才に乏しきも、思慮周到、徐ろに事功を收むる滋味あり。卓勵風發、壇上に雄視するの辨力なきも、暗思黙考、錯誤なきを期して、自家の所信に忠ならんとする熱實あり。再言せば君の政治的生命は、其の堅忍なる点に於て、熱實なる点に於て、前途は必ずや無意味に終らざるべしである。即ち君は同志の結合に力め、機關紙釧路日報を起して益す其の地盤を鞏固にせんとする如きは、個中何物かの潜むる想はさるべからずである。君父母共に早く世を去り、亦兄弟姉妹なきも、夫妻の間に五男一女あり最も子女の教育に力を注ぎ、家族を東京に移して、修學の便を得せしむる如きは其の一斑を窺ふべしである。君卅七八年戰役の功に依り、勳七等青色桐葉章及び金五十圓を賜はれ、日本赤十字社終身社員、全釧路分區委員として、社業の隆昌に力を致し、其他地方の公共團體のためには、其の役員となりて盡碎する所あり教育、慈善、救護の事業に寄與して、表彰亦甚だ勤からすと云ふ。

佐々木與兵衛君

釧路町眞砂町
製材造船重役



佐々木與兵衛君

拂込資本金五萬圓、社債三萬餘圓を有する、合資會社釧路製材造船會社の代表社員として其の業務執行の衝に當り、現に町會議員の職に在る、佐々木與兵衛君は、釧路の名家にして亦有數の富豪である。君は明治七年七月一日、函館區地藏町に生れ、全地の寶小學校を

出で、後函館商業學校に學び、全廿二年先代與兵衛氏隱居せるに依り、君は之を嗣き、先代の事業を繼承したのである。當時の事業は、漁業、漁具漁網の販賣及び土木請負等で、業務頗る多望多端なるにも拘らず、君は克く之を經理して、遺算なからしめたのである。是より先き君の先考は、明治十二年函館より來住、濱

中村に於て漁業を開始したのである。其の翌年厚岸郡役所司配の下に、釧路村戸長役場戸長に任命され、在職三年にして罷め、爾來郡総代人として、晩年に至つたのであるが、遂に全卅年秋物故されたのである。先考在世の功績は、釧路の開發と始終して、永久に没すべからざる如く、實に其の恩人なりと云ふべきで、學校、寺院、病院、郵便局等の設置には、大に盡力する所あり、其の私財を投して茂尻矢方面の開発に力を致し、道路其他を設備せし等は、最も表彰するに足るのである。先考歿後、君は益す事業の擴張に意を用ひ、新たに米穀雜貨の卸業を開始して、商界に雄飛を試み、而して更に庶路村に地積二百万坪を相して牧場を起し、畜産特に牛畜(乳牛)の蕃殖改良を圖りて、搾乳事業を營み、後武富善吉氏一家、福富甚吉及び大井留八の數氏と謀りて、資本金五萬圓を以て、合資會社釧路製材造船會社を創設し、君は其の全般を總理して、大井氏等と共に經營の任に當り、大井氏歿後は、後藤文平氏を之に代らしめ、社業の發展に腐心しつゝある。

由來釧路町に銀行に、礦業に、將た倉庫業其他に於て、會社的事業の經營少きにあらざるも、純釧路的會社は、君の製材造船あるのみで、中川倉庫や三上運送の稍や之に髣髴たるも、君は實に釧路事業界の撰手たるべきである。君の事業界の徑路は斯の如く、少壯實業家を以て目せられ、前途の多望は、固より期すべきであるが、而も露骨に君を批定せば、君は尙ほ事業界の未成品で、其の定價は、蓋し之を將來に算定すべきである。即ち君は、單に事業界の闘將として、之を疑問の裡に置くが、君を研究する上に於て最も趣味あり、亦君も之を首肯し、且つ喜ばんと欲する所である。若夫れ君が政治的生涯に至つては、更に幾多の興味を感せざるを得ずで、君は多年、秋元氏等と行動を共にして、常に町政の中堅となり以て重きを町治の上になすは、君の歴史、能く之を説明して餘蘊なしである。君曩に武富氏と謀りて、西島某をして新聞紙を起さしめ、後秋元氏を合せて、釧路日報の共同出資者たること、最近の事實の示す如くで、君は政治、實業の兩面に

於て、多望の將來を有する時代の寵兒たるべきである。而も君の自重は、容易に動かす、昨夏道會議員の改選に當りて、君の同志は、其の候補者たらんことを望みたるも、絶対に之を斥けたる如きは、亦一見識なりと云ふべきである。君明治卅六年第二期改選以來、町會議員として現今に及び、一昨四十二年改選後は、議長代理者となりて、釧路町會の主力をなして居る。全卅九年釧路産牛馬組合創立と共に其の副組長となり、其他の公職として、一として君を煩はさざるものなきは、如何に君の町民者に、推重せらるゝかを知るべきである。明治四十二年釧路町は、君の公事に致せる功勞を表彰すべく、銀盃一個を贈り、茂尻矢道路修補（費額三千餘圓）のため賞を受る二回、其他の寄附の如きも、富豪として人後に落ちず、現に日本赤十字社正社員である。君三弟あり皆家を成し、男四、女二を挙げ、長は函館中學に在り。君資性温厚、更に圭角なく、最も常識に發達して、敢て他と相容れざるなく、蓋し好個の紳士とすべきで、謠曲は其の最も好む所である。

萬澤晋君

釧路町支店長上
釧路萬澤病院長



萬澤晋君

釧路醫界、多士濟々として、甚だ其人に少からず。而かも此間に群在して、一頭地を抜く者、夫れ果して何人を以て、之に擬すべきであるか。釧路萬澤病院長醫學士萬澤晋君の如きは、縦し假に、君を誤解する者は、動もすれば、無馬熱嘲の言を檀まにし、若くは其の人格を云爲せんとするも、斯の如きは君の眞骨頭を窺はさる、皮相の謬見たるは勿論、寧ろ君には、性情美の好愛すべきを、認められぬものあるは姑らく措き、醫的手腕の上よりするも、君は舊に、釧路醫界の明星である、進歩せる釧路醫界の魁者である。再言せば、君は衛生機關の最も未備を補めて、疾病者の多くが、

苦痛に懊惱する時代に於て、其の學び得たる、該博なる智識、練熟せる技妙に依りて、幾多の瀕死者を、救ひ上げたる回生の恩人で、此の意味に想へば、君は釧路醫界に傲居する、權利ありと云ふべしである。君明治卅五年、東京帝大醫科大學の門を出で、醫學士の榮冠を得たるも、性來の篤學は、此の小成に安んずるを好まず、大學病院助手勤務の傍ら、更に大學院に入り、約一年餘に亘りて、外科學を専攻したのである。偶ま全卅七年、釧路博濟病院の創設成り、院主柿田氏の聘に應じて、始めて來釧、是れ君が、釧路と關係を築く第一日である。恰かも其の當時は、釧路の衛生状態は混沌時代で、頗る慘憺を極めつゝあつたのである。此に於て君の醫的手腕は、大に社會の認識する所となりて、聲名隆々、萬澤來を謳歌されたのである。君の勢力信用は、斯の如くして扶殖され、而して後年、自家の經營に屬する、萬澤病院の創立を見たるも、此に潛勢力を求めたのは、蓋し勿論である。在院四年、博濟病院を出で、笠井氏と提携して、共立釧路笠井病院

に據つたが、斯の如きは、君の眞意思にあらざるは勿論、亦君を遇するの途にあらずで、唯夫れ、自家の理想を實現する、一種の階梯として、其の豫備行爲とせしに過ぎないのである。果然、君は自家理想の實現期に到達し、一万餘圓を投して、理想的病院の建設を企畫し、此に愈よ、獨立の新運命を啓かんとしたのである。時當に明治四十二年六月、釧路築港案の通過確定したる、後の幾月である。由來君は、理想の人にして、一步は一步より、其の實現に近かんとする如くに、昨四十三年、産婦人科を併置し、醫學士藤澤高範氏を聘して、釧路醫界の異彩たらしめ、更に産婆養成所を開きて、斯道に貢献する所あり、此に萬澤病院は尨大なる一城廓を成すに至つたのであるが、誰か之を以て、紛々たる釧路醫界、眞に一骨頭を抜きたりと云ふを、否定するものあらんやである。現今病院職員は、君の院長の下に、醫長一、次長一、醫員一、藥局長一、助手二、看護婦六、事務一を有し、而して君は、院務を見るの傍ら、警察醫、鐵道醫及び釧路築港事務所囑

掩蔽を兼ね、更に同仁會鐵路支那支部の任に當り、日本赤十字社總務社員である。若未れ君が、學術の獨立に對する抱負に至つては、一見識となす如くで、學術の道には、王者なく、權者なく、傲然下瞰して、敢て下らざるは、如何に其の學術的權威を、強大ならしめんとするかと、窺はるゝのである。而かも是れあるがために、動もすれば世人の、君を誤解して、其の慢氣を疑はんとするは、甚だ否なりき、學術に對する、忠實なる用意として、寧ろ之を喜ぶべしである。而して更に君に稱するべきは、意思の強健なると、稍や俠味を帶ぶるに在りて、事業の道には、何物の犠牲も辭せざるの勇氣と果斷は、或は萬澤病院の今日あるを得たる、一年の阿由たりしならんかと思はるゝので、君も亦之に首肯するのであらふ。

君明治七年四月十三日、熊本縣宇土に生れ、父母尙は健全に郷里に在り、夫妻の間、男二を擧げ、松兼淳一氏は、其の妹婿である。日常に於ける嗜好は、唯だ運動狂を以て見るべきで、柔道、球戯、謠曲は、其の最も得意とする所である。

藤澤高範君

釧路町浦見町
 万澤病院 院長



藤澤高範君

釧路醫界に一新機軸を現して、幾多の婦人に回生の感あらしむるは、夫れ我が醫學士藤澤高範君其人である。君の出生地は、新潟縣佐渡國佐渡郡四三川村大字大石谷で、明治十二年二月十六日呱呱の聲を擧げたのである。君の門地は、郷里に於て夙に高く、東京市大塚

科大學教授理學博士藤澤利喜太郎氏と共に彼の幕末の蘭醫藤澤明郷氏を祖とし、家世々醫を以て業として居るのである。君の小學時代は、郷里佐に在りたるは勿論であるが、君の門地が既に高く、而して祖父君は最も嚴肅に、且つ漢學の造詣極めて深かつた爲めに、君は其の薰陶を享けて、嚴格の家庭に人となり、漢學

趣味も、盛んに注入されたのである。明治廿八年四月上京獨逸語學校に入學し、全卅年四月大成中學校に轉し、翌卅一年三月全校第一期卒業生として、中學の課程を卒つたのである。全卅二年九月第一高等學校に入り、全卅五年六月全校を出で、東京帝大醫科大學に籍を置いたのは、全卅五年九月で、全卅九年十二月醫科大學を卒業して、醫學士となつたのである。大學卒業は、直ちに醫學博士濱田玄達氏の經營下に在る、東京産科婦人科病院に入つて、職務の練習に就いたのであるが、君の篤學の念は、容易に小成に安するをなさず、在院僅かに二個月、全四十年三月内務省傳染病研究所に轉して、細菌學特に婦人科的細菌學の研究に意を傾け、翌四十一年一月再び東京産科婦人科病院に入り、實務の練習と病理の研究に専念して、昨四十三年一月まで、全病院に在勤したのである。偶々釧路萬澤病院院長萬澤晋氏、事を以て東京に在り、氏は自家病院に産婦人科を併置し、専門的治療を施さんとの意ありたれば、斯道の大家濱田博士に就き、其の人撰を踏りた

るに、博士は君を氏に紹介して推薦したのである。君も亦恩師博士の勸奨もあり且は釧路が將來極めて有望の位地に在るのみならず、未だ産婦人科の専門醫なく患者の不幸は頗る大なるものあれば、其の滋養を之に施さんと、全年五月來釧路で、萬澤病院内に産婦人科を併置し、専門的治療を開始したのである。由來釧路は、醫業者の特に多く、帝大出身の學士も數名あるに抱らす、曾て婦人科に關する専門醫のなかりしは、斯界の一大欠陥であつたのが、君の來釧に依りて、此の欠陥は補填され、全時に完全の治療は施さるゝに至つたので、婦人患者の幸福は勿論、釧路醫界の一進歩として喜ぶべきである。君は自家専門の産婦人科に得意の妙技を揮ふを以て足れりとせず、修養ある産婆の養成をなさんと、萬澤に謀りて、釧路産婆養成所を起し、既に第一回の卒業生を出したのである。君の家庭は、祖母、母は健在し、夫妻の間に男一、女三を擧げて、和氣の甚だ揃ふべきものがある。諸曲は君の最も得意とする所で、斯界の雄である。

磯部定藏君

釧路町弊舞町
酒造兼米穀商



磯部定藏君

釧路町に於て、清酒旭鶴の醸造家として知られ、兼て米穀雜貨の販賣業を營み、現に町會議員の職に在る、磯部定藏君は、安政五年二月十日、秋田縣南秋田郡土崎港に生れ、郷里千葉私塾に於て、漢、數學を授けられ、十二歳の時、商業實習のため、商家の徒弟となつたのである。而も君の學事に念厚きは、實業實習中も獨學を怠らず、十七歳に至るまで、研讀の功を積むたので、稍や事物を解するを得るに至つたのである。明治九年、福山町に縁邊の者あるを機會に、郷を出て渡道したのである。蓋し當時の本道は、恰かも草創の時代に屬して、利便の最も多かりしために、君は之に依

つて身を立て、其の運命を啓かんとしたのである。函館に居ること一年餘、偶ま釧路函館間を航海する、船長某氏に就き、將來現在に於て、釧路の最も多望なるを聽き、即ち來釧、時に明治十年八月である。來釧後は直ちに總代所（戸長役場の前身）に入りて、其の筆生となり月給六圓を給せられたのである。在職實に七年間、其間多少の貯蓄を得たので、副業として漁業を營み、且つ龜の皮、角を買入れて、更に若干の利益を收めたるも、漁業中誤つて火を失し、積年の辛勞も遂に失敗に終つたのである。全十七年九月釧路郡役所雇を拜命したるも、君は既に實業に依つて身を立んと欲したるも、郡長の知遇辭するに由なく、遂に官界に身を留めたのである。全十八年十二月、釧路各郡御用掛を申付けられ判任待遇となり、全十九年二月、釧路郡役所書記（十等）に任し、全廿四年六等に昇進、全廿八年七級俸を給せられ、全時に依願免官となり、滿七年在官のため、退官賜金七十圓を得、此に君は全く官吏生活を脱したのである。退官後直ちに漁業經營の目的

を以て、仙鳳趾村に赴きたるも、當時漁事不況に一般困憊の状態に在りたれば、漁業經營を斷念し、全年十月眞砂町に於て、酒造業を開始し翌廿九年八月、現在の酒造場弊幣町に移轉したのである。當時造石高は、僅かに百石内外に過ぎざりしも、全卅六年頃より全卅九年に至る間は、事業最も隆昌を極めて、一躍二百石以上四百石を醸造するに至り、従つて君の利益を收めたるも頗る多く、後年の基礎は此の時代に於て造られ、君は酒造業者として成功したのである。蓋し當時の釀路町は、漁況連続して好良に、而して更に發展の機運に在りたれば、人氣は爲めに勃興し、一般事業は、総て好兆を呈したる結果である。爾來君は清酒醸造に益す意を注ぎ、旭鶴の名愈々高く、造石實に五百石以上を算するに至り、明治四十年函館に於て開催せる、北海道清酒品評會に出品して一等賞木杯一組を受け、全四十二年東京北豊島郡瀧の川に於て開催せる、全國清酒品評會よりは、三等賞を授與されたのである。清酒の販路は、大部分は釀路及び其附近に在るも、亦十

勝北見の各方面に輸出するものも、甚だ尠からざる如くである。是より先き君は明治卅九年酒造部を、息愛治郎氏に經營せしめ、別居して更に米穀雜貨の販賣業を開始し、酒造部と相俟つて、益す向上發展を試みて居るは、亦多幸なりと云ふべしである。公職としては君は、明治卅一年一月幣舞町總代人となり、全卅六年町會議員半數改選に當り、推されて議員となり、更に再選して現今に至つたのであるが、君は此間幾多の公職を兼務し、日本赤十字社の終身社員である。明治四十二年釀路町は、自治制施行以來の功勞を表彰して銀盃一個を贈り、其他の受賞甚だ尠からずである。君男二、女二現存し、女子は入夫を迎へて分家し、長男環氏は早稲川大學商科に、次男瑩氏は京北中學に在りて學に勤め、孫數人に及びて、家門の繁榮、蓋し美望に堪へたるである。君人に接して極めて恭謙、毫も疎放の擧なきは、偶々以て君の性格の美を窺ふべしで、初めに商業徒弟となり、中途小吏の生涯を送り、後年に至りて實業界に身を投し、晩年を飾りたるは喜ぶべしである。

白井 拾君

鉦路町眞砂町
硝子器製造業



現任鉦路町の町會議員にして、硝子器の製造工場を有し、輸入防遏の第一先鞭を着け、以て鉦路町の生産消費に裨益しつゝある、白井拾君は、高知縣高知市永國寺町の産で、明治五年七月十五日の出生である。君の性行には土佐人式の權變なく機才なく、寧ろ單純整實

で、稍や異とすべきであるが、其の剛直にして自信に厚く、動もすれば蠻氣の露出せんとするは、謂ゆる土佐人性格の、眞骨頭を發揮せりと云ふべしである。君明治廿五年高知縣立尋常中學校を出で、卒業後直ちに上京、當時海軍士官たらんとの志望を懷き、在京約一年有餘半に亘りたるも、故ありて果さず、全廿七年四

月遂に販郷したのである。販郷後は高知市役所に入り、書記として一年有餘を送り、全廿八年末再び上京して、東京郵便局に入り、全卅年鐵道作業局書記に轉し、八王寺に在勤す。全卅三年十一月、代議士坂元則美氏を社長とする、京都合資會社の創立成り、即ち轉して全社に入る。會社事業は、土地、礦山の探掘及び賣買に在り、君は土地係として勤務したのである。全卅四年十月社用を帯びて來鉦す、是れ君が鉦路町の人となりたる第一日である。君の來鉦要務は、鉦路の將來發展の機運に在るを察し、市街宅地の買収を試みんとするに在りて、社長坂元氏及び久米弘行氏の名に依りて、街宅地約十五万坪を序次買収し、君は其の管理人として在住するのである。君は土地管理の傍ら事業創始に意あり、即ち硝子器製造販賣業の最も多望なるを觀取し、全卅七年幣舞川支應坂上(現在の位地)に工を起し、製造工場を建設したのである。當時硝子器(多きはホヤ及び瓶類)の供給は、東京若くは函館に仰き、其消費甚だ尠からざるものあれば、此に製造販賣業を起

して、輸入を防遏し、更に進んで之を十勝方面に輸出せば、自他を益する頗る大なるを思ひ、愈々事業開始の決意をなしたので、君をして此に至らしめたるは、當年の釧路支廳第三課長たりし、知友生野盈明氏の助言も、亦與かつて力ありである。爾來君は製造所の工成ると共に、盛んに硝子器の製作に従事し、比年交通機關の整備に並行して、販路を十勝及び北見方面に擴張し、本年更に工場を改築して、益す其の進歩隆昌を圖つたのである。現今釧路町に於て消費する、ホヤ類、投薬瓶、菓子皿、砂糖瓶其他日用に供する硝子器は、全く輸入を防遏して、其の全部を供給するのみならず、十勝北見方面の輸出も、頓に倍加して、釧路町の生産をなす状態をなすに至つたので、君の事業は、當に成功せりと云ふべしである。君明治卅九年半數改選に當りて、一其の候補者として町會議員に當選全四十二年の改選期にも、再選の榮を荷ふて現今に至れるが、町政部面、動もすれば確執を致して、二者相争はんとするに際しては、君は現町長秋元氏等と共に、行動

を同ふし、其の戰士となつて、議政壇上に熱辯を揮ふのであるが、快辯滔々、敵を粉碎するの破壊力なきも、一脉の熱氣は認め得らるゝので、蓋し君も好個の戰士たるべしである。君謠曲に巧みに、郷里に於て、下田守氏に就きて喜多流の奥儀を極め、釧路來住後は、門を開きて之を教授し、常に門下生三十名以上を有して、釧路謠曲界の振興は、實に君に依つて造られたのである。君亦圍碁に熟達して、其技は優に初段以上を認められ、圍碁も其の全格に在りと云ふに至つては、君の多藝に堪能なるは、更に嘆賞すべしである。最も銃獵を好み、閑あれば山野河川を跋渉して、獵懷を恣にするのであるが、一昨冬上泉海軍少將等と共に、阿寒郡雪裡方面に於て、熊狩りの快舉を企てたこともある。君父母尙健在し、女二を擧ぐ、家兄卯吉氏亦全居す。釧路町は、君が自治制施行以來、町事に盡せし功勞を表彰すべく、曩に銀盃一個を贈りて、其の紀念とす、以て君の公事に對する一斑を知るべして、其他の善行に依り、木杯等の受領亦少からずである。

茅野滿明君

釧路町西帯舞
運送業町議員



茅野滿明君

茅野滿明君は、其の事業の上に於ても、若くは公人生活の上に於ても、尙ほ未成品である。而も君の價値は、未成品なるが故に何等損傷する所なく、寧ろ將來ある未成品として、前途を待望すべしである。君明治七年三月廿日、山梨縣北巨摩郡篠尾村に生れ、普通學を郷

の小學に修め、爾來は獨學せりとのことなれば、君には系統的の學歴はないのである。明治廿三年五月、牧畜經營の目的を以て釧路に來る。君に來道の動機を與へたるは、兩館に在る金物商進藤榮太郎氏が、親族關係者として、常に本道の事情を傳へたるためである。君は來釧後直ちに、實務見習として、釧路共同牧場(在

庶路)に入りて、畜産上の實習をなしたのである。在勤二年にして獨立經營に移り、十勝國大津村長白に地を相して、目的の第一歩を踏むたのである。全卅二年牧場經營の傍ら、資本金四千圓を以て合資會社大津解會社を創立し、其の業務執行者となりて、運送事業に従事したが、故あつて在職一年餘にして退き、全卅四五の二年間、鮭及び鯉の漁業を營みたるも、由來漁事に慣れざることを、忽ちにして失敗に終つたのである。後商店を開始し、米穀雜貨の販賣を營みたるも、營業僅かに二年にして、何れも失敗の歴史に終つたのである。此間畜産業に於ては、牛畜馬匹の養殖を圖りて、適當の利益を收めたるも、漁業其他の失敗のため、勢力を此方面に奪はれ、目的事業の發展を見るを得なかつたは、君のために大に遺憾とする所である。全卅七年十一月、君は大津村の事業に離れ、釧路 轉住して、現今の三上運送合資會社の前身たる三上運送店を創立し、其の司配人となつて、釧路の實業部に活動したのである。在店二年有餘、釧函間鐵道は、將に開通せ

んとする機運に向つたので、君は獨立して運送業を開始したのである。時當に明治四十年三月である。君が來道以來は、現はれたる業務上の變遷は叙上の如くで何等成功の稱すべきものはないのであるが、君は不成功の裡に功を収めつゝ、序次に其の勢力を伸張して居る。君は既に釧路運送界に在りて、一骨頭を抜き、著しき成績を擧げて居るが、單に之を以て君は満足すべきでない。釧路の將來には深き趣味を懷き、資力の許す程度は於て、土地の占有に腐心して居る。是れ旋ては君が、將來に向つて飛躍を試みんとする前程で、君の運命は、全く未來に屬するのである。君寡言、多くを語らざるも自信に厚く、昨夏補欠選挙の行はるゝや、大多數を以て町會議員の選に當り、常に政争の外に超然して、所信の遂行に努め、又釧勝北運送同盟會の副會長として、全業の利福を圖つて居る。君、子なく、家庭の寂漠を感じる如くで、園藝は其の最も好む所、春採村に一万三千餘坪の花園を開きて栽培に熱心し、讀書、乗馬は亦君の大に好む所である。

前田政八君

阿寒郡徹別村
農牧場管理者



前田政八君

貴族院議員前田正名氏の所有に屬する、阿寒郡徹別村字阿寒湖畔の一步園は、地積實に五千町歩餘を有する、釧路國唯一の大農牧場で、前田政八君は、直接其の經營の衝に當る責任者である。君が實業界の人となつて農牧業に其の手腕を揮ふに至つたのは、極めて最近のこと

ことに屬して、君の過去は、全く屬僚生活に在りて、官海の片隅に游泳したのである。試みに君の過去の生涯に觀れば、君は明治七年十二月廿五日、佐賀縣藤津郡鹽田町大字馬場下に生れ、全廿三年郷里に於て、小學校の課程を卒へ、全廿八年六月まで、東京神田敬勝學館に在りて、中學程度の業を修め、翌廿九年八月、

東京工手學校土木工學科に入學、全卅一年三月全科を卒業し、更に東京達英舎に學びて、英學を専修したのである。而して出京以前明治廿八年五月までは、郷里の塩田尋常小學校訓導(本科正教員)となりて教鞭を執り、工手學校卒業後、全卅三年五月始めて本道に來りて、北海道廳技手を拜命し、室蘭支廳在勤として、全卅七年三月まで勤續し、全時に北海道廳屬となり、札幌支廳第二課長を命ぜられ、全四十一年九月退官、全四十二年五月前田一步園の管理者として、釧路に來たのである。札幌支廳退職は、札幌區外五郡産牛馬組合副組長就職のためで、君は副組長就職後は、専ら育馬産牛の事業に勉め、實業部面の趣味は、此時始めて覺へ得たのであらふ。當時北海道會には、牛馬税賦課の提案あり、斯の如きは畜産業の發達を阻碍する、極めて大なるものあれば、札幌産牛馬組合は、其の主動となりて道會に迫り、當局に其の惡枕なるを覺らしめて、遂に課稅案を撤回せしめたのであるが、君は組長欠員中の副組長として、大に手腕を揮ふたのである。而し

て前田正名氏の知遇を得たのも、此の時代に在りて、君の手腕は、前田氏の認識する所となつたのである。君の札幌産牛馬組合在職中、恰かも釧路町は、町長詮衡の時に在りて、一部の間には、君を條件付き助役(町長昇進の意味)に推舉せんとし、君も其の交渉に應じた如くであるが、事の遂に行はれなかつたのは、君のためには、幸か不幸かは、容易に斷すべからずで、君の銜録は、釧路町政の上にも、當に現はれんとしたのである。前田氏は一步園の事業の全部を擧げて君に託し、其の完成を求めんとした、君は其の知遇に應ふべく、事業經營の任務を荷ふて、阿寒湖畔の人となつたのであるが、君は今に於て、其の助役たらさりしを、喜んで居るのである。而も君は、一步園の管理者たる當時の感想を語るに、多年官廳に職を奉し、全然利害の圏外に立ち、形式的の事務に慣れ來りたる者が、此の創始的の大事業の經營に當るは、所詮は不可能に屬して、如何にして遂行の途を求むべきやを苦惱し煩悶し、殆んど策の施す所を知らなかつたと云ふが、是れ君

が謙讓の言に過ぎないので、胸底既に何物かを藏めてあつたのは、其の事業經營の跡に見ても、肯肯さるゝのである。即ち君は、來任の翌年に於て、地積の成功二千三十町歩、馬匹の増殖三百二十三頭を得、本年更に地積二千五百町歩を成功し、馬匹百三十頭を増殖したる如きは、蓋し異例に属して、之かために君は、資金七万七千餘圓を費し、現今成功中に属する地積は、尙ほ五百九十餘町歩あり、明年を以て全部の付與を受くる見込みに在りと云へば、法定の成功期間（明治四十九年）に先つ數年前に、事業を完成するは、拓殖界の美事たるを失はないのである。君の實業部面に於ける處女劇は、一步園の舞臺に於て演せられ、其の妙技は認識されたりとするも、由來實業界の事は、時に一進一退ありて、容易に端睨すべからざるものあれば、蓋し君の眞價値は、尙ほ未知數に属するのであらふ。君父母尙ほ健全に郷里に在り、夫人多代子との間に二男を挙げ、清福家庭に満つば亦多幸なりで、嗜好としては特記すべきものなきも、讀書は其の好む所である。

城川竹次郎君

阿寒郡徹別村
木材兼土木業



城川竹次郎君

城川竹次郎君は、明治七年四月十一日、富山縣婦負郡古里村字長澤に生れ、當時本籍地は旭川町一條通十二丁目三番地に在るも、阿寒郡徹別村四十九線廿八番地に現住して居る。木材及土木請負を其の營業とし、未だ成功の域に達せりと云ふを叫ぶるも、君の生涯は、

徹頭徹尾奮闘の歴史である。此の意味に於て、君は世の凡俗者流と、稍や類を異にするに云ふべきで、阿寒郡來住以來、地方の交通不便を慨し、私費一萬圓を投して、道路の開鑿、橋梁の架設等に力を致したる功績は、永久に没すべからずである。君は郷里に於て普通學を修め、意を本道に致して、身を立てんとするもの

如く、明治十九年渡道せしも、故あつて果さず、全廿三年始めて小樽に航し魚商を營む、是れ君か本道の地を踏みたる第一歩である。後去つて宗谷に到り、更に石狩町に入り、此間漁夫となりて、具さに辛酸を嘗む。其後札幌、夕張等に於て土工夫となり、鳶夫となり、杓夫となりて、行路愈々險惡を極めたのである。而も君は世の逆境に掉して、益す意思の強健を加へ、心膽を鍛練したのである。全廿四年石狩川汽船會社の水夫となり、後外國渡航を企てたるも果さず、遂に歌志内炭山に到りて礦夫となり、更に惡戰苦闘を重ねたのである。尙し君が薄志弱行の徒であつたならば、礦夫として今尙ほ社會の下層に、人となつて居るかも料るべからずであるが、君は常に暗黒の中にも光明を認めんと、向上の意氣に驅られてあつたのである。全卅三年君は前方稍や光明を認め、獨立して木材及び土木業者として旗を擧げたのである。即ち空知、天鹽、上川方面に於て、奮戰更に健闘したのである。此の時代に於て、君は稍や得意の域に達して、序次に事業を擴

張して展開したのである。君が此の時代に於ける土木事業中、特に記憶すべきは、石狩川の浚渫工事で、此の事業に依つて、君は少からぬ利益を収めたのである。由來本道の木材事業は、西海岸方面に重きを措かれてあつたのであるが、君は東海岸の有望なるに察し、阿寒郡一帯の山林には、少からぬ興味を拂ふて着目し、全卅九年十二月、阿寒郡前田一步園附近の林野を跋涉して、製材乃の豊富なるを觀取し、此に愈々來住の決意をなしたのである。君は阿寒郡材野の踏査に依り、製材乃の豊富なるを認めると共に、附近一帯の更に礦産の無盡藏なるには喫驚し、將來礦産界にも手を伸べんとの底意のあつたのは勿論である。當時の附近の地は、單に土人の足跡を印するのみにて、道路なく橋梁なく、交通頗る不便を極めてあつたので、君は先づ交通を便にするを急務なりとし、私費一萬餘圓を投して、交通上の便を開いたのである。現今舌辛村以北十三里の間が、人馬の往來するを得るに至つたのは、全く君の賜物とも云ふべきである。君は阿寒郡來住後、直ちに

事務所を湖畔に置き、盛んに製材に従事したのであるが、附近は忽ちにして、四十餘月の民家を作るに至つたのである。湖畔の事業は將來永積の目的に依りて開始したのであるが、或る事情のために中止の餘儀なきに至り、遂に全四十一年十二月を以て廢棄したのである。是より先き君は、阿寒川の水利に依りて、舟楫の便を開くは、地方の交通上若くは繁榮上、利する所甚だ少からざるを思ひ、曩に石狩川浚渫の經驗もあれば、當局に謀りて、浚渫工を起すに至つたのである。當時阿寒郡一帯は、作物不良のため農民の困憊少からざりしかば、作業者の大部分を農民に採りたれば、直接間接に地方を利したるは、知るべしである。而して君は、四十二年十月、阿寒官林に於て再び製材業を起し、事務所を徹別村に置き事業に努めて居る。君は斯の如くして運命の開拓に心腐し、向上更に發展を策しつゝあるが、往年の落魄時代に想到したならば、感慨蓋し無量ならざるを得ず、百難來るも屈せざる意思の強健は、遂に能く君の今日を致したのである。

溝江定一君

足寄郡足寄村
開墾事業



溝江定一君

阿寒郡開拓の卒先者として、全郡の開発史上に一異彩を放つは、溝江定一君の奮闘歴史である。君は明治二年五月十五日、青森縣弘前市に生れ、在弘前市なる朝陽學校、東奥義塾等に學びて、漢學の造詣は淺からざるものありと云ふ。君夙に本道移住に志あり、明治二

十年單身渡道して根室に來る、是れ君が本道に人となりたる第一日である。君の來道の目的は、漁業に依り身を立てんとするもの、如く、先づ其の漁利のある所を採攻せんと、東海岸一帯の地を往來し、根室地方の有望なるを認め、遂に根室を全地に求めたのである。爾來七年に亘り、全地に於て漁業に従事したるも、

張一弛、成敗容易に定まらざりしも、最後の打撃に一敗地に塗れて、再び起つを得なかつたのである。此時恰かも日清戦役に際し、兵役の関係上、飯國の餘儀なきに至つたのである。平和克復して再び渡道し、前の失敗を回復せんと、漁業の計畫をなしたるも、根室地方は、比年漁況不振に傾き、回復の容易ならざる實情に在りたれば、方向を轉して開墾事業を企て、全廿九年六月、家族一名を伴ふて十勝國帯廣に赴き、知己を介して土地の撰定をなしたるに、足寄郡一帯の地の有望なるを認めれば、翌三十年土地貸付の手續を了し、全時に足寄郡に移住したのである。當時足寄郡の地は、人煙全く稀薄に、十勝國利別太より行程十二里餘の間は、道路なく橋梁なく、唯だ僅かに舊土人の往來せる經路あるのみで、鬱蒼たる樹林は、茂生の野草に根を包まれて、行歩極めて困難であつた。従つて物資の搬送には、最も困難を極め、時に米鹽に欠乏を告げ、河川に魚族を漁り、野外に菜根を求めて、辛ふして饑餓を凌きたる如きも甚だ尠からず、其の慘擔の狀は、

今に於て到底想像すべからずである。此の困難時に際して、堅忍克く努め克く脚み、以て其の開發に腐心したる功績は、君に於て始めて之を見るべきである。爾來君は、此の困難に打勝ち、奮闘更に健闘して、前方僅かに其の曙光を認めれば、此機に於て盛んに移民の招來に力めたのである。而して全卅五六年の頃に至り、足寄郡も漸次に社會に紹介され、移民も日を迫ふて増加の形勢を示したれば、此に愈よ土着の決心を固め、銳意事業の發展と、地方の開發に腐心したのである。全卅七年農林經營の傍ら木材事業を開始したるも、元來斯業に經驗なく、且は日露戦役のため、事業界の不振を來したる結果は、遂に失敗に終りたれば、全時に之を廢起して、専ら農事の經營に力を注ぎ、今や大地積を有するに至りたれば、成墾地の全部は小作人に貸付し、君は其の監督をなすに留めて居る。明治四十一年三月北海道廳は、全道の拓殖功勞者を表彰するに、君に對し「定一、温厚謹直、能く農事ニ勵ミ、公共事業ニ努ム。常ニ一村ノ繁榮ヲ念トシ、移住者ノ便宜ヲ圖

ルコト十年一日ノ如ク、又永ク調査員タリ。定一起業以來、屢次蹉跌ヲ招キシニ抱ラス、尙ホ能ク今日ノ成功ヲ致セルハ、蓋シ非凡ナル精力ノ賜ナリ」云々、以て君が性行閱歷の一斑を窺知するに足るべしである。君が奮闘の歴史は、既に斯の如くである、而して君が公事に忠なるも亦尋常一様ならず、明治卅二年足寄郡各村戸長役場設置に際しては、卒先して役場敷地時價三百圓以上の土地を提供し、尙且つ建築費に七十餘圓を寄附し、其他學校道路等の建設にも、敢て人後に落ちすと云ふに至つては、益す其の性行の美を發揮して餘りありである。君公職としては、足寄郡總代人、學務委員、農會副會長、全代表者、納稅組合長、農商務統計調査委員等、総ゆる公職を一身に集めて、村治の進善に貢献して、更に倦む所なしで、君の如きは、足寄郡開發の恩人として、大に敬意を拂ふべしである。君男四、女三あり、男二、女一は、修學のため出で、他に在り。君亦家庭の主長としても多幸なりで、前途の祝福は、甚だ喜ぶに堪へたりである。

佐々木市四郎君

足寄郡蝶澤村
農業兼蠶繅業



佐々木市四郎君

釧路支廳管内に於て、農産地として最も多望の將來を有するは、足寄郡一帯の地で、全方面の開發如何は、直接間接に、釧路町の經濟上の消長をなすは勿論である。佐々木市四郎君の如きは、夙に全郡に移住して、地方の開發に盡瘁したる功績は、甚だ尠からずである。

君は明治七年六月廿一日、長野縣南佐久郡畑八村に生れ、農を以て其の家業としてゐるのである。郷里に於て高等小學の課程を卒つた以來は、農事に従事してあつたのであるが、本道移住に意あり、明治卅五年四月始めて十勝國中川郡本別村に移住したのである。君は來道後直ちに農業の經營をなさんと、本別村に於て土地

の撰定をなしたるも、容易に適當の土地を發見せず、已むなく一時他の出願地を借受けて耕作に従事し、傍ら各方面に向つて、土地の撰定をなしつゝあつたが、足寄郡の頗る有望なるを觀取し、現住の地即ち足寄原野廿二線に於て撰定し、出願貸付を得て、全家を此に移したるは、全卅八年十月である。爾來農事の經營に専念して、全地を成功し付與を受るに至つたのである。由來君は、郷里に在りても公共の念極めて深く、大に居村のために奔走する所あつたが、人跡未だ稀なる足寄郡に移住して以來は、地方開發の念を更に深くし、移民招來の上に盡す所あり、螺灣村の今日ある以所は、君等の力に因る頗る大なりである。晩近君の居村が、移住者日に加はり、地方の開發愈々盛んならんとするも、交通機關極めて不備に、驛遞所の設置もなく、往來者の不便少からざるため、君は卒先して官設驛遞の設置を當局に迫り、其の設置と共に驛遞取扱人となつて、大に旅行者の利便を圖つて居る。君の性行は前にも云ふ如く、地方的公共心に厚きために、本村居

住後も獨り自家の經營にのみ腐心せず、地方公共事業に狂奔するを以て、往々にして自家の利益を犠牲にすること尠からざるも、君は更に之を意とせず、寧ろ斯の如きを以て、自家の名譽なりとして喜んで居るは、其の一斑が窺はるゝのである。此の故に居村民人の、君に對する信用は極めて厚く、足寄郡各村の戸長役場設置以來は、常に總代人となりて、村治の上に貢獻して居る。現今君の公職とする所は、足寄郡足寄村總代人、足寄郡足寄外三ヶ村衛生組合伍長、足寄村第四區納稅組合組長で、曾て郷里に在りては、人命救助のため縣知事より特に賞與されたることもある。君教育事業に熱心に、學事の獎勵には甚だ努むる如くで、地方に篤學の士多きは、何よりの幸福と云ふべしである。君の事業は、未だ以て全村に範を垂るゝに足らずとするも、尙ほ年壯氣鋭なるものあれば、將來の成功は豫期するに難からずであらふ。君の名尙ほ、餘り多くを聞かざるも、唯だ公共狂を以て見るべきで、君の美質は、全く此に在りと云ふも、過賞にあらずである。

上田勸兵衛君

厚岸町若竹町
漁業兼海産商



上田勸兵衛君

上田勸兵衛君は、厚岸に於ける巨商である。

而も君の如く、赤手克く産を興して富を成せる者は、立志編中の人として、之を推彰するも敢て過賞ならずで、君の自叙傳は、能く其の奮闘的生涯を語つて居る。即ち傳に曰く「予は嘉永元年六月廿七日、滋賀縣滋賀郡大津町

に生る、勸七の五男、今井氏を娶り、一男一女を擧ぐ。少壯志を商事に致して、屢次京坂地方を往來せしも、常に失敗に終り、父兄に累を及ぼす甚た妙からず、偶々家兄諱すに、男子失敗の地に戀着せんよりは、去つて他郷に出で、奮闘を試むるに若かさるを以てす。即ち妻子を棄て、東京に到る、時に明治十四年七月、

携ふる所僅かに五十金、家兄の知人西山氏(陸軍大尉)に會して、一身の方向を托す。然れども全氏は軍籍の人、商事には些の便宜なかりしも、全氏兄某氏函館に在れば、添書を求めて函館に兄某氏を訪ふ。蓋し北海索漠の地、人跡尙未だ到らず、遺利の拾ふべきを思ひ、大に期する所ありたればなり。而も事、志に反して失敗相踵き、落魄を極む。此時恰かも西山氏宅に於て、厚岸の人倉前藤吉氏に會す。氏は厚岸に妓樓を營む者、予の悲境に同情して、若干の力を添へむことを誓はる。眼前の急は、氏の好意に頼るの是非を判断するの餘地なく、直ちに厚岸に隨行し、全十五年五月以降、二星霜を全樓に勤務す。其間行路の嶮惡、人情の浮薄に悟る所あり、他日立脚の資に充てんと、堅く勤儉貯蓄を守り、零碎の微と雖ども之を蓄積す。全十七年五月、倉前氏に自家の志望を告げて全樓を出で、若竹町に一戸を構へて、木炭販賣業を開始す。蓋し予の生涯中、悲惨の最も多かりしは此の時代に在りて、渡道奮闘の第一歩は、實に當時の地盤に踏まれたり。即ち

身は獨立自營の天地に入らざるも、據るべき資力なく信用なく、唯だ勤勉努力は運命の開拓者たるべければ、晨には星を載き夕には月を踏みて、刻苦是れ努め、勤勉是れ勵み、以て一步は更に一步を進めたり。斯の如くして三年を経過し、此間若干の資力を蓄へ、世の同情と信用も亦昨の如くならざるを得れば、全十九年九月青物店を開き、更に米穀雜貨を合せ、漸次に業務の隆昌を見んとす。顧みれば渡道幾數年、志望稍や其の所期に近きたれば、始めて飯省して先考の墓に展し、家人知己に接して懷舊の情を遣り、且つ當時の債務を整濟し、厚岸永住の計をなして還る。全廿五年五月海産物の賣買に従事し、翌廿六年以來は漁業を兼營し、爾來年と共に事業の發展に努め、全廿九年三月京都市に店舗を開き、長男忠次郎をして之を主營せしめ、以て今に至る。明治廿七八年日清戦役に際し、對清貿易の打撃甚太しく、生業たる海産物賣買の上に蒙りたる損害夥多なりしは、營業上の一大損失なりしも、幸ひに恢復するを得たり。全卅八年日露戦役後、樺太

島に漁業を營みたるも、三年にして之を中止す。若夫れ厚岸に於ける鰯釣漁船の改良に至つては、若干資を投して、聊か斯業の發達に利せるを思ふ。全卅八年十月、近隣火を失して、居宅及び貸家十數棟を烏有に飯せしめられたれば、即ち居を現在の處に移し、益す事業の發展を圖る。是れ君が自叙傳の大要である。想ふに君の如く、徒手空拳、克く今日の成功に贏ち得たるは、活きたる時代の教訓として、大に之に學ぶべしである。君の公歴は、明治卅三年自治制施行と共に、擧げられて町會議員となり、町村經理に力を致し、全卅五年厚岸漁業組合頭取に任じ、全卅八年厚岸水産稅區會議員となる、其他全卅六年大日本帝國水難救濟會北海道地方委員、大日本武德會北海道支部委員を囑托せられ、又日本赤十字社々員たり。君信義に厚く、慈善に富み、德行夙に所在民人の認むる所となり、景仰甚だ措かざるは、美なる性情の流露として、最も表彰に値ひるのである。蓋し君は、厚岸町元老の第一人として、地方人物史中の首班を以て居るべきであらふ。

納谷留藏君

釧路町真砂町
醬油味噌製造



納谷留藏君

釧路町に於ける、唯一の醬油味噌製造業者として、比年益す其の事業隆昌に努めつゝある、納谷留藏君は、嘉永二年十月五日、秋田縣南秋田郡舟越村の産である。明治四年志を立て、渡道し、前後九年國館に在住したのである。當時本道は、開拓草創に属して、徒手身を立るに、最も利便多かつたので、君も此に意を用ひたのである。渡道直ちに外國商館(英國商人)に入り、商事に執掌したのであるが、在館五年にして退き、獨立して艦船賣込商を開始し、此間大に利益するものあつたのである。全十二年本道東海岸の有望を覺り、根室に轉住せんとして、途次釧路を過ぎたるに、更に釧路の

有望なるものありたれば、足を此に留めて、遂に永住すに至つたのである。直ちに居を現住の所に定めて、菓子製造業を開始し、全十九年まで營業を繼續したのである。後更に雜貨荒物商を開き、兼ねて木材採取販賣業を營むたのであるが、君が最も得意の時代は、此時に在りて、營業上の成績頗る良好に、後年の基礎は、全く之に依つて造られたのである。全廿三年従來の業務を擧げて廢棄し、新たに現今の醸造業を起して、全力を之に集中したのである。蓋し君の利益の特に多かりし木材業を廢棄して、醸造業に轉せし以所は、唯夫れ漸次老境に入りて、多數の従業者を使役するは、所詮は其の煩に堪へざる事情ありしたために、比較的繁劇ならざる醸造業の、大に有望なるものあつたからである。而して君が、釧路町に永住の人たらんとせし動機も、此時に造られたので、曾ては更に土着の念なく、従つて永久的の計畫もなかつたのである。全卅五年業務擴張の一端として、家屋を改造し、盛んに醸造に意を注ぎ、事業の發展に努めたのである。現今君の醸

造する醬油は、松、竹、梅及び山一印の四種で、造石高實に三百五十石、其他味増百石内外を出し、販路は大部分を釧路町及び其の附近に求め、十勝方面にも亦輸出して、釧路六、十勝四の割合に依りて販賣されて居る。君兄弟二人あり、幼年にして父を失ひ、僅かに母の手に依りて保育され、家計亦裕かなりと云ふにあらざりしかば、其の幼年時代に於ける困厄は、洵に想ふべしである、君が年少夙く既に本道に移住して、處世の途を求めんとし、而して勤勉努力、克く今日を致したるは、幼年時代の困厄、君を發憤せめし向上せしめたりと云ふべしで、君の生涯も光輝ありかなである。資性、温厚にして寡黙、名利を争はず、曾て公事に現はれたる事績なき如くなるも、是れ寧ろ君の性格美を語るもので、寄附其他に依り表彰甚だ少からすである。君男二、女一あり、長女は函館高等女學校に、長男は函館商業學校に在りて共に學事に勉め、末子は尙ほ幼にして家に在り。家庭常に和氣に満ちて、清福甚だ掬すべく、君は赤十字社正社員である。

中谷虎雄君

釧路町西帶舞
漁業家



中谷虎雄君

今に於て之を見れば、稍や勢力の失墜せし如き觀なきにあらざるも、過去の歴史に於て、最も異彩を放ちたるは、中谷虎雄君の奮闘生涯である。君は事業に於て若くは財力に於て大なる歴史は有せざりしとするも、公人生活に於ては、最も活動したる人である。君安政

六年三月七日、福岡縣福岡市西新町に生れ、藩校修猷館に學び、明治十三年東京に出て、三菱商業學校に入る。全十五年五月業を卒へ、直ちに三菱會社員となり、在社三年にして退く。全十七年五月時の根室郡長和田正苗氏に伴はれて渡道、根室に來りて根室郡役所書記となる。全十八年釧路郡役所に轉し、翌十九年根室に

復版し、翌二十年再び釧路に來り鳥取村戸長となり、在職僅かに三ヶ月にして退職、實業界に入りて水産組合の創立に努め、其の書記長となり、漁業組合の創立と共に頭取を兼ね。全廿三年組合を辭し白糠に於て漁業を營む、是れ君が獨立して漁業界に身を投せし第一年である。爾來漁業を以て其の生業となし、一意事業の隆昌に専念して、亦他を顧みるの遑なく、全廿六年魚粕製造の改善に意を用ひ、大に斯業に貢献する所あり。全三十年東京に於て開催せる、第二回水産博覽會に魚粕を出品して、有功二等賞を受け、更に銳意して魚粕の改善に力め、模範的魚粕製造所を建設する等、其の功業甚だ見るべきものがあつた。全四十年南部方面に使用する、練旋網漁業を行はんと、長谷川藤次郎氏等を伴ひ來つて、卒先して旋網漁業に従事し、練漁船に汽船を應用せるは、實に君を以て其の嚆矢とするのである。是より先き明治卅四年の頃君は、釧路線鐵道の開設と共に、海陸聯絡の機關たらしめんと、資本金一万五千圓を以て、海陸運送株式會社を組織して其の

社長となり、解業及び鐵道貨物の取扱業を開始したるも、時機尙ほ早くして、遂に全卅六年會社は解散の不幸に終つたのである。全四十年君は、在來の練漁業の外、更に石川縣能登半島に於て、鱒の大敷網を經營し、乾坤一擲の事業を試みて、巨利を博せんと企てたるも、時や君に非にして、全年は若干利益を得たるも、翌四十一年に於て、二万圓餘の損失を生じて、事業は全く失敗に終り、遂に中止の餘儀なきに至つたのである。爾來君は事業上の失敗の位地に立ちたるも、尙且つ旋網漁業者として、現在に及んだのである。而して君は公人としては、明治三十年選はれて釧路郡總代人となり、全卅三年自治制施行と共に町會議員に推され、議長代理となりたるも、秋元幸太郎氏の釧路町長就職を見るに及んで、君は辭して出です。後秋元氏の滿期退職の時に於て、再び候補に推され當選を見たるも、石川縣下で於ける事業經營のため、遂に辭任したのである。君が郡總代人時代より、初期の町會議員たりし當時は、町政部面の沸騰特に甚しく、正義、公民兩派

の確執は其の極度に達し、形勢頗る暗愴たる時に當りて、君は正義派の雄鎮として、頓化組の牛耳を握り、町政料理の上に活躍を試みたので、君は公人としては釧路町の先輩である。若夫れ君が教育事業に力を致せし功績は没すべからずで、明治廿三年教育機關の甚だ不備なりし時に於て、英國人ミス、ペイン嬢を援けて、英和女學校(聖公會隣地)を設立し、其の校主となりて女子教育に盡瘁し、全卅六年頃に至り、漸く町の教育機關の完備し來り、全時に英國傳道會社の補助も絶へたれば、遂に閉鎖したのである。而して埋立事業當時に、秋元氏等と共に個人經營に反對し、町營派の急先鋒となりたる如きは、町民の當に感謝を拂ふべきである。君男三、女二あり、長は米國に、次は東京成城學校に、三は獨逸協會中學に在りて學事に勉め、二女は家にある。嗜好としては、唯だ讀書あるのみで、聖公會に屬する基督信者である。釧路町は君の町事に盡せる功績に酬ふべく銀盃二個を贈り、其他木杯の受領少からざるものあるは、以て其の一斑を知るべしである。

奥田平藏君

釧路町西幣舞
新聞取次販賣



奥田平藏君

倘し新聞紙が、時代文明の先驅たり、主体たりとすれば、其の取次者たり販賣者たる、聚文堂奥田平藏氏の如きは、當に新聞紙に依る時代文明の、宣傳者なりと云ふべきである。君は實に釧路町に於ける、唯一の新聞販賣業者で、世上幾多の新聞紙は、君の手に依つて

讀者に提供され、君も亦新聞販賣に就ては、多大の犠牲と精力を拂ふて居る。君明治五年六月七日、鳥取縣八頭郡國中村に生れ、郷里に於て普通學を修め、明治十九年札幌に來り、札幌土木學校に於て測量術を研究、在校三年にして終る。君の札幌に來りたるは、家族を擧げて本道に移住したれば、伴はれて本道の人とな

つたのである。札幌土木學校卒業後は、全廿三年北海道廳柳本技師に随ひ、新十津川の殖民區畫地設定に従事し、全廿四年陸軍經營部測量師となりて、深川屯田兵村の區畫設定に與かり、全廿五六の二年間は、北海道廳殖民課に入り、空知方面の殖民地區畫設定に、全廿七八年は、岩見澤に於て開墾事業に従事、翌廿九年は空知郡役所雇員となり在職中、全三十年澁澤榮一氏等の經營に在る、十勝開墾合資會社の創立成りたれば、更に全會社に入り、技師長田村農學士と共に、土地の撰定に従事し、全卅三年まで全會社に在りて、測量員として勤務、全卅四年全社を辭し帶廣町に於て、委托測量業を開始す。全卅七年業務の傍ら、新聞取次販賣業を兼營す。是れ君が新聞業に縁故を求めたる第一歩で、爾來君は新聞販賣業に、多大の趣味を拂ふて、益す事業の擴張を圖つたのである。此間君は、副業として理想的の湯業を開始したこともある、今尙ほ現存する松の湯は、即ち夫れである。明治四十年、釧路函館間の鐵道全通して、釧路は交通上重要な地點たらん

とし、且つ港灣修築の機運も漸次に熟して、近き將來に於て、釧路港の愈よ有望ならんとするものありたれば、君は大に此に見る所あり、全年釧路町に本據を移して、新聞販賣業を專營したのである。當時全業者として博光堂ありたるも、全業併立するは、營業上不利ありとして、博光堂を併合し、一手に新聞販賣業を占有したのである。由來君の營業に對する方針は、絶對の積極主義に出で、巧みに廣告を利用して、營業範圍を擴張したのである。其の結果は、開業當時は、各種新聞を合せて、僅かに一千内外の讀者を有するに過ぎざりしが、現今は優に三千の多きに出でんとするは、著しき進歩と云ふべきで、夫れだけ釧路町の時代文明の宣傳をなすのである。君帶廣町在任當時は、町會議員として、町事に盡したるも、釧路來住以來は、業務に專念する如くで、赤十字正社員として、奉公の意を致して居る。父母尙ほ岩見澤町に健在し、夫妻の間に男三を擧げて居る。書畫、刀劍類は、最も其の好む所で、鑑識の明かりと云ふは、君も多藝なるかなである。

阿部 六吉 君

釧路町洲崎町
漁業家



阿部 六吉 君

勤儉力行、克く其の運命を開拓して、遂に今日の成功を致したるもの、阿部六吉君の如きは、蓋し立志編中の人として、之を推彰するも、強ちに不可ならずである。君は嘉永六年七月、福島縣二本松に生る。家素より貧なれば、幼年の時より大工職の徒弟となり、長ずるに及んで大工を以て其の家職となし、僅かに身を立てたのである。明治十一年函館に來り、大工職を繼續し、全十九年來創したのである。君が來創の動機は、別に遠大の志望あるにあらず、唯だ其の家計の困難なるより、他に職業を求めんとするに在りて、君は漁業に身を投せんとしたのである。即ち來創後直ちに漁夫

となりて、鱈釣漁業に従事したのである。是れ君が漁業界に身を投せし第一歩で、後年君が漁業に依つて、巨富を致せし地底は、此時に於て造られたのである。全廿一年獨立して、始めて鱈釣漁業を営み、漸次に事業を擴張して、漁船四艘を出すに至つたのである。此間に於ける君の奮闘は、眞に是れ精力主義の化身で、漁業の傍ら寸暇あれば、解業に勞銀を得たのである。全廿四五年の頃、昆布森村に於て昆布採取を営み、之に依つて亦若干の利益を收め、前方稍や光明を認めて、事業の上にも著しき進歩の跡を示したのである。君は渾身の精力を注ぎて、事業と共に奮戦更に健闘したのである。而して効果は愈々現はれ、鱈漁業を開始して以來も、幸ひに大過なく、得意の順境に進むたのである。君の成功は斯の如く、君の力行主義、精力主義、貯蓄主義に依つて造られたので、君の家族の総ても、亦君の力行主義に同化されて、益々家運を旺んらしめたのである。君は事業の上に於て、斯の如き成功の美果を有す、而も其の性行の善美に至つては、更に賞

揚すべきものがある。君は世路の緩ゆる辛懐に打勝ち、成功の彼岸に達したるの
 である。従つて貧者に對する同情の念は特に厚く、常に慈善を施して、自ら喜で
 且つ感めて居る。而も夫れ君の慈善は、偽善にあらず美名のためにあらず、衷心
 に出るので、曾て慈善の名を賣つたことはない、隠れたる善行を施して、陰徳を
 行ふのである。君敬神信佛の念極めて敦く、日々禮拜を怠らず、社寺のために資
 財を投する甚だ勤からざるは、如何に其の信仰に忠なるかを知らざるのである。
 君の家庭は、長女某子に大藏氏を迎へて養嗣子となし、一家堅實の美風を守りて、
 家門の隆昌愈々大ならんとするは、君が積善の徳を稱すべきである。君曾て町村
 制施行以前に在りては、町總代人として公事に盡したるも、自治制施行以來は、
 隠れて更に出でざるも、水産組合、漁業組合等のためには、常に重要な役員とな
 りて、斯業の發達改善に力を凝しつゝある。君由來名を好まざるも、善行の表彰亦
 諒からず、銀盃木杯等多數を有して居る。娯樂としては、慈善を施すことである。

松本文太郎君

釧路町四幣舞
 土木建築請負



松本文太郎君

明治卅五年の頃、増永組に在りて釧路線鐵道
 の建設請負事業に従事し、其後釧路町西幣舞
 文に居を占めて、土木建築の請負業を開始した
 松本文太郎君は、文久元年八月十五日、埼
 玉縣武藏國足立郡峯村に生れ、君の父は松本
 慶藏と稱し、世々庄屋を勤めて、手習師匠を

して居つたのである。君は其の長男で、十三歳の時、隣村舎人村高島彌右工門に
 就き、漢學及び數學を學びたと云ふのが、君の社會に出るまでの徑路である。君
 の社會に出でた第一歩は教育界で、明治十一年埼玉縣峯小學校三等授業生を命ぜ
 られ、全十五年全縣北足區郡第四學區學務委員を申付けられ、全十七年一轉して、

全縣北足立郡峯村大竹村戸長に選任されたのである。此に君の生涯は一線を劃して、教育者より村吏員に轉化し、村治の上に其の運命を托することになった。全二十年全縣北足立郡峯村聯合戸長役場に轉し、第一課勤務として在職してあつたが、全廿二年町村制施行と共に、全郡新郷村二級村會議員に當選、愈よ村政議壇の人となつたのである。全廿三年村會議員當選後幾干もなく、全村収入役に選任され、再び村吏員に復し、更に全廿四年全郡見沼代用水々路東線下四ヶ領水利土功會議員に當選したのである。此の期間に於ては、君は村吏若くは村會議員として、生涯を送つたのであるが、全廿八年に至り、心機に再轉化を來して、商業に依つて身を立てんと居を東京に移し、下谷區大門町に在りて、獨立營業を開始せんと、既に計畫中であつたが、全廿九年八月、偶々土木請負業齋藤組の需むる所となり、全組に入つて、會計事務を担当し、在店七年に亘つたのである。全卅五年六月全業者増永組に轉し、全組に在つても會計事務を取扱つて居たのである。是より先

き明治卅二年、政府は北海道鐵道敷設法を制定して、大に本道の交通機關を整全せんとし、北海道廳に鐵道部を置き、鐵道の建設事業を開始せんとしたので、各地の土木業者は、競ふて本道に來り、鐵道工事の請負に従事したのである。君の入店せる増永組も、本道の鐵道工事に着目する所あり、即ち君は、本道出張所の會計事務に當るべく入店し、全時に釧路に出張して、釧路線鐵道の請負工事に従事したのである。是れ君が釧路町の人となりたる第一關係で、爾來君は増永組釧路出張員として在住したのである。全卅九年増永組主人死去し、事業廢絶の餘儀なきに至つたので、君は現住地に居を占め、獨立して土木建築請負業を開始したのである。君が實業方面に入りて以來、眞に獨立したるは此時に在りて、鐵道其他の請負事業に従事して、現今に及んだのである。君資性温厚篤實、風容の極めて柔和に、一見長者の如くなるは、君が家の世々庄屋たりし、家庭の薰陶にも因るのであらふ。近來健康甚だ勝れずとなし、東京に在りて靜養を加へて居る。

吉田七右衛門君

銚路町洲崎町
漁業家



吉田七右衛門君

渡道既に二十年、迂餘曲折、波瀾の生涯を脱して、前方飛躍の光明に臨める吉田七右衛門君は、兵庫縣但馬國濱坂町の産、明治八年二月廿二日を以て生る。家世々海運業者なるの故に依り、將來海員を以て身を立てんと、明治廿三年郷里を出で、東京商船學校豫科に入學、在學二年にして退き、直ちに乗船して實修に就たのは、君が處世の第一歩である。爾來宇智浦、惠比須、仁壽の各汽船に、事務員として在職し、全廿五年より廿八年までの間を、海上に送つたのである。當時父母は既に本道に移住し、小樽に在りて漁業経営中であつたので、君も中途志を變して、漁業家たらんと念

を起し、全年四月渡道したのである。渡道直ちに利尻島に到りて、石花菜の採取に従事したのである。是れ蓋し全島に於ける、石花菜採取の嚆矢で、君は之に依つて大に利益を収めたのである。君の採取は、志洲島羽より數十の海女を傭入れたので、在島民との間に物議を醸成し、遂に暴力に依つて相争ふに至つた結果は、北海道廳は其の蕃殖試験を行ひ、海岸三里の區間を限定して特權を與へ、君は收得せし權利を他に轉賣し、更に鯨漁業に従事したのであるが、一敗地に塗みれて、再び起つを得ざるに至つたのである。時恰かも明治三十年、去つて島牧郡に到り、堤三郎氏の漁場使用人となり、漁季終れば函館筑前善次郎氏の、千島樺提島漁場の管理人となりて、鱈、鮭の漁業に従來したのである。全卅一年五月始めて來銚し、豊島漁場の督監となり、全卅三年まで在勤、全卅四年銚路白糠水産組合検査員となり、全卅六年に至り白糠に於て、獨立して鯨建網を行ふたのである。此間君は勝山幸藏氏等と共に東洋社を起して、雜誌新蝦夷兒を發刊したこともある。

君が獨立して白糠に於て、始めて鯨漁業を行ふた當年は、漁況大に可に好く亦抄からさりしが、翌卅七年は最も不況に、損失頗る大なるものあつたので、君が此間に於ける惡戰苦闘は、殆んど名狀すべからざる慘境を極めたのである。而も君が堅忍不撓の精神は、克く此の難關を突破して、翌年も辛ふして漁業を繼續したのであるが、天は君を棄てず、全年數千の利益を收め得たので、地盤稍や鞏固に成り、爾來建網に旋網漁業に、幸運重ねて來り、今や實に鯨旋網漁業三ヶ統を經營すに至り、益す其の羽翼を伸べんとして居る。君明治卅九年以來、釧路白糠水産組合評議員となり、斯業の進歩發達に貢献して怠らすである。全四十一年小樽に於て開催せる、北海道聯合水産共進會に、鯨粕を出品して褒賞を受け、全年及び翌四十二年の白糠海陸物産評會にも出品して、優等木杯を授けられ、其他教育、慈善等の寄附に依り、表彰されたること尠からずである。君才氣縱横、新進漁業家として、全業間に重きをなして居るが、家庭に子なきは君の不幸である。

池田初太郎君

釧路町幣舞町
木村兼土木業



池田初太郎君

現に釧路町の常設委員として、常に一級議員の選舉資格を有する、池田初太郎君は、其身を一徒弟に起して、今日の成功を捉へ得たる者、如何に其の時代と奮闘し、而して健闘したるかは、偶ま以て、君か成功の徑路を語りて、波瀾の生涯を踏破し來りたる、活光景を

想見すべしである。君明治五年七月四日、石川縣金澤市富本町に生れ、普通教育を卒りたる後は、直ちに九谷燒會社に入りて、技工見習となり、約二年を其間に送つたのであるが、中途志を變して、請負業澤田某の許に在りて、家根職徒弟となり、五ヶ年にして澤田某の司配を脱したのである。是れ君が渡道前に於ける處

世の徑路で、其の慘憺の状は素より云ふを要せずである。而も君が胸底深くに藏せる、希望と向上の熱火は容易に去らず、奮然志を立て、函館に來り、惠比須町廣田某の家に在りて、家根職に従事したのである。時に明治廿四年三月某日、齡僅かに十九を超へざる時である。居ること三年、君は此間に於て、勤儉大に力め、他日立脚の資を求めんとしたのである。全廿七年八月、君は若干の資を懐いて、釧路に來り、真砂町に居を占め、家根業者として、獨立の運命を啓かんとするのである。蓋し君の釧路に來るは、釧路の現在及び將來が頗る多望なるものあるを聽き、自家の運命を開展する機は、此地に在りと觀念したからである。君は開業と全時に、大に奮勵業に當つたのである、而し時代は、君の事業を益す多望ならしめたのである。此の努力と天幸は、君の事業に光明を興へて、得る所の利益も甚だ尠からずであつた。君は事業の利益に依り、餘裕の綽々たるを得、且つ全時に、何等かの展開を試みんとしたのである。即ち全三十年に木材業を、全卅四年

に土木請負業を開始して、更に羽翼を張らんとしたのである。恰も善し、木材事業全盛を極め、土木請負業も、釧路線鐵道の創始等のために、一般人氣の昂騰せるものあれば、従つて好調を呈したのである。然れども當時の木材界は、一昂一低、市況常に定まらなかつた爲めに、利益の獲得亦容易ならず、形勢頗る混沌の裡に在つたが、全卅六年の頃に至り、市況頓に昂り、空前の好況を呈したので、此間に於ける君の利得は、頗る大なりで、之に依つて君は、稍や其の基礎を築くに至つたのである。而して好運は更に好運を生じ如くに、當時漁業方面も、形勢極めて好良に、燃料新材の市價亦昂騰したれば、前後に得たる君の利益は、甚だ尠からずであつた。是より先き君は、明治卅二、三、四の三年間は、釧路及び跡永賀村に於て、漁業を兼營し、海産物の賣買業も行つたのであるが、到る處に好成绩を挙げ、曾て失敗の歴史を作らざると云ふに至つては、如何に君が、時の利を収めたるかを知るべきで、君は全く時代の寵兒となつたのである。倘し君の來

創後に於ける事業が、波瀾なく頓挫なく、静平の裡に経過し來り、而して君は尙ほ利益の大なるものありたれば、是れ唯だ天の爲せる僥倖事で、君の手腕の認むべきなしとせんも、否なりで、君の用意の周到にして、舉措誤まらざりしと、事に當りて勤勉摯實、濫りに財を散せざりしは、君が成功の主因をなせりと云ふも不可ならずである。即ち君は、克己精勵、能く利し能く積みて、遂に今日の成功を捉へたのであれば、或る意味に於ては、君は貨殖に妙を得たりと云ふべしである。君今次東宮殿下御巡啓に當りて、光榮多き公會堂建設に従ひ、其工を終りて奉迎に些の支障なからしめたるは、君の事業の上に於ける、餘榮亦尠からずである。君明治四十二年九月、公民権者より選ばれて、常設委員となり、町事に力を致し、又信佛の念極めて厚く、本願寺派本行寺門徒總代となりて、直接間接に、教法のため盡す所あり。夫妻の間に子なきは、君の最も不幸とする所で、善行の表彰尠からず、木杯數個を受領し、日本赤十字終身社員にして協賛委員である。

森本金之丞君

劍路町眞砂町
森本齒科院長主



森本金之丞君

由來、多士濟々の稱ある劍路町も、齒科専門醫としては、唯だ一の森本金之丞君を有するのみで、君は實に劍路町に於ける、代表的齒科専門醫たると共に、君の領分は、亦多幸多望なりと云ふべしである。君明治九年二月廿三日、東京市本郷區森川町に生れ、東京府立

中學校三學年修了後は、濟生學舎に入り、更に轉して芝區伊皿子に在る、高山齒科醫學院に入る、時に明治三十年。君の篤學と研究の熱心は、單に學校に在るを以て満足とせず、在學の餘暇、本郷區湯島天神町に開業せる、齒科醫ドクトル宮澤林太郎氏に就き、實務の練習をなし、全卅三年高山齒科醫學院の業を卒りて、

更に横濱に出で、齒科醫ドクトル米國人ハロッド、スレード氏に教を乞ふて、研究する所あり、全卅五年四月、内務省齒科醫術試験に合格して、齒科醫師として立つに至つたのである。全年七月直ちに渡道して函館に來り、全地相生町に於て開業したのである。是れ君が獨立開業の第一日で、翌卅六年四月釧路に來り、眞砂町に於て開業したのである。蓋し君の本道に來る以所は、素より東京に於て開業の意思あるも、其の開業資金を求めんために、函館に來り、更に釧路を擇びたるは、釧路の最も多望に利便多かりしためである。而して君に永住の機會を與へたるは、秋元幸太郎氏を診察治療の結果は、多數患者の懇請、辭するに由なく、遂に永住をなすに至つたのである。當時齒科的衛生思想極めて幼稚に、齒科の何たるを知らざるもの、如く、即ち秋元氏は、釧路病院長原醫學士に依り、鼻加答兒の誤診下に治療を受けつゝありたるを、氏の病患は全く齒科的に屬するを發見し、全治快癒せしめたるは、偶々爾他の疾患者をして、齒科的治療の要を認識せ

しめ、遂に今日に至りたるが、斯の如きは、醫家當然の責務に在りとするも、衛生思想の極めて幼稚なる時代に當りて、隱忍克く一般患者をして、齒科の獨在的價値を知らしめ、釧路の衛生界に更に新たなる福音を傳へたるは、地方醫界の進歩として、君に感謝を致すべきである。爾來君の名聲は大に揚り、遠近來りて治療を求むるに至りたれば、現在の位地に醫院を新築し、院務の擴張を圖り、以て斯界のため患者のため、力を致さんとするは、自他を益する甚だ少からずで、亦喜ぶべきである。君最も奇行に富み、後進の誘掖を以て快心の事業なりとし、常に貸費生を養成して、將に第一回卒業生を出さんとするは、君の性行の美を窺ふべしである。君父母尙東京に健在し、弟妹七人を有し、長弟は會社員、次弟は官吏、三弟は齒科醫學専門學校を卒業し、四弟は一高に、二妹は他に嫁し、末弟は小學に在り。而して君亦三女を挙げ、子女教育のため、家族を東京に移す等、用意の周到味ふべきである。君の日常は、運動狂に在りて、家禽、骨董も其の好む所である。

吉田 毎太郎 君

厚岸郡濱中村
水産物製造業



吉田 毎太郎 君

吉田毎太郎君は、厚岸郡濱中村に於ける元老者の随一で、其の聲望は、居村住民の齊しく景仰して、推服措かざる所である。君は嘉永六年十月函館に生れ、明治三年七月十五日、來つて現住地に居を占めたのである。蓋し君の如きは、霧多布在住の古老者で、當時尙は草創に属して、居住民甚た多からざる時に、君は既に來つて此に在りたれば、地方開發のため其の力を致せるは、素より疑ひを容れざる、功勞者たるは勿論である。君明治九年故父の業を承けて漁業に従事し、以て現時に至つたのであるが、君は始終を一貫して、鯨漁業及び昆布採取を其の營業としたのである。蓋し漁業

の事たる、浮沈常に定まらず、時に一起一倒あるは、深く怪むを要せざれば、君の事業が過去四十年の期間に於て、如何に變轉せるかは、其の波瀾ある歴史とも見るべきで、従つて此間に於ける、君の奮闘も想像さるゝのである。而も君の事業經營に對する用意は、極めて忠實に、曾て故父の事業を耻しめず、否益す地歩を進めて、基礎を革固に、斯界に重きをなす如きは、君の手腕の愈よ凡ならざるを窺ふべしで、此の意味に於て君は、卓出の才ありと云ふべしである。君明治九年昆布出産人總代人を命せられて、全十五年まで在任し、全十六年更に昆布改良頭取を命せられて、斯業の改善進歩に力を致す所あり、後年濱中昆布の聲價を博するに至りたるは、實に此の時代に於て、其の動機を造られたので、君の功績や彰すべしである。全十九年八月厚岸水産物營業人組合納稅委員となり、全二十年四月郡總代人に推され、町村經理の上に貢獻する所尠からず、其の郡總代人に推さるゝ如きは、君が當時の聲望を想見すべしである。全廿一年十一月、濱中漁業

組合頭取に選任せられ、在職四年に亘りて辞し、全廿二年三月、更に村總代人に選舉され、全廿五年四月漁業組合議員となり、全卅六年まで在職し、全年全組合は、濱中水産組合と改稱し、其の評議員となる。是より先き君は、明治廿五年四月學務委員となり、全三十年再び擧げられて郡總代人となる。全卅四年七月濱中水産税區會議員となり、爾來再選今尙は在任し、全卅九年三月三級町村制施行と共に、村會議員に當選、全四十二年三月滿期退職、全四十年六月濱中水産組合組長に擧げられ、昨四十二年六月まで在職したのである。全四十一年四月濱中漁業組合理事として、今尙は就職し、全四十二年十一月學務委員なり、全年更に水産組合評議員となつたので、是れ君が公私に於ける閱歷の一斑であるが、君は常に居村に於ける重要な位地を占め、地方の中心人物となつて居るは、積年の功、此に到らしむるのである。君資性極めて温良、善行の表彰亦甚だ尠からず、現に日本赤十字社の終身社員たる如きは、其の公事に忠なるの表証とすべきである。

中村 惣吉 君

厚岸郡濱中村
吳服兼海産商



中村 惣吉 君

現に村會議員の公職に在りて、盛んに海産物及び吳服太物雜貨商を營みつゝある、中村惣吉君は、濱中村に於ける發も推彰すべき人の一人で、君の性格美は、到る處に發揮されて、衆口の齊しく唱ふる所なるは、君の生涯の如何に光輝あるかは、以て窺ふべきである。君

慶應二年四月十九日、滋賀縣犬上郡彦根町大字安養寺町に生れ、夙に本道移住に意あり、即ち明治十六年五月廿日、渡邊して厚岸郡楠町に居を占め、吳服太物雜貨商を營む。蓋し君は、本道の遺利頗る多く、身を立るに最も便なるを思ひ、決然父母の地を去つたのは勿論で、由來晚開を以て稱せられたる、本道の東部海岸

に眼を注ぎ、其の立脚地を求めたるは、君の用意の凡ならざるを、窺ふべしである。君の渡道の當時は、全く商業に據つて身を立てんとするものゝ如くに、神町轉住以來は、専ら意を呉服太物及雜貨の販賣に用ひて、亦他を顧みなかつたのである。爾來君此の方針に依りて、事業の繁榮を圖つてあつたが、全十九年十一月現住の霧多布村に移轉して、更に業務の企て飛躍を試みたのである。此間實に十餘年、君の事業は序次に進境を示して、地盤益す鞏固を來したのである。此に於て君は、全廿七年以來、新たに昆布採取業及び水産物販賣商を兼營して、營業部面に一新生面を啓いたのである。君は斯の如くして、自家の運命を開拓し全時に、意を地方の開発に注ぎ、自他共に利せんとする如くで、去歲根室實業家の渡清團なるや、君は身を挺して、地方のため清國に於ける、水産物の市況を究めんとし、其の計画に加はり、渡清して大に得る所あり、販來斯業の改善に腐心せんとするは、最も君の性格美を推賞すべしである。即ち君の渡清は、水産業者と

して、其の唯一の市場たる清國の事情を究めんとする計畫なり、而して参加を求められて、拒絶する如きは、地方の利害は姑らく措き、面目上忍ぶべからずとし、之に赴いたので、君は多くの場合に於て、他の爲さざらんとする所を、獨り爲すのである。是れ君の性格の最も美なる所で、其他居村の公的事業に對しても、此の用意に出で、善行の甚だ尠からざるは、君の性格美を賞するよりは、地方の福利として喜ぶべきである。君明治廿九年九月、村総代人當選以來、全卅九年四月二級町村制施行に至るまで、其の職に在りて村治に力を致し、其他漁業組合議員、水産税區會議員、水産組合議員、水産物營業人組合納税委員、水産組合組長、學務委員等の公職に、努力して更に倦む所なく、功績の頗る顯著たるは、敢て此に云ふを要とせざる所で、由來濱中村が、純朴の風をなし、釧路支廳管内に在りて、模範町村を以て稱せらるゝ以所は、居村民人の性行の美は、偶ま以て此に到るは勿論であるが、君等の篤行は、亦直接間接に、其困をなすのであらふ。

松村留治郎君

厚岸郡濱中村
漁業兼回漕業



松村留治郎君

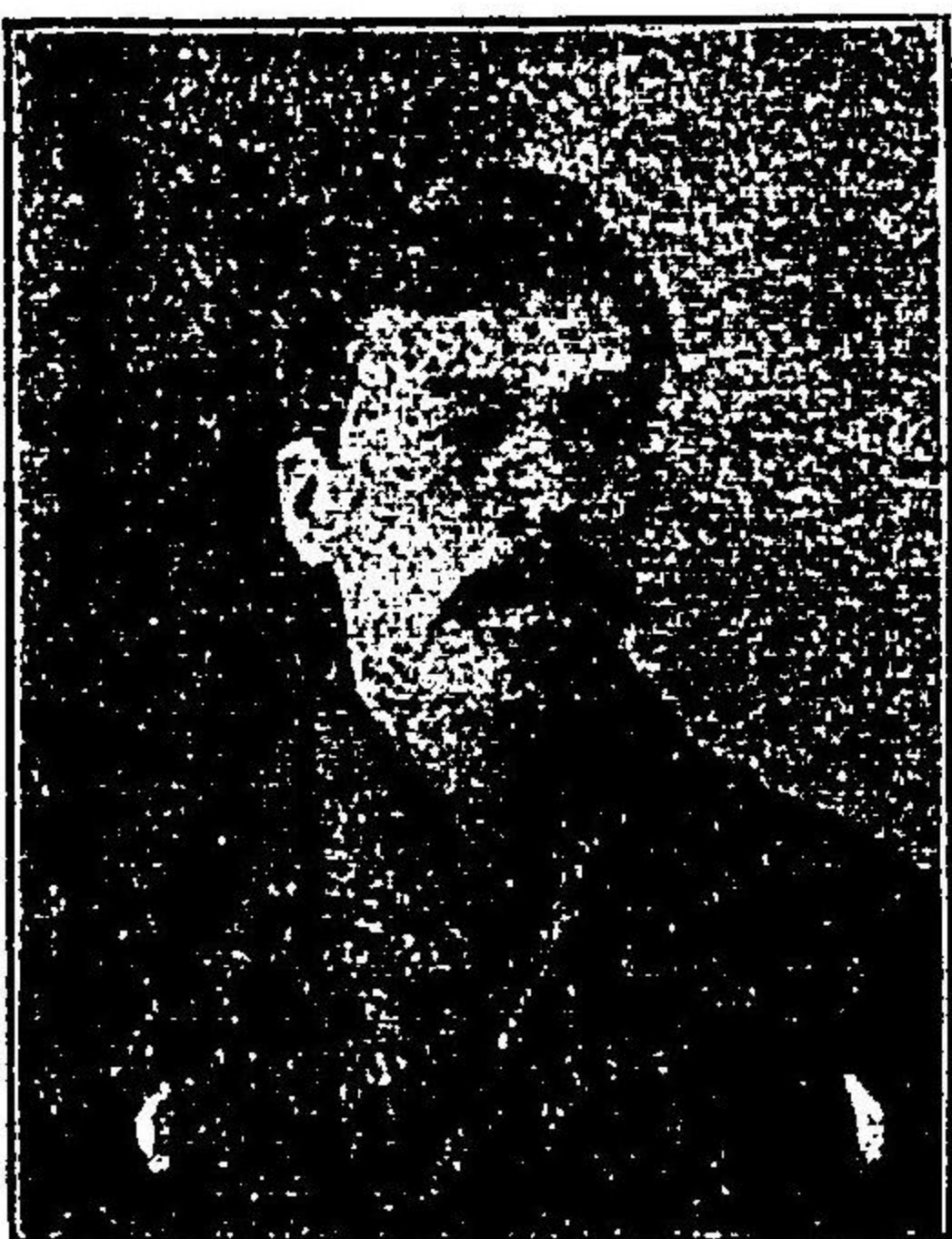
厚岸郡濱中村の重鎮として、聲望常に全村を歴する、松村留治郎君は、安政四年五月廿五日、滋賀縣東淺井郡大郷村大字川道に生れ、始めて本道に渡航したのは、明治十二年六月五日で、君は此日を以て、厚岸郡濱中村榑町に居住したのである。當時濱中村は、釧路國に於ける三大塲所として、釧路、厚岸と並び稱せられ、水産物特に昆布の生産額も多く、頗る有望であつたので、君は此に居を占めて、直ちに呉服太物商と營むたのである。全十六年四月十二日、榑町より現在の霧多布村に轉住して、更に漁業に従事し、全時に昆布の採取をも開始したのであるが、君が日本郵船株式會社

の霧多布代理店として、回漕業を兼營したのも、此の時代のことである。爾來君は、呉服太物其他米穀雜貨販賣業に、漁業に、將た回漕業に隆々の勢力を示して、地盤愈々堅實に、遂に今日の成功を捉ふるに至つたのである。是れ素より君が、商機を計るに敏に、個中の舉措、更に遺算なかりし結果に因るは、勿論とすべきであるが、亦君が堅忍不屈、善く奮闘したる賜物なるを、忘るべからずである。君公事に熱心に、居村の事、一として其の盡力に俟たさるはなく、聲望夙に具はるものあれば、明治廿三年四月、推され村總代人となりて、村治の上に力を致し、全廿四年三月霧多布水産物營業人組合納稅委員となり、全廿四年三月學務委員に舉げられ、全廿五年五月濱中漁業組合頭取に當選し、全廿六年十一月全組合議員に、全卅六年霧多布外一町四村水産組合と改稱と全時に評議員となり、全卅七年十月霧多布外一町四村水産組合長となる。而して現今尙ほ經續中に属するものは、全卅四年七月以來再選して、霧多布水産稅區會議員、全卅九年六月二級町村制施

行と共に、濱中村會議員として、更に再選今日に至り、全四十年五月濱中水産組合評議員となりて、全四十二年再選し、全四十一年四月濱中漁業組合理事となり、全四十三年五月濱中水産組合組長當選等は、其の主なるものであるが、君は斯の如く自家營業の發展を圖ると共に、幾多の公職を帯びて、鋭意努力する所、甚だ尠からずで、君は亦常に釧路稅務署管内所得調査委員となりて、稅務の上にも力を分つて居るのである。蓋し君は、居村に於ける公私の中心人物として、重きを其間になしつゝあるは、何人も齊しく認むる所で、是れ已に君の人物性行の總てを説明して、餘りありと云ふべしである。此故に君の身邊、善行の表彰すべきもの頗る多く、明治四十一年九月霧多布尋常高等小學校新築費の内、金六百圓を寄附して銀盃を受け、全四十二年十月霧多布村排水工事費に、金四百餘圓を寄附して木杯一組を授けられたるは、其の一斑を見るべきで、斯の如きは、始んど枚擧するに遑わらずである。君赤十字社事業の擴張を助け、現に其の終身社員たり。

三浦繁松君

釧路町浦見町
銀行員



三浦繁松君

株式會社釧路銀行支配人三浦繁松君は、銀行業者としての、其の手腕、其の價値を如何に評定すべきであるか。是れ君に對する最も趣味ある問題で、亦疑問とすべきである。君の銀行界に始めて身を投じたるは、明治卅三年六月、株式會社根室銀行釧路支店に、籍を置

いたのが嚆矢で、其後全卅九年十一月、株式會社釧路銀行創立のために退店し、全銀行創立と共に、其の支配人となり、爾來今日に至つたのである。是より先き君は、稅務屬として、網走に、釧路に、河西に轉々したのである。即ち君は、明治廿五年五月、渡道して北見國網走に來り、當時父母は全地に在りて、米穀商を

營むであつたので、父母の家に入りて、其の業務を助けたのである。渡道以前は郷里廣島縣宇品に在りて學事に勉め、小學卒業後は、正式の學校教育を踏まず、個人に就き漢籍を學ぶたことである。明治卅一年一月、稅務屬に任官網走稅務署に在勤、翌卅二年釧路稅務署に轉し、全卅三年五月、河西稅務署開廳と共に、河西署在勤となりて開廳事務を取扱ひ、直ちに退官して根室銀行に入つたのである。由來君は、稅務の上にも、銀行業務の上にも、特種の智識なく、従つて些の閱歷もないのであるが、天性の機敏と、事務に勤勉なるとは、實習の上にて顯著の進歩を示し、根室銀行在店中は、既に夙く儕輩を壓して、好個の銀行員となつたので、此の点に於ては寧ろ君は天品と稱すべきである。全卅九年十一月、根室銀行釧路支店を退店したる君は、全年十二月釧路銀行創立要務を帯びて上京、翌四十年九月まで滯京して創立事務に與かり、全年十月創立開業のため飯釧し、其の支配人として營業の中心に立つたのである。銀行創立の徑路は、千葉縣津田

沼商業銀行(資本金六万圓)を、千葉町九十八銀行に買収せしめ、釧路銀行と改稱して、移轉開業したので、君は實に其の買収や整理の任に當り、而して移轉開業するまでに至らしめたのである。釧路銀行創立以來は、時恰かも財界の不振に遭逢し、此間に處するに君の惡戰苦闘は、門外者の容易に窺ひ知るを得ざる所で、其の苦闘や惡戰は大に諒とすべきである。世上君を難する者は、君の銀行業者として、餘りに疎放に不謹慎なる如くに云ふが、是れ唯た其の半面を窺ふのみで、之を以て君を律せんとするは、寧ろ殘酷なりと云ふべきである。或る意味に於ては、君の行動に不謹慎の点もありしならん、然れども是れ已むを得ざるのことで、比較的基礎の鞏固なる、根室、二十兩銀行の間に介在して、其の基礎(創業日甚だ淺きため)に於て資本額に於て、微弱なる釧路銀行に據り、事をなさんとするに於ては、根室、二十の爲し得ざる或る程度まで進まざれば、營業の上に命脈を繋ぐに不可能であつたのである。再言せば君が、全業の寧ろ喜はさりし漁業方面

に向つて投資したる如きは、確かに其の例証とすべきで、一般財界は不振の傾向を示し、且つ投資方面の漁業は、爾來不況に終つた爲めに、君の營業上の苦痛は、更に一層の苦痛を加へたのであるが、倘し漁事の好況であつたならば、君は意外の好成績を挙げ得たかも知るべからずである。唯夫れ一朝の成敗を以て、可否を斷せんとするは、甚だ首肯するを得ずで、君の銀行業者としての定價は、尙ほ未知數に屬するのである。君今銀行内部の整理に専念し、更に資本額を増加して二十万圓となし、新たなる活動を開始せんと、計畫既に熟したる如くであれば、近き將來に於て、何等かの形体となりて現はるべからず。而して君の眞價も此時に於て發揮さるべからず。君明治十一年一月十五日、廣島縣宇品に生る。夫妻の間に男一、女二を挙げ、清福の氣、家庭に満つと云ふに至つては、君や多幸なりで、球戯、園基、弓術は其の嗜好とする所である。君辭令に巧みに、人に接して恭謙、對者として不快の念なからしむるは、亦社交の人とすべきである。

豊島庄作君

釧路町眞砂町
漁業兼回漕業



豊島庄作君

豊島庄作君の名が、釧路富豪史の第一頁を飾る如く、君は實に現代に於ける、釧路富豪の巨頭である。君が武富家と並び稱せられて、釧路の二大富豪たるは、何人も之を首肯する所で、仮に今君の家政に、若干波瀾の認めらるゝものありとするも、其の富豪たる意義に於ては、何等の欠陥を示さず、依然巨頭たるべきである。君が過去

四十餘年間に於て、漁業に、回漕業に、牧畜業に、酒造業に、倉庫業に、海産買業に、巨腕を揮ふて活動したるは、偶ま以て致富の徑路を窺ふに足るべしで、君は徹頭徹尾、奮闘努力の人となりて、運命を開拓し、而して巨富を致したので

ある。君嘉永元年十二月十八日、新潟縣寺泊の地に生れ、少壯本道の開發に意を致し、明治二年釧路に來りて、北海開拓の先鞭者佐野孫右衛門氏の配下に屬し、力を地方の開發に注ぎ、且つ全時に、自家の立脚地を求むべく、奮戦力闘、甚だ努むる所あつたのであある。明治十二年主家佐野氏の家政漸く衰へ、其の支配する一切の事業を擧げて、武富善吉氏に讓渡するに及び、此に君は獨立して、漁業及び貨物運送業を開始したのである。是れ君が獨立の生涯に入りたる第一歩で、爾來君は渾身の精力を傾けて、事業と闘ひ、一步は更に一步を進めて、釧路富豪の巨頭となるに至つたのであるが、君が成功の徑路と、奮闘の活歴を細叙せば、一章一句の能く盡すべきにあらず、當に尠然たる大冊をなすのである。而も是れ枝葉に屬して、唯だ徒らに煩雜を増すのみであれば、君の成功の要素は、君の自助的奮闘の大精神に依り、造られたるを知れば足るのである。即ち君の生涯は奮闘に始まり、而して奮闘に終らんとするので、君が今六十有餘の高齡を以て、尙

は奮闘を繼續し、更に寧日なからんとするは、如何に其の精力の旺盛なるかを窺はるゝのである。蓋し偉人の最も稱すべきは、其の精力の旺盛なるに在りて、君が偉人たるや否やは、素より別個の問題なりとするも、精力の旺盛なる一事に至つては、稍や偉人に近しと云ふべしで、君は此の精力主義を、四十餘年間、釧路の天地に發揮して、豊島庄作の名を成さしめたのである。君の成功に對する徑路は、己に斯の如くである。而して君の生涯は、一面に於ては、釧路の開發史と見るべきで、明治二年開拓使の設置以來、四十四年の今日に至るまで、總てを其の間に始終し、推移してゐるのである。試みに君の過去に於ける、生涯の一斑を窺ふに、明治十年八月釧路勸業通信委員、全十二年五月釧路郡總代、全十三年八月釧路病院世話係、全年日進小學校世話係、全十五年二月釧路郡の内釧路柱戀兩村及び白糠郡昆布出産人總代、全十六年四月釧路米町外一町三村白糠郡昆布出産人總代、全十七年釧路白糠昆布組合副組長、全年三月電信架設世話係、全年全月釧路

郡真砂町衛生委員、全年八月釧路勸業通信委員再任、全廿年五月釧路水産物營業人組合納稅委員、全廿一年一月日進小學校世話係再任、全廿九年九月北海道尙武會釧路支部幹事、全卅年八月國有未開地處分法施行規程及び官有地特別處分規則に依る評價委員等、擧げ來れば君の身邊は、常に幾多の公務を以て掩はれたので、釧路病院の設置や、電信架設の盡力は、最も表彰するに足るべく、水産物營業人組合納稅委員としては、其の功勞に酬ふべく紀念の花瓶を送られて居る。全卅三年七月自治制施行以來は、每期議員として其職に在り、最近に至るまで、君が町事に致せし功績は、此に云ふの要もなかるべく、釧路町は、一昨四十二年十二月、君が自治制施行以來公事に致したる功勞を表彰すべく、銀盃を贈りたるは、其間の消息を窺ふべしで、富に於ては已に群を抜き、聲望に於ては、元老として重きを町民間になすを想へば、君は近代の成功者たりである。君町會議員として現職に在り、釧路白糠水産組合長を兼ね、家門亦繁榮、子女を擧る頗る多きは、多幸である。

尾崎常次郎君

釧路町米町
酒造業



尾崎常次郎君

釧路の酒造界に一頭地を抜き、銘酒龜遊、白露の醸造元として知られたる、尾崎常次郎君は、明治十年十二月六日、鳥取縣八頭郡安部村字安井に生れ、全十八年父母に伴はれて、釧路に移住し、鳥取村の開村に力めたのである。君が現今釧路の酒造界に重きをなすに至りたるは、素より其の經營宜しきを得たるは、勿論なりとするも、亦君の先代が、奮闘努力、今日の基礎を築きたるを忘るべからずである。君の先代は、鳥取村移住後は、農事に依つて身を立るを好まず、豆腐業を開始して、勤勉大に業に勵むたのである。此勤勉は、業務の上に好果を齎らし、従つて利益の見るべきのあつ

たので、全廿一年より雜穀賣買業を兼營し、翌廿二年は、更に酒造業を開始したのである。此間大に業務に精勵し、奮闘更に健闘を續けたので、地盤稍や鞏固に、前方亦光明を認むるに至つたのである。全卅四年先代は、事業の當に緒に就んとする時に當りて、不幸病死されたのである。是より先き君は、明治廿七年、齡僅かに十九歳の時より、已に獨立して事業經營の任に當つて居たのであるが、先代の病死と共に、事業の上に一大改革を斷行し、翌卅五年以來は、他の事業を廢棄して、酒造專業となり、全力を之に傾けて、事業の發展を企て、卅八九年、日露戦役の前後は、最も隆昌を極めて、事業の上に著しき進歩を示したのである。蓋し當時は、戦勝の結果は、人氣大に昇騰して、酒類の消費は激増を來し、此間君は、利得の頗る大なるものあつたが、更に君をして利益あらしめたるは、酒造税の改定を利用して、多額の醸造越しをなしたので、此の一事は、君の專業を有効に且つ確實ならしめたのである。想ふに斯の如きは、君が商機を見るの敏なると、

果斷決行、克く將來に察して、計畫其の宜しきに適ひたるは勿論で、君の平生は小事に拘泥せず、寧ろ君を誤解する者は、凡骨事をなすに足らずとするも、君は生平、凡なる如くなるたけ夫れたけ、事を一舉に決する場合に當りては、明斷勇往、其の眞價値を發揮するのである。即ち日露戦役當時や、酒造税改定の場合に於ける君の營業振りは、最も能く君を説明するので、君の凡手にあらざるを知るべしである。爾來君は、事業の發展と、醸造法の改善に腐心する所あり、全四十年東京醸造試験場に就き、研究甚だ怠らざりしものあれば、君の事業は、更に一新生面を啓くに至るであらふ。現今事業の狀態は、造石約七百石内外の間に在りて、龜遊、白露の二銘酒を出し、販路の一半を地方に求め、一半を十勝、北見方面に求めて、名聲益す高からんとして居る。君の家庭は、母尙ほ健在し、男二女四を擧げ、長女は小樽高等女學校に在るも、男子は幼にして家に在る。君酒量最も深く、斗酒尙ほ辞せず、極めて豪放の氣ありとのことである。

原田宗二郎君

釧路町眞砂町
漁業兼物産商



原田宗二郎君

釧路實業界に在りて年壯、多望の將來を有する者、其人甚だ少からざるも、原田宗二郎君の如きは、蓋し其の卓絶せる一人で、前途の如何に展開し、而して變轉するかは、素より豫期するを得ずとするも、君の才機の慧敏なる、必ずや大に見るべきものがあらふ。君明治十年九月十三日、嶋根縣石見國速摩郡五十穗村大浦港に生れ、高等小學卒業後は、直ちに商業界に身を投したのである。君の家、由來肥料販賣を以て業とし、後君が本道に來る時に於て、斯業に據り身を立てたるは、洵に以なきにあらずで、君は家郷に在りて、肥料販賣業に従事しつゝありたるも、其の範圍は極めて狭少

に、到底君の満足に値ひせざるために、當時岩内町に全郷人の知己あるを機會とし、即ち渡道したのである。時當に明治卅七年七月、君は知己の許に身を托して、目的の一步を進めんと、常に苦心を重ねつゝありたるも、年壯にして且つ資力の據るべきものなく、所詮は何事もなすを得ず、唯だ徒らに日を送るのみであつたが、翌卅一年四月、汝ありて來釧することとなり、全年十一月原田家に入縁して渡道以來の志望を實現し、肥料商として大に其の手腕を揮ふに至つたのである。君は斯の如くして、釧路商界の一角に據り、活動の人物となつたのであるは、一面には原田家の豊富なる資力の、後援に依るは勿論なりとするも、君が商機を計るに敏なるは、偶々原田家をして、君を懇望するに至らしめた以所で、其の商的手腕の凡ならざるは、固より知るべしである。爾來君は、肥料販賣業に全力を注ぎ、營業の關係上、漁業の方面にも羽翼を伸して、漁、商兼營の状態にあつたが、更に卅六年以來は、十勝方面に於ける、農産物の賣買業をも併せ、此に君の事業

は發展し膨脹して、肥料に雜穀に將た漁業に、一大勢力を揮ふに至つたのである。此間に於ては、君は縦横の才機に依り、商算誤らす、業務は日に月に、隆昌の機運に向ひたりとするも、明治卅七八年の日露戦役當時に於ける、陸軍糧秣廠納入の開罫(價額約十四万圓)が、雨天連続のため品質を傷められ、納入検査不合格に終り、損失の多大ならんごせし場合の、君の苦衷は、到底門外者の想像し得ざる所で、當時の君は、實に死活の境を彷徨したのであるが、天幸は未だ君を棄てず、幾千の損失を見すして、難關を經過したるは、君の過去に於ける最も記憶すべき波瀾で、君自身も亦之を以て、空前の悪戦苦闘なりと云ふ如くであれば、如何に其の苦心慘憺たりしかを知るべしである。君は既に波瀾の第一生涯を送つたのである、而も其の波瀾に依り得たる教訓は、君をして益す圓熟に、且つ大事を爲すに、餘裕の綽々たるものあらしめれば、此の一事は、物質以外に君の利益せし所は、甚だ少からずである。若夫れ君が、爾後に對する行實の如何に至つては、

大に刮目を要すべしで、其の資力、其の機才は、君を奈何んの方向に導くべきか。忌憚なく評せば、君の價值は、過去にあらずして將來に在りて、由來君が、或物の援護下に在りて、動もすれば他動的ならんごせしも、今や全く自動的に、其の手腕を揮んとするのであれば、君の眞骨頭は、今後に於て發揮するべきである。即ち君は、過去の人にあらずして、將來の人たる運命に在れば、最も問題の人たらしめるべからずで、其の年齒の壯なる、大成か、小成か、何物かの變象を現するであらふ。君昨四十三年、補欠選挙に當りて、推されて町會議員となり、以て町政の上に力を致さんとするは、常に發展興隆すべき機運に在る劍路か、君の如き少壯議員を有するは、幸福とすべきで、君亦兼て劍路白糠水産組合議員として、斯業に貢献する所少からずである。君五弟あり、三弟竹三郎氏は、君を助けて店務を司配し、君は其の大綱を握りて號令する如くである。二女あり、尙は幼に、夫妻共に日本赤十字社員で、園藝に堪能に、書畫狂を以て稱せられて居る。

藏本藤太君

釧路町茂尻矢
木材兼土木業



藏本藤太君

徒手空拳、幾多の苦難に遭逢して、奮闘力戦、遂に克く運命を開拓したる者、其人に少からずとするも、藏本藤太君の如きは、蓋し其の最も顯著なるもので、君が過去の波瀾は、偶々以て意思の強健を表彰するに足れりとするも、亦君が如何に惡戦苦闘を重ねたるかを、

知るべしである。君は明治三年四月五日、香川縣仲多渡郡善通寺町に生れ、明治廿七年四月、漂然本道に渡航したのである。而も其の郷里を出る時は、囊中殆んど一物を蓄へず、全く無錢旅行の状態に在りて、道程幾數百里を踏み、徒步して青森に來たのである。此の一事、已に君が意思の強健を語りて、百難來るも屈せ

ざるの、勇猛心が窺はるゝのである。君は渡道先づ室蘭に到り、膽振國虻田村に於て、農業に従事したるも、何等得る所なく、遂に失敗に終つたので、更に去つて廣尾に到り、右坂製軸工場に入り、職工として役務に服したのである。此間約一年、若干の貯蓄を得たので、全卅一年飯國して、計畫する所あり、全卅三年家族を擧げて、再び渡道の途に上り、廣尾に於て軸木原料其他木材の採取をなし、稍や利する所かあつたのである。全卅六年四月、君は釧路の大に有望なるを觀取し、事をなすは此地に在りとして、釧路に轉住した。來釧後は直ちに草野製軸所に入り、原料係主任として、勤務に就く傍ら、將來自家獨立の立脚地を求めんと、林業部面に向つて、調査し計畫する所あつたのである。君が獨立の機運は、愈々熟して、全卅九年八月、草野製軸所を去り、木材事業を開始したのである。君が木材事業の開始は、他面三井物産會社と關聯の下に、主として全會社のために、枕木、角材の採取をなしたので、君の事業は、或る意味に於ては、三井物産の事

業と見るべきであつた。而も君が事業の上に、進境を示して稍や其の地盤を固むるに至つたのは、全く此の時代に在りて、君も此の時代に於て、前方便に發展を試みんとしたのである。偶々坂本氏の三井物産と分離し、獨立經營に移ると共に、君も亦坂本氏に従つて、三井との關係を絶ち、現今坂本氏と事業を共にしてゐる如くである。是より先き君は、土木請負業にも従事したのであるが、是れ唯た副業たるに過ぎず、其の主業は、木材に在るのは勿論である。君今事業のために奮闘し、未だ以て成功の域に達せりと云ふを得ざるも、君が不撓不屈の精神は、何物かを捉へれば止まず、過去の波瀾多きだけ夫れたけ、將來に於ても重疊たるものがあるであらう。要するに君の生涯は、徹頭徹尾奮闘の生涯で、努力勤勉、以て其の運命を開拓せんとするのである。君性頗る義氣に富み、同情の念に厚しと云ふは、其の美質を認むべきである。夫妻の間五女を擧げ、和氣の洋々たるものあるは、多幸とする所で、卅九年以來日本赤十字社員に列して居る。

土田 奎平 君

釧路町西帯舞
呉服太物販賣



土田仁次郎君

釧路町呉服商の老舗として、將た酒造業者として知れたる、土田奎平君は、嘉永二年一月十五日、滋賀縣犬上郡多智村大字土田に生れ、明治二十年七月釧路に來住したのであるが、是より先き君は、呉服商小野支店の支配人として、函館に在り、全十七年、已に小野支店を辭して、函館に於て呉服太物の卸商を開業したのであれば、君の來道は、其の以前に在るは勿論である。君が小野支店を辭せし當時は、豊富の資力を有するにあらず、唯た僅かに在店中貯蓄せし三百金あるのみなりしも、而も君は在店中、最も誠實に勤勉なりしたために、各取引店は多大の信用と同情を寄せ、且つ當時全

郷人にして巨富を擁せし、後志國磯谷の吉田與右工門氏が、後援を與へたので、君の營業は頗る有利に、忽ちにして其の地盤を築くに至つたのである。偶ま釧路地方の將來有望なるを觀取し、全時に取引を開始したのであるが、更に全二十年商業視察として、釧路に來り、親しく其の實狀を究めたるに、最も有望なるものありたれば、此に愈々支店開設を決行するに至つた、時に明治二十年七月である、支店開設と共に君は、正實と勉強を標置し、眞砂町に於て吳服太物の販賣を試みたのであるが、信用日に加はり、事業の成績、大に見るべきであつた、全廿四年三月、釧路地方は酒造業の幼稚に、頗る不振の状態に在るを遺憾とし、當時眞砂町に在りて、酒造業を營みつゝありたる、笠原某の酒造場其他器具全部を買收して、更に酒造業を開始したのである。而も事業の發展は、此の狹小の酒造場に在るを許さず、地を米町波止場上に相して、理想的醸造場及び賣店を築造し、大に事業の擴張を圖ると共に、輸入酒の防遏に力め、稍や所期の目的を達するに至つ

たのである。偶ま卅七八年の日露戰役に際し、酒造部の主任にして嗣子たる榮次郎氏は、陸軍砲兵少尉として出征し、後中尉に進み凱旋したるも、病を得て死去したるため、酒造部は、遂に閉鎖するの餘儀なきに至つたのである。是より先き吳服部は、釧路線鐵道の敷設事業起り、西幣舞方面は、序次發展の機運に在りたれば、全卅三年現在の場所に移して、業務を擴張せしが、尙ほ卅一年以來、吳服部は眞宗信徒生命保險株式會社釧路代理店を引受け、今も之を繼續して居る。此間君は、昆布採取業や漁業仕込みを試みたのであるが、所詮は營業に見込みなしとして、斷然廢棄したのである。酒造部閉鎖後は、君は郷里に在りて本店を主宰し、釧路支店は、現嗣子仁次郎氏之を管理して、經營の任に當つて居る。君在釧中は、町事に盡す所甚だ少からず、明治卅一年日進小學校建築委員として銀盃を受け、卅六年議員改選に當りて、町會議員となり、全四十二年自治制施行以來の功に依り、銀盃を贈られたる等、君の公生涯を飾つて餘りありである。(肖像仁次郎氏)

柿田亨君

釧路町浦見町
博濟病院々主



柿田亨君

釧路の元老として、將々醫界の功勞者として、町民間に重きをなす、現町會議員にして、釧路博濟病院主なる柿田亨君は、弘化二年九月十日、鳥取縣八頭郡下私都村字上峯寺に生れ郷里に於て、醫術を開業してあつたのであるが、明治十八年五月、鳥取村開村のため、團

体移住に加はりて釧路に來り、鳥取村に於て醫術を開業したのであるが、全廿一年六月釧路眞砂町に轉し、爾來今日まで醫業者として、生涯を送つて居るのであるが、君は釧路醫界の長老として、敬意を致すべき功勞者である。全廿八年十二月、眞砂町幣舞町浦見町の總代人當選以來は、町事に力を盡し、全卅二年三月釧

路町衛生組長に舉げられ、全年十一月北海道廳檢疫官を命せられ、全卅三年七月釧路稅務署所管所得調査委員に當選したのである。此年恰かも自治制は施行され町長選舉に當りて、君は初期の町長候補者に擬せられ、白石義郎氏と相争ふたのであるが、抽籤のため遂に敗れたのである。全卅五年十月更に北海道廳檢疫委員を命せられ、翌卅八年六月町會議員に當選、爾來改選毎に再選して、今日に至るのであるが、全年君は、浦見町三丁目に私立博濟病院を起して、醫界の刷新を企て、衛生機關の改善を圖つたのである。倘し君に、功績の頌すべきものなりとせば、公人として、町事に致せるの功も没すべからずであるが、私人として病院を起し、衛生機能に生氣を注入したる功は更に大なりで、進歩せる釧路の衛生機關は、総てが君に依つて、建設されたのである。即ち君は、釧路醫界の混沌時に於て、醫學士萬澤晋氏を聘して、其の院長たらしめ、幾多の瀕死者を救治したのであるが、君の病院建設は、他面に於ては、釧路醫界の革命的導火線となりて、更

に笠井病院の創設を促し、幾多の新進學士は、釧路に招聘されて、今や釧路醫界は五學士を有するに至つたのであるが、斯の如きは、釧路町の發展に伴ふ自然の要求なりとするも、其泉源の君に依つて造られたるを忘るべからずで、君を稱するに、醫界の功勞者を以てするは、蓋し以なきにあらずである。由來君の町事に對する、熱實に自信に厚く、秋元氏と行動を共にして、其の元老を以て任し、會て渝りたることなきは、偶々以て君の性格の一斑を窺ふに足るのであるが、動もすれば君を誤解する者は、其の偏狹を云ふも、自家の所信に忠ならんとする者は、往々にして剛腹に陥るのであるが、夫れたけ卒直に、天真を流露する如くで、君は當に斯種の人物を以て見るべきであらふ。君善行に富み、受賞甚だ少からず、現に町會議員の外、衛生組合長、所得調査委員を兼ね、精勵怠らざるは、町民の大に多とする所である。男二共に家に在りて院務を助け、醫學士寺戸英介氏院長として醫局を統轄し、帯廣町に其の分院を設け、繁榮を極めて居る。

寺戸英介君

釧路町浦見町
博濟病院醫長



寺戸英介君

醫學士寺戸英介君は、釧路博濟病院長として釧路醫界の一角に據り、斯界に重きをなして居るは、世既に之を知る所である。君は明治十年十一月四日、山口縣阿武郡彌富村に生れ全卅一年京都同志社中學部を卒りて、山口高等學校に入り、全卅四年東京帝大醫科大學に

進み、全卅八年大學を卒業して、醫學士となつたのである。大學卒業後は、近藤博士の外科助手となり、其間更に大學に於て、産婦人科も研究したのであるが、全四十一年九月、偶々博濟病院主柿田氏の聘に應じて、來任することとなり、爾來釧路に在りて、博濟病院長として、其の手腕を揮ふに至つたのである。即ち君

は、萬澤氏の後を承けて、博濟病院に長となつたのであるが、當時已に萬澤氏の外に、山田醫學士あり、天下は當に三分されて、據割の狀態に在つたが、君は新進の資を以て、其間に突入したのである。蓋し萬澤氏の外科に、山田氏の内外に其の専攻する所に依り、領分を異にしたるも、君は近藤博士の許に在りて、外科を専攻したる者、勢の赴く所は、萬澤氏と一致するを得ずで、個中に於ける君の意氣や、亦窺ふに難からずであつた。君明治四十二年漸く家を成し、夫人秀子、札幌某氏の女、女子大學の才媛である。一女を擧げ、琴瑟相和するは、最も喜ぶべきである。君の日常に於ける嗜好は乗馬で、愛馬狂を以て見るべきである。謠曲、園藝、書畫、骨董も亦其の好む所で、曾て酒煙を口にしないのである。君尙は春秋に富み、終生を學術の研究に委ねんとするもの、如く、而して其の今日あるは、素より君の眞意思にあらざるべく、唯た之に依つて學資の供給を求めんとするので、君の志望が、外國留學に在るは、生平の言、已に之を漏す所である。

三井謹一君

劍路町眞砂町
漁業家

現に劍路支應管内に於て、身を政治的生涯に致して、常に虎視眈々たる者は、白石代議士を筆頭に、佐藤、木下の兩道會議員及び秋元劍路町長の四人者に、先づ指を屈せざるを得ずである。即ち四人者は、現代劍路に於ける、政治的代表人物たるべきで、由來政治問題の發動し、若くは之に遭着する毎に、必ず四人者は聯想さるゝのである。而も此間に於て、三井謹一君の人物性行を研究するは、頗る趣味ありとすべきで、君今漁業に専念して、世外に超然するもの、如く、亦政論を口にせざるも、君は果して漁業家として、政治界に雌伏すべきであるか。是れ問題の問題とすべきで、社會は亦爾かき觀念を以て、君を見んとするのである。君慶應三年一月二十日、山口縣吉敷郡西岐波村に生る、若冠にして郷を出で、豊前中津に到りて、橋本馬袋氏の漢學塾に學び、苦學三年、大に造詣する所あり。

明治十九年東京に出で、東京法學校に入りて、佛派法律を研究し、特に民法の專攻に身を委し、全廿二年七月を以て業を卒へたのである。卒業後は直ちに郷に歸りて、山口商業會議所の創立に意を致して其の委員となり、大に企畫盡力する所あり、會議所成立と共に、理事に推されて事務を監理したのである。偶々北海道毎日新聞は、遊説員を内地の各方面に派遣して、本道移住を奨励したのである。君も亦遊説員の勧誘に、意動きたるもの如く、即ち渡道して、北海索莫の邊に活動の天地を造らんと、全廿五年七月渡道の程に上り、東京、函館に若干日を費し、全年十一月二日來釧したので、此時君の懐中餘す所は、僅かに壹圓五十錢に過ぎなかつたことである。來釧幾干もなくして、釧路水産組合に入り、其の書記長となりて、全三十年二月まで在職したのである。而も當時の君は、一個政論の奇驕兒、素より修身齊家に意を用ふるを念とせず、釧路の梁山伯を以て任し武富隆太郎、中村定三郎氏等と、行動を共にして、大に活躍する所あつたのであ

る。水産組合退職後は、君は直ちに獨立して、漁業を仙鳳趾に於て營み、全卅六年より四十二年までは、漁業經營のため、居を仙鳳趾に移して、全く世外に超然するに至つたので、前には政論に熱狂せる奇驕兒は、獨立事業の經營と共に性格の上に一轉化を來し、謹厚の漁業家となつたのである。蓋し斯の如きは、君の生涯中、最も卓出せる性格の徵象で、君の今日の成功は、此の心機の轉化に因り造られたのである。即ち君は、卅六年町會議員の半数改選に當り、推されて其選に上りたるも、既に政治に斷念して、漁業の經營に身を委せる君、且は仙鳳趾轉住に意を致したれば、直ちに辞して仙鳳趾に去つたのである。爾來君は、産を起し資を蓄ふるに是れ努め、前に一圓五十錢を除して來釧したる君は、今や富數萬を算するに至つたのであるが、蓄財は君の理想にして、亦之に依つて満足すべきであるか。全く否らざるに於ては、君の將來は、奈何んの方面に發展せんとするものであるか。而して政治の埒外に直立し得べきか、是れ頗る疑問とすべきで、君の

將來は、必ずや政治的色彩に依り飾られんを期待するは、強ちに無意義ならずである。何となれば君の過去は、仮に性行の上に一轉化ありたりとするも、徹頭徹尾政治の生涯で、例へば埋立問題當時に於ける、若くは正義、公民兩派の對立の場合に於ても、君は常に一派の中堅となり、戰士となりて、釧路政治史上、没すべからざる人となつて居るのを見るも、君が再び政治界の人たらざるを斷すべからずである。唯夫れ君か、中途意思に變化を來して、實業方面に隠れたる以所のものは、時代の欲求は須らく實力の充實に俟ち、而して活動を望む如くなれば、君は先づ身を修め家を齋ふして、社會の人たらんとする用意に外ならぬので、君の理性觀は、斯の如くして實現したのであらふ。君齡既に不惑を超へ、思慮愈々圓熟せんとするものあれば、其の財力、其の學殖、其の經行を以て社會の人たらば、釧路の政治界の事、未だ容易に測るべからずで、或は道議たり、代議士たるは、亦敢て難しと云ふべからざれば、此には君を問題の人として擱んか。

中戸川平太郎君

釧路町西幣舞
農業兼牧畜業

釧路町の富豪として、大地主として、曾ては郡總代人の公職に在りて、町村經理のために、功績甚だ少からざる、中戸川平太郎君は、神奈川縣高野郡栗原村に生れ、安政二年七月は其の生年月である。君の始めて來釧せるは、明治十二年の頃で、商業の目的を以て、渡道したのである。當時の釧路は、尙ほ草創の時代に在りて、人煙極めて稀薄に、戸數僅かに五六十、外に舊土人の百餘戸を算するに過ぎなかつたのである。己に此の状態に在れば、事業は唯だ漁業あるのみで、野鹿の棲息も、亦頗る多かりしかば、漁業の傍らには、野鹿の皮及び角の買入れをなすが、當時の一般的生業であつたのである。而して漁業は、佐野孫右衛門氏の占有に在りて、其の利益を籠斷されたりとするも、海産物の賣買若くは、野鹿の皮角の買入れは、利益甚だ少からず、當時已に廣業商會釧路出張所ありて、盛に此

の方面に活動して居たのである。君の事業も亦此の方面に在りて、海産物の賣買や、獸皮角の買入れに依つて、少からぬ利益を占めたのである。全十四年君は大に感ずる所あり、從來の事業全部を廢棄して、農業經營の意思に出で、此に永久的居住の目的に依り、西幣舞に於て、未開地十萬坪の貸付許可を受け、全時に農業及び牧畜業を開始したのである。爾來斯業に依りて、生計の基礎を固め、遂に今日の大成功を致すに至つたのであるが、三十餘年の過去に於て、寧ろ成功の遅々たるべき、農牧業に據り、以て其の運命を開拓せんとする如きは、常人の所詮は夢想せる所で、君が此に成功の途を求めたるは、當に一見識なりと云ふべきである。蓋し君の處世の方針は、最も堅實に秩序的なるを喜ぶ如く、漁業の如く一起一伏、浮沈常ならざるものは、甚だ好まざる所である。而かも君が達眼は、君の生涯に更に波瀾なからしめ、極めて平靜裡に成功の寵兒たらしめたのである。君既に農牧業に依つて成功す、爾來亦他の事業に投せず、一意専心斯業に固執し

て、序次に改良蕃殖を圖り、傍ら搾乳業を開始して居る。蓋し釧路に於ける斯業の嚆矢で、君の名は、釧路の畜産史に特筆すべきである。君明治十四年以來、釧路郡總代人、學務委員其他の公職に在りて、公事に精勵し、全卅三年子女教育のため、全家族を東京に移すに至り、總ての公職を辭したのであるが、其間實に二十年、釧路町の今日ある以所は、素より時代の變遷は、此に到らしめたるは勿論なりとするも、亦君の如き先輩者が、克く町事に勉めたるの功も、没すべからずであれば、當に町の元老者を以て遇すべきである。而して現今君が有する宅地及び農牧地は、西幣舞及び其の附近に於て二十萬、釧路郡大樂毛に於て牧場地五百萬坪の多きに達し、如上は、未開地成功附與を受けたるものなりと云ふに至つては、君が如何に精力主義を發揮して、刻苦精勵したるかも、窺ひ知るに難からずである。君今功成り業遂けて、亦世事に多くを關聯せず、半歳釧路に在りて、事業の經營監督に任し、半歳東京の別邸に在りて子女を訓育す、蓋し多幸なりだ。

白石義郎君

釧路町入舟町
衆議院議員



白石義郎君

曾て郷里に在りては、名譽村長、縣會議員、衆議院議員となりて、少壯既に政界に名を馳せ、而して本道來往後に於て宛かも其の全一徑路を辿りたる如くに、釧路支廳長、釧路町長、道會議員を経て、再び衆議院議員の選に上りたる、從七位勳七等白石義郎君の過去の生涯は、縦し仮に、運命の趨く所は、偶然事の此に到りたるものなりとするも、亦斯の如きは甚た奇とすべきである。君文久元年八月廿二日、福島縣東白川郡笹原村大字川上に生れ、明治十一年、若冠志を立てて東京に出で、小石川櫻蔭家塾に漢學を學び、後轉して海江田子爵邸に入居て其の書生となり、佛蘭西法律學校

に籍を置き、現函館控訴院長一ノ瀬勇三郎氏等の薫陶を受け、業成ると共に、直ちに自由党に投したのである。時當に明治十四年。蓋し君の、身を政黨に致せし動機は、當時閥族の跳梁特に烈しく、海江田邸に在りて、切實に之を感得せるに因るので、君は此時に於て、藩閥打破を以て其の主義とし、一意憲政の樹立に努め、全十八年千葉縣櫻井辭氏等と共に、地方聯合會を組織して、國會開設の請願運動に、狂奔したのであるが、偶々集會條例の問ふ所となり、同志の士は繫獄の厄に遭ひたるも、君は丁年未滿の故を以て、僅かに事無きを得たのである。爾來君は、星亨氏の門下生となり、北馬南船主義の貫徹に亦寧日なかつたのである。全廿二年憲法發布となり、翌廿三年代議士選舉行はれ、此に素志の成ると共に、君の政治的地歩も亦見るべきに至つたのである。全廿六年東白川郡豊常村村長に推され、全廿七年縣會議員に當選せるも、無資格のため失格となり、全廿九年再び候補に立ち、當選して常置員となつたのである。其間君は、勸業諮問會委員とな

つたのである。全卅年農工銀行創立委員となりて、其の創立に力め、全卅一年衆議院議員に當選したのであるが、當時尙ほ年壯、先輩を駕して此の榮譽を荷ふ、已に異數とすべきである。是より先き廿九年以來、君は自由黨福島支部設置と共に、其の常任幹事となり、機關新聞福島民報の理事として、其の經營に任じたのである。全年五月議會解散、君は再び候補に推されたるも、堅く之を辭したのである。尙し此時に於て、君に權勢を求むるの意あり、而して議員たるを欲せば、當選固より難事にあらざりしも、君の政界の人となる動機は、藩閥の餘弊に飽きて、代議政体の樹立に在りたるに、既に目的成りて、憲政の實現を見たる以上は、此の機會に於て、政界を脱せんとの念を懷き、且は周圍の事情は、君を永く政界の人たらしむるを許さなかつたので、君は本道に新生涯を求むべく、郷里を去つたのである。時恰かも憲政黨内閣成り、先輩杉田定一氏、道廳長官として札幌に在るに會し、氏の推舉に依り、全年九月釧路支廳長任命、全十一月杉田氏と共に

退官したのであるが、是れ君が、釧路と公私の關係を造る第一歩である。全卅三年本道特別自治制施行あり、君は初期の釧路町長として、埋立事業を起し、後年の富を之に依つて町に與へたのである。而して君は、之と前後して釧路新聞を創め、時代文明の先驅たらしめたのであるが、爾後に於ける君は、釧路の代表的人物として、公私の間に立ち、道會議員を重ねて、全四十一年再び衆議院議員となつたのである。由來君は、功利に隠れて力を致す如くで、其の郷里に於て若くは本道に於て、公人としての君の生涯に窺へば、個中の消息、蓋し首肯するに難からずである。即ち君は、徹頭徹尾、自家名利のために、公人たるにあらずして、黨若くは地方の利害關係に餘儀なくされ、而して公人生活を送つたのであるが、此の一事は以て、君の全生涯を飾りて、更に光輝ありと云ふべしである。若夫れ君が、道會議員として、將た衆議院議員として、釧路及び本道のため、致せし功績に至つては、此に叙説するを要せず、事實の説明に、之を聴くべしである。

遠藤清一君

釧路町字米町
釧路新聞主筆



遠藤清一君

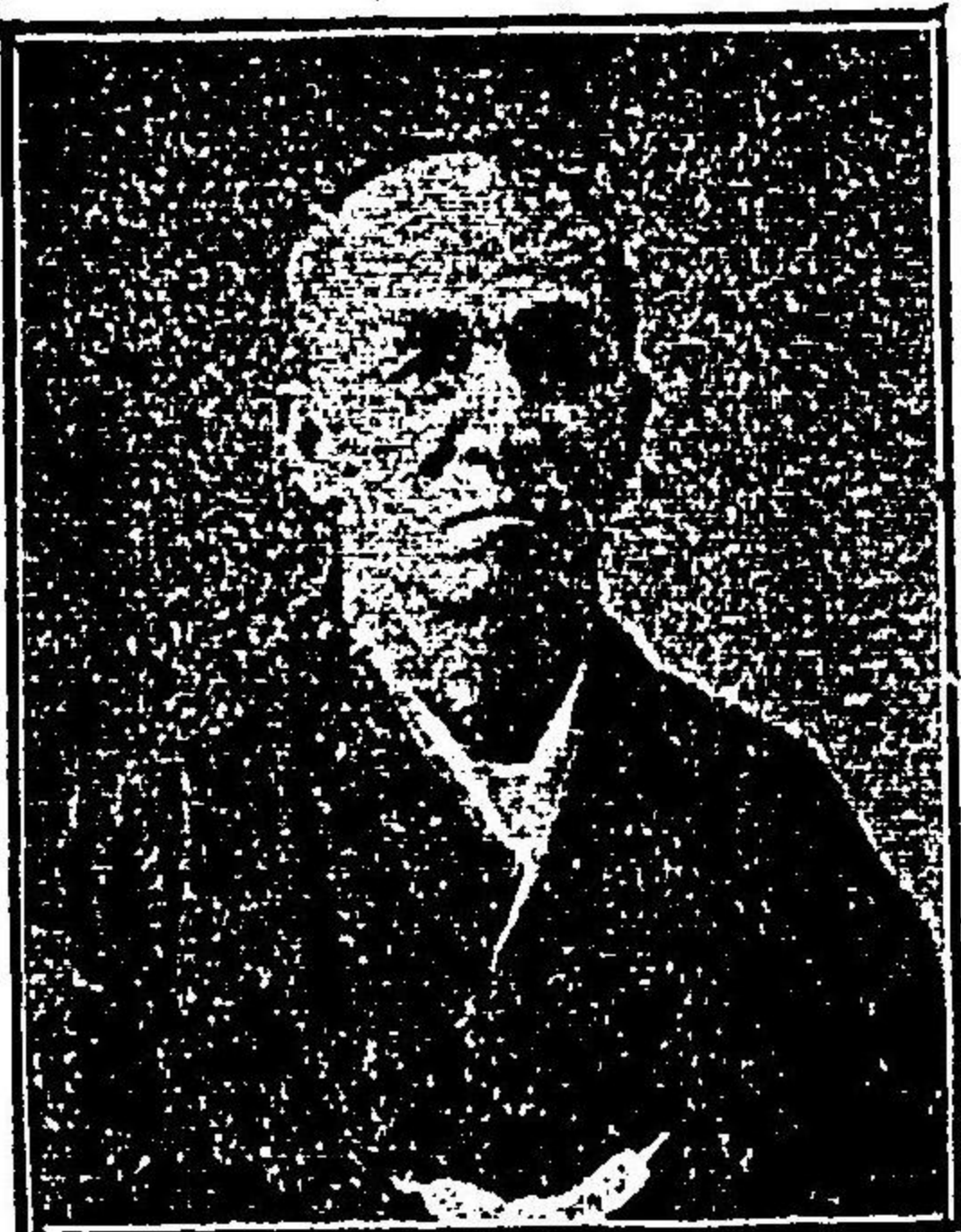
尙し新聞紙を、時代文明の宣傳を意味する、公的機關なりとすれば、其の事業の勢力及び範圍は、社會の最要部分を占むる如く、新聞記者の職業は、最も時代の景仰に値ひすべき、至高至重の榮職なるは勿論である。而かも社會及び時代は、新聞事業を如何に解釋し、而して新聞記者を如何に觀察し、且つ待遇せんとするのであるか。是れ新聞事業及び新聞記者を研究する上に於て、重要の問題たるべきで、之に依つて其の價值は亦判定さるゝのである。由來釧路の地、新聞記者に對する態度の、動もすれば冷酷疎慢に流れんとするは、素より新聞記者を誤解せる、僻見に因るは勿論なりと

するも、亦記者夫れ自体が、往々にして社會の誤解を招く、行動に出でたるに因る事情あるに願へば、其の是非は、容易に斷すべからずである。此時に於て、遠藤清一君は來りて、釧路新聞に據り、其の蘊蓄を揮はんとするのである。蓋し君が、新聞記者としての信條は、絶對を意味して、權威の化身たらんとする如くであるが、或る意味に於ては、新聞記者は、權威の化身たらざるべからずで、釧路に於ては、特に其の必要を認むるのである。何となれば、過去に於ける釧路の新聞界が、極めて混沌裡に經過したのであれば、全時に廓清を意味し、向上を企圖する上に於て、新聞記者が、權威的に自重するは、寧ろ其の自衛的動作とすべきで、君は克く個中の消息を、觀取せりと云ふべきである。君明治十五年一月十二日、福島縣安積郡赤津村に生れ、全四十年、日本大學高等研究科(法律科)を出で、直ちに北海タイムス社に入りて、教育記者となり、在社一年八ヶ月にして、釧路新聞社の招聘に應じ、全四十二年七月來釧、主筆として、全新聞の編輯を主宰するのである。

君は新聞業者としての主義や抱負は、已に前に云へる如く、最も嚴正に且つ摯實ならんとするに在りて、新聞紙の前には、何物の存在を認めず、絶對の權者たり、指導者ならんとするは、君の生平の言動に見て首肯さるべきで、其の意思の強烈に、而かも理性に富み、妄りに動かさるの態度は、先天的資質に於て、新聞記者としての性格を、發揮して遺憾なしである。君の個性は既に斯の如く、而して文に於て、絢爛の文字を望むは、或は君の得意とせざる所ならんも、筆勢の犀利に加ふるに、辨力の強烈を以てするは、宛かも是れ鬼に金棒で、筆に口に、到る處可ならざるはなしである。若夫れ君が、釧路操觚界の廓清を以て任とし、向上の一線を劃せんとする努力は、當に大に多とすべしで、發進的變象は、近き將來に於て、實現さるゝであらふ。兄弟三人、君は其の長にして、父母尙は健全に、次弟は郷に在りて農を營み、三弟は京都大學法科に學び、夫妻の間に一女を擧ぐ。細君幸子は女子學院出身、俱に基督教信者で、弓術は其の最も好む所である。

中川久平君

釧路町眞砂町
洋物食料品商



中川久平君

釧路の吳服界に於て、最も古き歴史を有して其の巨頭と仰かれ、近くに洋物洋食料品店を開きて、營業部面の上に、更に一新生氣を注かんとする、斯界の元老中川久平君は、弘化二年五月廿三日、佐智縣佐賀市祖道元町に生る。家木材商を業としたれば、君は若冠にし

て、業務經營の任に當つたのである。明治九年、商業經營の目的を懷きて、朝鮮に渡航す。是より先き實弟喜三郎氏(厚岸町富豪)は、漢語學研究のため朝鮮に在り、深く彼地の事情に通ずる所あつたのである。時恰かも饑饉に際し、米麥の欠乏を告げたので、之を本國に仰き、其の販航に砂金を買収して、大坂造幣局に納

入するの計畫を以て、貿易事業を開始したるに、翌十年西南の役起り、遂に中止の餘儀なきに至つたのである。西南役平定後、君は再び木材業に復して、事業の経営中、在朝鮮の喜三郎氏飯朝、直ちに上京して、笠野氏の廣業商會の創立に與かり、創立成ると共に、氏は商會員として渡道、厚岸に居住したのである。爾來氏は厚岸に在りて、本道の有望を告げ、來住を勧めたので、君は全十九年五月狀況視察のため來劍、全廿二年四月再び來りて、此に永住の計を定め、現在地に於て吳服雜貨其他の総店を開きて、山久中川吳服店の基礎を築き、後年斯業者の巨頭となつたのである。全廿七年三月、實弟彌一郎氏は分家獨立して、更に丸々中川吳服店を開いたので、當時長子猪吉郎氏は慶應義塾に於て、修學中であつたが、返劍して業務に就き、次子熊三郎と協力する所であつたのである。此の時代に於ける營業状態は、正に全盛を極めて、全業として他に匹敵するものはなかつたのである。全卅四年偶々大火あり、君は店舗及び商品の全部を焼き、其の損害額實に

四万圓以上に出で、罹災者中の主頭であつたのである。君は災後の整理に、苦心容易ならざるものあつたが、序次に損害を回復して、家運亦昔日の隆昌を見るに至つたので、全卅六年米町に別邸を設けて此に居住し、店務を擧げて猪吉郎氏に管理せしめたのである。全卅九年同族相謀りて、資本金一万六千圓を贖出、中川倉庫合資會社を創立して、次子熊三郎氏之を主宰し、翌四十年全資本額に依り、更に合資會社劍路精米所を起し、彌一郎氏其の業務執行者となつたのである。全四十三年十月長子の死去と共に、吳服業の全部を彌一郎氏の丸々中川吳服店に併合し、新たに洋物食料品店を開きて、三子徳次氏其の經營に當り、今當に業務の發展を圖りつゝあるのである。君三弟あり、二弟は厚岸に一弟は劍路に在りて、富裕俱に家を成し、家門の繁榮大に祝福とすべきである。君曾て町總代人として、公事に力を致したるも、爾來は隠れて再び出でず、靜かに其の餘生を養ふて世外に超然してゐる如くである。君夙に日本赤十字社に列して、正社員となつて居る。

中川熊三郎君

釧路町西幣舞
中川倉庫社長



中川熊三郎君

釧路町に於ける、現代的少壯實業家として、多望の將來を有し、現に倉庫界の代表的人物として、商業上、經濟上至大の責任を分ちて貢献甚だ怠らざる、中川倉庫合資會社社長中川熊三郎君は、明治九年十月三十日、佐賀縣佐賀市祖道元町に生れ、中川久平氏の第二男である。明治廿三年大坂に出で、商業學校に入り、在學二年にして全廿五年、更に東京に出で、國民英學會、專修學校等に籍を置きたるも、痼疾の眼症は、君に修學を許さず、在京僅かに年餘にして、廢學の餘儀なきに至つたのである。當時君の父兄は、既に釧路に在りて、商業經營中であつたので、君も將來身を商業に寄

するの意思を懷き、全廿七年來釧したのである。來釧後は、直ちに父兄の業務を助けて、呉服界の人となり、大に努力する所あつたのである。當時山久中川呉服店の勢力は、隆々として全業間に一頭地を抜き、呉服界の代表的商店として、勢力の焦点に立つたのである。此の時代に於て、君は其の中心となりて、父兄の業務を發展せしめたのである。時恰かも釧路は、東海岸に於ける新進地として、興隆更に發展の形勢に在りたれば、此の機會に於て、商界の一角に據つて、勢力の伸張を圖り、自他共に益する所あらんと、父兄及び厚岸在住の同族と謀り、資本金一萬六千圓を以て、中川倉庫合資會社を創立したのである、時に明治三十九年八月一日。創立成ると共に、君は其の社長となりて、専ら事業の經營に任じたのである。翌四十年更に同族と謀りて、精米事業の有望に、且つ其の急設を要する事情ありたれば、全額の資金を以て、合資會社釧路精米所を起し、中川彌一郎氏社長となりたるも、實務は君の管掌する所であつたのである。君は精米所事務管

掌のため、倉庫事務は主任者に一任し、精米事業にのみ専念してあつたが、此の期間に於て、晴天の霹靂事は湧起したのである。創業は尙ほ淺き時に於て、會社は四万圓に近き大損害大欠陥を生ずるに至つたのである。倘し如上が、不可抗力に因るものなりとすれば、止むなからんとするも、人爲的或る事情に出るに想へは、君が胸奥の苦惱や夫れ果して如何。而かも君が自家營業の責任に顧み、信用を重んじて、最も穩健の態度に出で、平和の裡に解決を告げたるは、獨り君が面目の上のみならず、地方財界のため甚だ喜ぶべきで、斯の如きは會社の背後に富裕なる同族の在りたるに因るは、蓋し勿論なりとするも、君が自個を離れて、地方的利害觀念の上に立ち、財界の秩序を重んじたるを、深く諒とせざるべからずである。即ち君は、外に對する損害の總てを、内に負担の責に任し、之かために精米事業は、倉庫整理の犠牲となりて、一時休止の餘儀なきに至つたのである。爾來君は、波瀾後の倉庫事業の整理と、挽回方法に就き全力を傾け、其の頽勢を

復活すると共に、更に發展の機會を造り、全四十二年春、札幌方面の倉庫事業を視察して、大に得る所あり。販來業務の上に改善を加ふべく、先づ全業組合の創立に努め、一部關係者の迫害ありたるも、其の所信に猛進して、組合を成立せしめて組長に推され、全時に舊慣を打破して、營業部面に一大革新を斷行し、今や殆んど間然する所なき進歩を現せしめたのである。而して君に對する内外の信用は、愈々厚く、各銀行業者は、君の主管倉庫を、指定倉庫に擧げ、絶對の信用を拂ふに至つたのである。此に於て君は、更に第二回の擴張計畫を立て、網走線鐵道の開通と共に、之を實現せんとしてゐるのである。君の營業に對する信條は、最も堅實に、而して責任を自覺するに在る如くで、是れ或は、前の失敗に得たる教訓の直寫とも見るべきであらふ。若夫れ君が、身を持するに謹嚴に、會て輕佻の行爲に出でず、思慮の周密なるは、信用機關の樞機に居る、先天的資質たるべきで、亦全志と共に、釧路實業俱樂部を組成して、一般實業部面の改善進歩に努めて居る。

立木源治君

釧路町洲崎町
實業兼古着商



立木源治君

克く主家の繁榮に意を致して、拮据精勵大に
 勉め、忠實以て主家を退きたる、立木源治君
 の如きは、模範的使用人の典型として、蓋し
 推彰するに足るべしである。君は明治九年十
 一月六日、秋田縣秋田郡土崎港新城町に生れ
 全二十年六月、商業實習のため來釧して、中
 川吳服店に入り、勤績實に十五年に亘りて、全卅七年春、獨立して質商を開業し
 たのである。君の來釧當時は、尙ほ幼にして、學齡時代に在りたれば、中川吳服
 店入店の後も、釧路日進小學校に學び、全卅三年業を卒へ、爾來は島川太郎氏に
 就き、研究する所あつたが、全卅五年より實務に入り、中川吳服店に勤務したの

である。君は中川吳服店に勤務以來は、如何にせば營業を繁榮ならしめて、主家
 に利益あらしむるかを、念とするものゝ如く、専心之が研究に意を用ひて、大に
 苦慮する所あつたのである。蓋し營業繁榮の要義は、買客に對して最も忠實に、
 且つ商品を精良にするに在るは、勿論であれば、君は此の方面に向つて、最善の
 注意を拂ふと共に、店員相互の間に、一種の獎勵法を案出して、大に激勵する所
 あつたのである。此の結果は、營業成績の上に、顯著の進歩を示して、毎日の賣
 上金の如きは、數倍の増加を見るに至り、君が入店以來、卅年より卅五六年の間
 は殆んど其の全盛の觀を呈したのである。斯の如きは、一面には時代進歩の兆候
 と見るべきであるが、亦半面には、君等店員の努力の功も、與かつて力ありであ
 る。是より先き明治卅三年、藤野吳服店の來りて、全業相並ふに至つたので、君
 は之に刺撃され、精勵特に勉むる所あり、業務の發展に力を致したれば、中川吳
 服店は、釧路の代表的吳服店となつたのである。君の主家に對する忠勤は、既に

斯の如くである、全時に君に對する幾多の誘惑は、此間に試みられたのである。或者は君に轉業を勧め、又或者は君を誘ふに利を以てし、現在給額の倍額を給して入店を求めたるも、斷乎として之を斥けたのである。是れ君を推彰する特殊の美點で、君は徹頭徹尾、主家を本位として立つたのである。全卅七年勤積十五年に達し、此に君は主家を退店して、獨立の生涯に入つたのであるが、勤務中他日獨立の資に充んと、蓄積せし給料額一千圓に達し、主家亦退店賞與として五百金を贈り、更に一千圓を貸與し、君は二千五百の資金を以て、質業を開始し、傍ら新古和洋服の販賣業を兼營したのである。君は業務に對しては、最も忠實に、例へば質業の如きは、流失期間後三ヶ月を保管し、尙は通知を發して、入質者に請戻しを通告する等、用意の周到見るべしである。而して又昨春、札幌函其他本道の主要地を巡視して、業務の上に改善を加ふ、甚た少からずである。君家に母を養ひ、夫妻の間に、男三を擧げ、家庭の和樂、大に味ふべきものがある。

嵯峨久君

釧路町西幣舞
漁業兼海産商



嵯峨久君

釧路町に於ける、現代的活動人物として、多望の將來を有する者、蓋し其人に少からず。而かも嵯峨久君の如きは、少壯實業家として當に一頭地を抜く者、前途の洋々たるは、固より謂ふを要せずであるが、其の過去の徑路が悲風慘雨、幾多の辛慘と闘ひ、苦難を踏破して勇往邁進、以て運命の開拓に力めたる、堅忍不撓の大精神は、君の生涯を飾りて、光輝あらしむるのである。君素秋田縣の産、幼にして父母に伴はれて、根室に來たのであれば、君は寧ろ根室の人と云ふべきである。君の父母は、家計甚だ裕かならず、従つて君は、永く父母の膝下に在りて、家庭の情味を解するを得

なかつたのである。即ち君は、十二歳の時に既に夙く他家に入りて、世路の辛慘を嘗めたのである。而して君が、根室英語學校(中等教育)に入りて、文字あるに至つたのは、全く他家の篤志に因るので、勤務中の或る時間を割き、拮据精勵したのである。君の境遇は、已に斯の如くであれば、其の學事に對する意思の強健は、亦尋常一様ならずで、天來の才氣に加ふるに精勵を以てす、成績の優越なるものあるは、蓋し勿論とすべきで、君は學校を出るまで、曾て首席を他に譲らなかつたのである。燃ゆるが如き青雲の志は、所詮は君を、根室の小天地に安如たるを、許さないのである。君は十六歳にして、根室英語學校を出ると共に、飄然として根室の地を去つたのである。天涯の孤客、何れの地に其身を寄すべきであるか。或時は千島列島に、或時は樺太島に、亦或時は西比利亞大陸に放浪生活を送つて、苦戰更に惡闘したのである。想ふに君が這般の惡戰苦闘は、力行幾千の貯蓄を求めて、研學の資に充んどの希望にありたるも、人事は意の如くならず、

総ては豫期に反したのである。此間前後實に四年、君は二十の齡を迎へて、函館に漂泊したのである。囊底素より餘裕あるにあらず、君は基督信者の知己に頼りて、晒簞製造所の雇傭人となつたのである。勞働特に猛烈に、君の体力は之に堪ゆべくもあらざりしも、而かも容易に出るを許さざる事情に在りたれば、君は堅忍して、時機の到るのを俟つたのである。此の堅忍的行動は、雇傭主の見る所となり、其女を君に配して養子たらんことを求め、而して其の志望とする修學の資を給せんと告げたるも、君は志望のためとは云へ、自己を賣るを潔しとせず、斷して之を斥け、全家を辞して他に職を求めたのである。偶々東京の巨商小津商店主は、由來本道の海産肥料に取引關係あり、常に本道を往來して、函館に在るに逢ひ、全家に入りて店員となり、爾來君は本道出張員として、海産肥料の買付に従事し、漁季毎に釧路、厚岸、濱中の各方面に活動したのである。君の商的手腕は、此の時代に於て盛んに發揮され、店主の信用は日に厚く、成績亦頗る好良に、

君も相當産を起すに至つたのである。此に於て君は、乾坤一擲の快舉を試みて、本道の漁業界に、一新生面を啓かんと、當時未だトロール漁業の世に行はれず、利益の頗る大なるものあるを觀取し、室蘭に嵯峨漁船漁業部を起して、卒先トロール漁業に従事したのである。時恰かも明治卅九年、君は進歩せる此の漁業に依りて、大に利する所あらんと、衝天の意氣を以て、之に臨みたるも、時未だ君に利あらず、一万圓餘を失つて、一敗遂に地に塗みれたのである。翌四十年君は釧路に來り、此に永住の計をなして、漁具漁網店を開くと共に、鯨旋網漁業を行ひ兼ねて海産肥料の賣買業を開始したのであるが、君の活動は、一步一步に猛烈を極めて、既に斯業者間に重をなすに至つたのである。是れ素より君が、小津商店の如き、有力なる後援者を有する利便あるに因るとせんも、機才縦横、其の凡手にあらざるは、抑も君が今日を致したる以所である。君今齡僅かに卅六、其の前途の如何に展開すべきやは、最も趣味ありとして、觀望すべきである。

逸身豊之輔君

釧路町幣舞町
大坂礦業社長



逸身豊之輔君

釧路の礦業界を三分して、其の一角に占據し、釧勝興業會社、安田礦業所と對立して、事業の上に、動もすれば一頭地を抜かんとする、大坂礦業株式會社大坂炭山事務所は、其の中心人物を何人に求めて、社業の經營に任しつゝあるか。是れ蓋し、大坂炭山事務所の事業

を語る上に於て、最も切實に且つ必要事とすべきで、現任社長逸身豊之輔君の性行人物を叙するは、更に有力なる説明たるべきである。君は大坂市南區綿屋町に生れ、明治十五年十一月卅日呱呱の聲を擧げたとすれば、木年は當に三十歳の血氣盛りである。普通教育を卒へたる後は、藤澤南岳氏泊園書院に學び、全卅三年

まで、其の書院に人となつたのであるが、君は現代の思潮に憧憬するを好まず、専ら漢學に依り身を固めたるは、最も奇と稱すべきである。而かも君は、頭腦最も明晰に、能く現代を咀嚼して、些の道學的色彩を帯びざるは、君に接する者の寧ろ驚異とする所である。君明治卅三年、藤澤氏の泊園書院を出でたる以來は、直ちに全族間の創立に成る、合資會社逸身銀行(資本金十萬圓)に入り、其の業務執行社員となりて、處女的手腕を、財界の方面に揮ふたのである。而して君は、實に逸身家の宗家に人となり、其の主長たるべきである。是より先き逸身家は、銀行業以外に、礦業界にも羽翼を伸して、施設經營する所あり、君亦獨創的に事業を開始して、其の經營に任せんと志望を懷き、爾來各方面に、調査攻究を怠らざりしに、偶ま本道礦業の有望なるに想到し、全卅九年礦業開始の目的に依り其の調査のため、始めて渡道來劔したのであるが、調査の結果は、發見する所甚だ少からず、此に愈よ事業開始の意思を固め、劔路郡劔路村別保字フタコウベに

於て、面積百一萬五千二百九坪の礦區を得、全時に資本金十萬圓を有する、大坂礦業株式會社大坂炭山事務所の名の下に、石炭の採掘及び販賣業を開始したのである。元來大坂礦業株式會社は、組織に於て株式會社なるも、實体は逸身家の事業たるべく、而して君は、其の宗家たるべければ、事業の上に、縦横の手腕を揮ふ利便を有するのである。全四十年一月事業の經營緒に就き、豊田義明氏を主任として、其の經理に任せしめたのであるか、翌四十一年五月、君は來りて自ら事業を管し、大に營業部面を革新すると共に、更に發展を策したのであるが、君の社業を司配せし以來は、面目頓に一變して、進歩興隆、優に劔勝興業、安田礦業に對抗し、若くは凌駕の勢を示さんとし、此に劔路礦業界三分鼎立を實現して、雄を斯界に揮ふに至つたのである。君の事業に對する信條は、明察確鑿、其の遺算なきを發見するに於ては、猛烈勇往、所信に向つて猪突せんとする如くで、再言せば、始めに思慮周密、後に果斷敢行に出るは、君の最も得意の擅場とする所

たある。現今君が司配する事業礦區は、第三紀層の地質をなし、炭層三尺乃至三
尺五寸の間に在りて、坑道九個を有し、一ヶ月の採炭量三千噸を算せられて居る。
賣炭所を釧路以外、更に函館及び青森に設け、活動最も努むる如くにあるが、其
の成績は亦佳良なりで、或は現在に於ける、釧路炭界の雄を稱すべきである。事
業の現態既に斯の如くである、此に於て君は更に第二の擴張に腐心するもの、如
く、近き將來に於て、其の採炭量を六万噸、一ヶ月五千噸に達せしめんと、計畫
を進めつゝあれば、君の事業は、前途益々多望の域に到達すべしである。蓋し君
は、釧路に於ける事業界の撰手たるべきで、年齒漸く三十にして、既に頭角を斯
界に抜き、而して向上の意氣愈々壯に、活動亦益々烈しからんとするは、單に君
のため喜ぶべきにあらす、釧路のため祝福とすべしである。君容姿端麗、人に接
して城壁なく、能く談し能く論す。一男三女を挙げ、家庭の和樂、大に拘すべき
あるは、君の最も多幸とする所で、實弟某氏亦君を扶けて釧路に在り。

名西惣吉君

釧路町眞砂町
雜貨酒類卸業



名西惣吉君

若冠、志を立て、本道に來り、力行苦闘、産
を起し資を求めて、立脚の地底を造りたる、
名西惣吉君の如きは、立志編中の人として推
彰するも、甚だ過當ならずである。君は明治
十八年一月十日、徳島縣三好郡辻町に生れ、
高等小學校卒業後は、家業を助けて、煙草製

造業に従事したのである。蓋し、君の郷里は、煙草の産地を以て知られ、多くは
煙草製造を以て、其の生業となすのである。君稍や長するに及んで、家郷の小天
地に醜醜たるを好まず、夙に本道の多望なるを聞き、渡道の意、頗る切なるもの
あつたので、小樽、全郷の知人あるを機會に、父母の許可も得ず、私かに出郷し

たのである。時に君齡僅かに十八歳。直ちに小樽に到り、知人の斡旋に依り、古平町某氏の煙草店に入りて、更に時機を窺つたのである。偶々日露戦役起り、全時に煙草專賣法實施されたれば、商機を見るに敏なる君は、好機失ふべからずとなし、急遽販國の途に就いたのである。即ち君は、煙草專賣法の實施に依り、民製品の販賣に力めて、其間利益を博せんと圖つたのである。然れども郷里の父母は、容易に君の言を用ひず、寧ろ君の渡航を阻止せんとする形勢に在つたのを、君は親族知己に懇請し、少許の民製煙草の貸與を受け、再び渡道したのである。明治卅七年再度の渡航後は、君は本據を函館に置きて、行商的に民製煙草の販賣に従事し、此間奮闘最も力めたる結果は、營業成績頗る好良に、全時に郷里の信用も漸次に博するを得たので、此の機會に於て、業務の發展を試みたのである。爾來三年間、君は本道の各地に行商して、奮闘更に健闘する所あつたが、全卅九年に至り、民製品は殆んど盡きたれば、此に營業を一轉して、鶴岡町に於て、雜

貨店を開業したのである。此時已に君は、煙草行商に依りて、五千餘圓の利益を得たのであるが、雜貨店開業後は、營業状態面白からず、序次に欠損を見るに至つたので、更に適當の土地に轉して、經營せんと志望を起せるに、偶々烟草行商中、釧路の地を往來して、將來多望なるを想到し、此に愈々釧路轉住の計畫をなしたのである。時當に明治四十年四月、現住の地に於て、雜貨店を開業したのである。當時の釧路は、經濟界最高潮の時代に在りて、人氣の勃興せしものあつたので、營業成績頗る好良に、利益する所あつたのである。此に於て全年六月、内地直取引を開始し、大に營業範圍を擴張せんと、京坂地方及び北國方面に旅行して、取引を締結し、業務の上になし生面を開いたのである。而して君が十勝方面に對する商取引の上に於ける策戦は、最も巧妙を極めて、明治四十年、釧路函館間鐵道全通を機會とし、十勝に對する一般的商取引熱は勃發して、其の高潮に達したるも、四十年以後は、經濟界不調のため、損害亦甚だ少からず、曾ては進

んで取引を開始したる者も、遂に躊躇し若くは停止するに至つたので、君は此間に於て、巧みに十勝に勢力を扶殖し、以て今日の地歩を成すに至つたのである。斯の如きは、君が商取引上凡手ならざるを表明する、有力なる實證で、他の虚に乘して、實を収めたのである。爾來君は、商勢の扶殖發展に努力し、最も十勝方面の關係に重きを置き、開業僅かに幾年にして、事業の膨脹大に見るべきは、蓋し異例に属すと云ふべきで、當年の煙草行商者は、幾年ならずして、釧路町に於ける雜貨酒類の卸業者として、頭角を現はすに至つたのである。君昨年五月、貳千餘圓を投して營業所を新築し、更に米町森儀八氏の履物店を買収して之を併せ前途の興隆、愈よ大ならんとするものあるは、君の得意知るべしである。想ふに君は、時代に對する活きたる教訓者で、年齢僅かに廿有七、而かも短時日の間に於て、赤手克く産を起すは、寔に得易からざる機才と云ふべしである。君去歲配を迎へ、東京に於て式を擧げ、琴瑟相和するは、亦多幸なりかなである。

佐々木松三郎君

釧路町眞砂町
米穀雜貨卸商



佐々木松三郎君

米穀雜貨の卸商を專業として、斯業者間に重きをなす佐々木松三郎君は、舊名を林平と稱し、明治四十二年八月、先代松三郎氏の死去に依り、其の名籍を襲ふて松三郎と改めたのである。君は岩手縣宮古町大字新町の産、明治十一年十一月十三日呱呱の聲を擧げたのである。

ある。郷里に於て普通學修了後は、某呉服店に入りて、實務の練習中に在つたが明治卅年五月、佐々木家の養嗣子となるべく、來釧したので、君は佐々木家とは由來親族の間に在つたのである。先代松三郎氏は、明治廿年頃釧路に來住し、商業及び漁業を營むであつたのであるが、中途漁業に失敗して、全廿五六年の頃よ

佐々木松三郎君

り旅館業に轉し、全卅四年まで繼續したのである。是より先き全卅年、君の來劍と共に旅館業の傍ら、米穀雜貨の販賣を開始し、君は専ら此の方面に活動したのである。全四十二年八月。先代松三郎氏(養父)は、病を得て遂に死去したるに依り、君は其の相續者となりて、責任の全面に立ち、大に手腕を揮ふに至つたのである。先代松三郎氏在世中は、町總代人、學務委員其他の公職に在りて、町事に力を致せし功績も、甚だ少からず、寄附其他の善行に依り、木杯及び褒狀の受領も亦少からずである。君の佐々木家相續後は、専心力を商業に致し、營業の發展に甚だ怠らず、成績亦頗る好良に、年次に隆昌を告るは、君が如何に此間に處して、遺算なからしめたるかを知るべしである。而して現今君の商店の特約販賣に屬するものは、清酒白鹿、越後酒老松、大漁、天狗印焼酎、醬油山楡印、龜甲佐味噌曲ヨ印、曲久印等で、米穀類も産地取引に依りて、盛んに卸業を營むで居る。而して昨年六月、君は全業者數氏と謀りて、劍路砂糖麥粉同盟組合を組織して、

共同購買を實行してゐるか、斯の如きは、地方商界の進歩として、相互に利する所は、甚だ少からずである。君の營業方針に對する信條は、内に伸びるよりも、外に張んとするに在りて、劍路の現在若くは將來は、其の商的勢力を奈邊の地に求むべきであるか。劍路の商業發展は、劍路自体の消費に依りて、得らるゝものにあらず、十勝若くは北見の聯鎖に依りて、始めて意義あり而して發展は期待さるべしとすれば、營業の主力は、須らく此の方面に注かざるべからずと云ふ如くで君は夙に此の方針に據りて、十勝及び北見方面に、商勢を扶殖し、全時に事功を收めつゝあるが、亦一見識なりと云ふべしである。君又商業の傍ら、牧畜業に意を致して、阿寒郡舌辛村及びオンネピラの二ヶ所に、牧場總地積百六十萬坪餘を有し、牛畜四十、馬匹三十餘頭を飼牧し、其の蕃殖改良を圖りつゝあるのである。君の家庭は、養母尙ほ健在し、夫妻の間に一子を擧げ、外に店員五名を有し、君は家長として、之に號令して居る。日本赤十字社正社員である。

松澤善二君

鎮路町洲崎町
笠井病院院長



松澤善二君

鎮路醫界の一勢力に據り、萬澤、博濟の二病院と對立して、重きを其間になす、鎮路笠井病院の主力たる、醫學士松澤善二君は、中學は郷里の高田、高等學校は金澤に卒りて、明治卅九年十二月、東京帝大醫科大學の門を出で、醫學士となつたのである。卒業後は、直ちに大學附屬病院勤務を命せられ、醫科大學々長青山博士指導の下に、傳染病系は勿論、一般内科を研究し、全四十二年五月に至つたのであるが、偶ま笠井病院主笠井氏の招聘に應じて、全時に院長として來鎮したのである。爾來君は、笠井病院の運命を、其の双肩に荷ひ、專攻の内科的手腕を揮ふて、鎮路醫界の一勢力

をなして居るが、藤澤學士の産婦人科に獨在するは別として、萬澤學士の外科に對し、寺戸學士のある如く、君の内科に對しては、山田學士のあるは、仮に偶然の結果は、此に到りたりとするも、頗る奇とすべきで、其の醫的手腕を揮ふ上に於て、双互を刺撃して、發奮の機會を與ふのであらふ。再言せば、鎮路醫界の現狀は、宛かも群雄割據の狀態に在りて、勢力信用の爭奪を意味する如くなれば、君が此間に處する努力は、亦尋常事にあらざるを諒とすべきで、笠井病院が、曾て其の潛勢力を失はず、序次に發展の光明に進みつゝあるは、院主笠井氏の經營宜しきに因るは、蓋し勿論なりとするも、君の學術の該博巧妙に、努力甚だ怠らざるは、亦其の主因とすべきである。即ち君は笠井病院に據りて、自家の醫的價値を發揮し、笠井病院は亦君に依つて、其の隆昌を求めんとする者、君の責任や大なりである。君年齒最も若く、患者の信賴頗る厚きは、君の面目は勿論、笠井病院のため、多幸とすべきである。君新瀉縣の出身、温厚寡黙の好紳士である。

福井邦雄君

釧路町眞砂町
米穀雜貨卸商



福井邦雄君

釧路町に於ける、米穀雜貨卸商の巨頭として
企業間に推重さる、福井邦雄君は、慶應三年
一月九日、鳥取縣八頭郡隼村大字見槻村に生
れ、小學科程修了後は、改風舎私塾（松井某
氏主宰）に於て、漢、數學其他を研究したの
であるが、在學實に五年を送つたのである。

君は單身本道に渡航して、奮闘努力、以て其の運命を開拓して、今日の成功を得たのであるが、斯の如きは亦以て、君の人物性行の一端を窺ふに足るべしである。時恰かも明治十八年、全郷人団体の釧路に移住して、鳥取村創設の計畫あり、柿田氏亦移住者の中に在れば、君は氏に伴はれて、釧路移住の途に就いたのである。

蓋し柿田氏は、郷里に在りては、君の父兄とは最も懇親に、殆んど親族に等しき關係に在りたれば、氏に頼るの安全なるを思ひ、而して本道に於て、獨創的天地を啓くの意を懷き、即ち單身渡航したのである。來釧と共に、君は如何に處世の針路を定むべきかに想ひ、十勝方面も視察したのであるが、飯來直ちに西川幸右工門氏の硫黃山事務所に入り、標茶方面に在住し、事務員として其の業務に與かつたのである。全十九年、西川氏が鳥取村分水請負工事を行ふに當り、君は其の元請管理者として、工事の監督に當つたのであるが、當時の下請負者は中西鐵五郎氏であつたのである。偶々函館の竹内與兵衛氏に會し、氏は君の大に用ふるに足るに察し、伴つて函館に飯り、妻はすに其の實妹を以てし、在函僅かに三四ヶ月にして、君は再び釧路の人となつたのであるが、時に齡廿二である。君の再度の來釧は、竹内支店を釧路に開きて、其の管理者たらしむるに在りて、直ちに米穀雜貨の販賣業を営むたのである。蓋し君が、後年に至りて、其の地底を固め、

以て今日の成功を捉へ得たる動機は、全く此時に於て造られたので、再言せば、君は竹内氏の援助に依りて、自家の運命を啓き、而して成功の一步を踏むたのである。君も亦此間の消息を語りて、竹内氏は自家を今日あらしむる恩人なりとし、其徳を忘れぬ如くである。君の前方には光明の輝き渡りて、向上史に發展せしめんとするのである。君は此の機會に於て猛進を試み、商業の傍ら、漁業も兼營したのである。其間三年、成績亦頗る好良であつたのであるが、君は漁商兩立の不可を覺り、斷然漁業を廢棄して、商業に専念したのであるが、是れ君の凡眼ならざるを證とすべきである。爾來君は商界の一角に據りて、縦横の機才を揮ひ遂に大成するに至つたのであるが、其間に於ける君の活動は、大に見るべきであつたのである。由來君の營業方針は、絶對の積極主義に出で、土木請負事業に關係して、盛んに其の仕送りをなしたのであるが、此の時代に於ける君の營業振りは、極めて大膽であつたのであるが、幸ひに竹内氏の消極主義と調和して、大過

なきを得たのであるが、君は徹頭徹尾、進取の人であつたのである。明治卅六年病を得て、轉地して靜かに病を養ひ、亦店務を見るを得ず、總てを山根氏に托したのであるが、此間前後七年間、君のためには災厄の最大なりしものならんも、山根氏の忠實は、君に後顧の患なからしめたるは、亦君の多幸とする所である。唯だ病後に於て、君の性格に若干の變化を示して、前の急進主義は稍や鈍鈍を收めて、漸進に傾きたるは、寧ろ其の圓熟を見るべきであらふ。若夫れ君が、釧路商界のため一新生而を啓きて、明治廿八年以來、卒先して米穀酒類其他の産地直輸入を開始したる如きは、最も記憶すべしである。君明治廿七年、町總代人に擧げられて自治制施行に至り、全時に初期の町會議員として、町事に盡したるも、病を得て其の一期を退き、再び擧げられて議職に就き、以て今日に及ふのであるが商業團體に在りては、釧路米穀雜貨商組合幹部として、功績少からずである。男一、女一を擧げ、長は函館商業學校に在り。赤十字正社員にして、酒は其の好む所である。

兩角榮治君

釧路町眞砂町
吳服商



兩角榮治君

舊慣打破の飛將軍として、釧路の吳服界に、
 一新機軸を現出したるは、夫れ何人を以て、
 之を稱すべきか。九三吳服店主兩角榮治君の
 如きは、當に其人を以て、見るべきである。
 君は明治七年三月十五日、新潟縣三島郡興板
 町大字興板に生る。家世々吳服業なりしかば
 普通教育終了後は、家に在りて、家業を助けたるのである。偶々明治廿年五月、商
 業實習のため、札幌今井吳服店に入店せんことを勤めらる。蓋し家人も、君の本
 道渡航を、希望を以て迎へたる如くなれば、即ち意を決して、渡道の途に上つた
 のである。爾來在店十有八年、全卅八年退店獨立したのである。而して君は、今

井吳服店在店中は、明治卅五年より全卅七年に至る三年間は、東京仕入店支配人
 として、東京に在勤したのである。全卅九年春、釧路吳服界狀況視察として來釧
 調査の結果は、大に前途の多望なるを認め、此に愈よ來住の意思を固め、全年十
 月、現住の地に於て開業したのである。君の開業と全時に、在來の全業者は、全
 業組合に加入を勧誘したのであるが、君は既に釧路吳服界の弊風を觀破する所あ
 り、斯の如き營業方針の下に在りては、所詮は活動不可能なりとし、自家の所信
 に向つて猛進すべく、斷然加入を拒絕したのである。此に於て君に對する全業の
 反抗烈しく、君は宛かも孤軍重圍の裡に陥つたかの如くであつたか、斯の如きは
 素より豫期する所なれば、更に意に介せず、敢然猛然自由の天地に突進して、奮
 闘したのである。君が此の犠牲的努力は、釧路の吳服界に、一新生氣を注入する
 のみならず、自家の營業地底の上に、絶對の利益を興へて、九三吳服店は、瞬時
 にして斯業者間に、重きをなすに至つたのである。其後全業間の意思疏通なり、

規約の二部を改訂して、君も組合に加入し、平和の解決を見たのである。由来君は、業務を行ふ上に於て、二見識を有し、前途を遠観する如くで、釧路の現在が水産本位に立ち、経済界の大勢力をなす如くなるも、近き将来に於て、陸産時代に達すべきを豫期し、従つて營業方針も、之に副はさるべからずとし、昨年十月、北見の關門野村牛に、支店を開設して勢力の伸張を圖り、以て他日活躍の伏線たらしめ、階梯となさんとするは、君の意の在る所を窺ふべしである。君の營業に對する所信は、既に斯の如く、確乎たる方針の下に、一步は一步より、理想は現實に近寄らんとするので、多望の將來あるも、亦全時に首肯するものである。君今業務の發展に腐心し、新たに店舗を改築して、更に羽翼を張らんとして居るが、其工成るの日に於ては、營業狀態の上に、面目を一變するは勿論である。主業の傍ら、洋服裁縫販賣業を兼營し、信用亦淺からずである。而して君が、現在に於ける營業勢力の分布は、釧路六、十勝三、北見一の比に在ると云ふ。

大村吉太郎君

釧路町眞砂町
酒類鐘詰御商



大村吉太郎君

酒類鐘詰類の販賣を、其の營業とする大村吉太郎君は、釧路町に於ける現代的少壯實業家の一人で、君の過去の生涯は、幾多の波瀾重疊せるものありたるも、君は之を突破して、此に成功の第一歩を踏むとする、勇戦健闘は、大に推彰に値ひすると共に、其の前途や光明

ありと云ふべしである。君は明治十二年三月二日、大坂府中河内郡八尾町に生る。九歳の時、家を出で堺市に到り、伯父某氏の家に寄寓したのである。君の家系は素名門なりしも、祖父の時代に於て、藩札發行の連帶に依りて破産に傾き、父庄藏氏、家政整理中巨利を夢みて、定期米市場に投し、全く産を傾ふに至つたので

あるが、尙ほ若干の田地を残したれば、父は農業を營みたるも、君は農を好まず伯父の許に身を寄せたのである。當時伯父は、大塚家の総支配人たりしかば、君は其の縁故に依りて、大塚家に入り、銀行部に十七歳まで勤務したのであるが、將來商業に據つて身を立てんとする君は、永く銀行部に在るを好まず、明治廿七年五月、林豊三郎氏と共に、全家の函館菊泉支店に轉したのである。支店勤務中は専ら外交の任に當り、各地に出張して、販路の擴張に力めたのである。全卅七年三月、釧路方面の有望に察し、自ら乞ふて釧勝二國の常設出張員となり、益す業務の擴張を圖り、全四十年六月、更に釧路支店の設置を謀り、支店の開設成ると共に、退店して獨立の生涯に入り、現住地に於て、酒類洋酒醬油罐詰類の販賣業を開始したのである。獨立當時の君は、舊主家其他より約一万四五千圓の商品を借入れ、開業したのであるが、今は債務も大部分は償却して、四五千圓を残すのみと云ふに至つては、其間の奮闘も想像されるのである。唯た開店前後に於て

君の最も悲惨とせしは、一週日内外の間に、細君や母や子供の三人が、全時に死去したことで、之には君も少からず神心を痛めたのである。而かも此の困厄に處して、奮闘更に努めたのであるが、序次に回復して、商業も順調に向ひ、相當の利益も收めたのである。兎は云へ君が、最も得意とせし壇場は、獨立開業の時にあらずして、菊泉支店の常設出張員時代に在つて、此の時代に於ける君の活動振りは、頗る目醒ましかつたので、君は他日自家の立脚地を、此に求めんと、大に計畫する所もあつたのであらふ。君の生涯は、斯の如くして、其の前半生を終つたのである。而して來るべき後半生は、奈何んの色素に依つて、飾らるべきであるか。君今自家營業の確立に腐心し、擴張に専念して怠らざる如くであれば、必ずや近き將來に於て、何物かを捉へるを期待すべしで、君は又主業の傍らに、土木業にも關係して、其の仕送りも遣つてゐる様である。君米穀雜貨商組合幹事として、盡す所あり。細君シユン子家政を助けて、後顧の患なく、男三あり。

藤田春吉君

釧路町洲崎町
木材業



藤田春吉君

釧路町に於ける藤田春吉君は、單に木材業者として、最近の歴史を作るのみで等何事跡の彰すべきものなしとするも、君が過去の生涯に於て、破踏し來りたる其の経路に想へば、君の將來が、亦何等かの形象を現して、光彩の陸離たるべきものあるは、蓋し豫期するに

難からずである。君明治五年十月八日、佐賀縣西松浦郡大山村に生れ、全廿六年長崎縣立中學を出で、全卅年早稻田専門學校行政科を卒業したのである。卒業後は直ちに前田正名氏の主宰下に在る、千九百年の佛國巴里大博覽會出品協會（農商務省補助金十萬圓）に入りて、事務取扱を命せられ、翌卅一年臺灣銀行創立に

際し、創立委員にして先輩たる松尾寛三氏の囑托に依りて、銀券發行の利害調査のため、更に翌卅二年末、巴里大博覽會出品協會々計課長として渡佛、全卅四年四月飯朝したのであるが、飯朝後は、精算、殘務の整理及び報告書編纂に任して、翌卅五年三月まで、協會事務に與かつたのである。爾來君は前田氏の全國實業會中央本部に在りて、事務長として會務を見たのであるが、全年八月清國（天津北京間）商業視察を下し、朝鮮を経て飯朝したのである。而して君は、全年及び翌卅六年の二次に釧路に來りて、武富氏の倉庫、銀行業の創設に與かり、倉庫規程の如きは、全部君の作製に成つたので、全時に君は、前田氏の阿寒一步園の事業も管理したのである。翌卅七年、日露の風雲愈々急ならんとするものあれば、君は此時機に於て事を爲さんと、實業會中央本部幹事として渡滿、大連占領後旬日の間に前田氏と共に上陸したのである。而して君が、山縣勇三郎、西本清の二氏と合同して、私船を以て貨物を運送し、封鎖線に入りて、艦船に物資の供給を試みたる

も、此時に在りて、君は其の利權獲得の上に、其だ盡す所ありたるも、合同少時にして破れ、君は卅八年二月飯京したのである。全年六月、君は西崎某氏と共に資本金八萬圓を以て、木材業を開始せんと、其の調査のため、仁川より海岸線を經て安東縣に入り、營口に到つたのであるが、故あつて全年九月鐵嶺に向つたのである。此間君は、滿洲の興業部面に活動する所あり、現に卅九年十二月滿洲興業株式會社(資本金六百五十萬圓)創立に際しては、會社の電召に依りて飯京、其の囑托員となりて、四十年六月會社重役日下義雄氏と共に、朝鮮を經て滿洲に入り、大豆、豆粕の調査を試み、大に得る所あつたが、會社の遂に營業を開始せずして、解散に至りたるは頗る遺憾とせし所である。君の鐵嶺滯留中に於ては、商品陳列館の設置、居留民の教育衛生等に盡力する所少からず、其の軍政時代に於ては、感状を授けられたるに見るも、一斑を窺はるゝのであるが、平和克復して領事分館設置後は、君は特別行政委員に任命されてあつたが、君は此の時代は、

木材商を營業としてあつたのである。而して君は、早稻田在學中、全郷の先輩岡威一郎氏と謀りて、大日本實業學會を起し、會頭二條公副會頭前田氏の下に、講義録を發行してあつたが、後年の實業之日本は、前身を之に求めたので、現社主増田氏は、當時の論說記者であつたのである。全四十一年二月、本道木材業に意を致して渡道、西海岸方面に在りて、木材の輸出業に従事してあつたが、昨四十二年釧路に來り、木材業に始終してゐるのであるが、現今の取引方面は、内地府縣に留まるも、近くに外國輸出も開始する計畫を懐く如くである。君は斯の如くして、今當に木材業者として、釧路の實業部面に活動しつゝあるが、其の將來は如何に觀望すべきであるか。其頭腦頗る明晰、明辯滔々、而して理路の井然たるものあるは、蓋し得易からざるの才で、前途や大に曠目すべきである。君後進の扶掖を以て、快心の事業とする如くに、現に工科大學一、高商一、中學一の學生を養成しつゝあるは、其の性格の異として、之を見るべきである。

戸田猪八君

釧路町浦見町
水産組合主任



戸田猪八君

釧路白糠水産組合書記長戸田猪八君は、文久三年十月十七日、福島縣若松市に生れ、明治二十年東京法學院を卒業し、卒業後は、直ちに元老院に入りて、其の書記生となり、全廿三年退官、轉して日本昆布株式會社に入り、會計監督として、日高、十勝方面に出張したのである。時に全廿四年、君は會社株主として百株以上を有して、入社したのである。翌廿五年は釧路出張所主任として來任し、翌廿六年以來は、釧路國一圓、釧路、厚岸、濱中の三場所を支配するに至つたのである。是れ君が釧路に關係を結ぶ経路で、爾來君は、釧路の人となつたのである。明治廿八年會社は、日清戦

役の打撃に依り、遂に解散の悲境に陥つたので、君は其の整理委員として再び來釧、翌廿九年函館に在りて、會社殘務の整理中、釧路有志に依り、水産組合主任として來任せんことを勸請され、即ち其の依嘱に副ふべく、翌卅年來釧し、愈よ此に釧路永住の計をなしたのである。當時の組合組織は、水産税組合も併合したので、全時に其の主任ともなつたのである。全卅六年釧路町會に於て、常設委員に選舉せられ、釧路町埋立事業委員も兼ねたのである。全四十一年釧路郡漁業組合の創立と共に、其の収入役となり、全年更に北海道水産組合聯合會評議員となり、以て現任に及ふたのである。君が水産組合主任として就任當時は、行政廳の監督も現今の如く嚴密ならず、従つて組合事務の上にも、稍や紊亂の跡ありたれば、君が其の整理に腐心したのは勿論である。然れども君が、釧路來任の動機は單に水産組合主任たるの故にあらず、釧路の將來に就き大に達觀する所あり、漁業地、商業地として、發展の餘地綽々たるものあるを發見せるも、事業に最も緊

切なるべき銀行の設立なく、爲めに斯業者の不便不利少からざるものあれば、君は銀行創設を唯一の希望とし抱負として來鋼したのである。偶々機熟して三十一年に至り、武富、白石、福富、中西其他の諸氏と謀り、銀行創設の計畫を進めたるも、亦顧みれば當時の經濟状態は、尙ほ幼稚にして、資金の全部を銀行株金に固定せば、却つて財界を枯渴せしめ、危険の憂ふべきものあれば、寧ろ之を他に求むるに若かすとなし、安田礦業所に飯田氏のあるれば、全氏より安田家に交渉して、根室銀行支店開設を見るに至つたのであるが、君の希望の一部は、之に依つて實現し得たると共に、釧路の金融機關は、此に其の端緒を開かれたのである。而して君が、水産組合在職中に於ける功績の最も表彰すべきは、昆布及び魚粕の品質改良に全力を傾蕩せしことで、現今釧路昆布の聲價大に揚りて、濱中昆布を凌駕し、若くは魚粕の改良進歩を有効ならしめたるは、君の努力に俟つ多とすべしで、直接當業者を利し、延ひては地方、國家を益する甚だ少からずである。

若夫れ君が、漁政問題に力を致し、一般漁業者を利せる如きは、枚擧に遑あらずで、初期の道會開設の時に當り、全道漁業大會を札幌に開催し、東海岸の代表委員に挙げられて、水産税全廢若くは輕減問題に對し、努力奮闘甚だ怠らず、而して地方漁政問題に於ては、仙鳳趾の入會問題の如き、武富隆太郎氏等と共に、其の利權の擁護に力めたるは、蓋し問題中の問題として、大に表彰すべきである。君由來性行圓滿に、社交に巧みなるは、君の性情の美とすべきで、八面玲瓏の稱ある、亦以なきにあらずである。君一昨四十二年、釧路町より埋立事業の功勞に酬ふべく銀盃を贈られ、其他善行の表彰少からざるは、甚だ喜ぶべきである。君一女あり、函館高等女學校を出で、更に補習科を修めて家に在り、君の居常に於ける嗜好は、謠曲であるが、亦書畫、骨董を好み、鑑識の明あるを聞くが、是れ君が、曾て平山靖臣氏の家に在りて、美術博覽事業に與かりたるため、君の少壯時代は、赤羽四郎、村田保氏等の薰陶を受けたる少からずとのことである。

横田善之丞君

川上郡弟子屈村
公吏農業兼營者



横田善之丞君

身を地方の公共に致して、精勵甚だ努め、以て村治の改善進歩を念とする、横田善之丞君の如きは、蓋し川上郡弟子屈村に於ける、模範的人物として、表彰するに足るべしである。

君明治七年一月十六日、新潟縣三島郡寺泊町に生れ、全十五年十月渡道して、川上郡熊牛

村字標茶に居を占めたのである。是より先き君の嚴父善作氏は、萬延元年佐野孫右工門氏に従つて渡道し、全氏の事業地なる跡佐登の硫黄山に在りて、礦物運搬の業を司配してあつたのである。其の當時は、標茶以北の弟子屈村、虹別村、屈斜路村等には、舊土人の外には、内地人の居住者は更に無く、君は此の時代に於

て、此に永住の計を定められたので、全く川上郡開發の先鞭者である。渡道後四年にして、嚴父善作氏は死去したのであるが、之と全時に、君は一家經營の任に當り日夜業務に精勵する所あつたが、而かも君の天性の至孝は、母に奉する極めて厚く、家計甚だ裕かならざる時に於ても、曾て孝養を怠らなかつたのである。斯の如く君は、一家生計の重任の中に在るにも拘はらず、修養に努めて、夜間は研學甚だ倦まざるものあつたので、青年時代に於て、世の視線を集めて、學務委員、衛生伍長、土地評價委員等を命せられ、公事に盡す少からずであつた。全卅四年弟子屈小學校教員となりて、教育事業に身を致し、全卅七年三月更に弟子屈外一村戸長役場に轉したるのであるが、爾來八年間、名利の外に超然して、専ら意を村治の改善に注ぎ、納税、教育、衛生等は、君が最も苦心を拂つて、改善する所あつたのである。其の公的部面は、斯の如くであるが、私的部面の善行美事は、更に多くを數ふべしで、居村青年者の訓育指導に力を致し、純朴以て風をなすの美

習を造るに腐心し、恰かも之を以て、自家の天職なるかの如くに、献身的努力する所あるは、其の篤行、洵に嘆賞すべしである。而して君は、明治廿六年、卒先して日本赤十字社に加盟して、其の社員となり、以て他を誘導するの範を啓き、常に報徳訓を服膺して、修身濟家の道之に求むる如くで、其の用意の尋常ならざるを窺はるゝのである。本年北海道廳は、第一回地方改良講習會を開くに當りて、君は私費を以て之に出席し、熱心研究する所あり。飯村以來は、孜々として之が普及に力め、他日模範的自治体を造るの目的に在る如くである。蓋し君の如きは、先天的に於て、公事に忠なる篤行者を以て見るべきで、輒近弟子屈村の善風美俗が、世の認むる所とならんとするは、君等の力に俟つ其だ大なりで、亦地方の幸福なりと云ふべきである。夫妻の間に男四、女二を挙げ、家庭の圓滿、頗る味ふに堪へたりで、特に子女の教育に意を致す最も深きは、他の取つて以て模範となすに足れりである。君亦家庭に於ても、多幸を有せりと云ふべしである。

佐藤伊藤次君

釧路町西帯舞
土木建築請負



佐藤伊藤次君

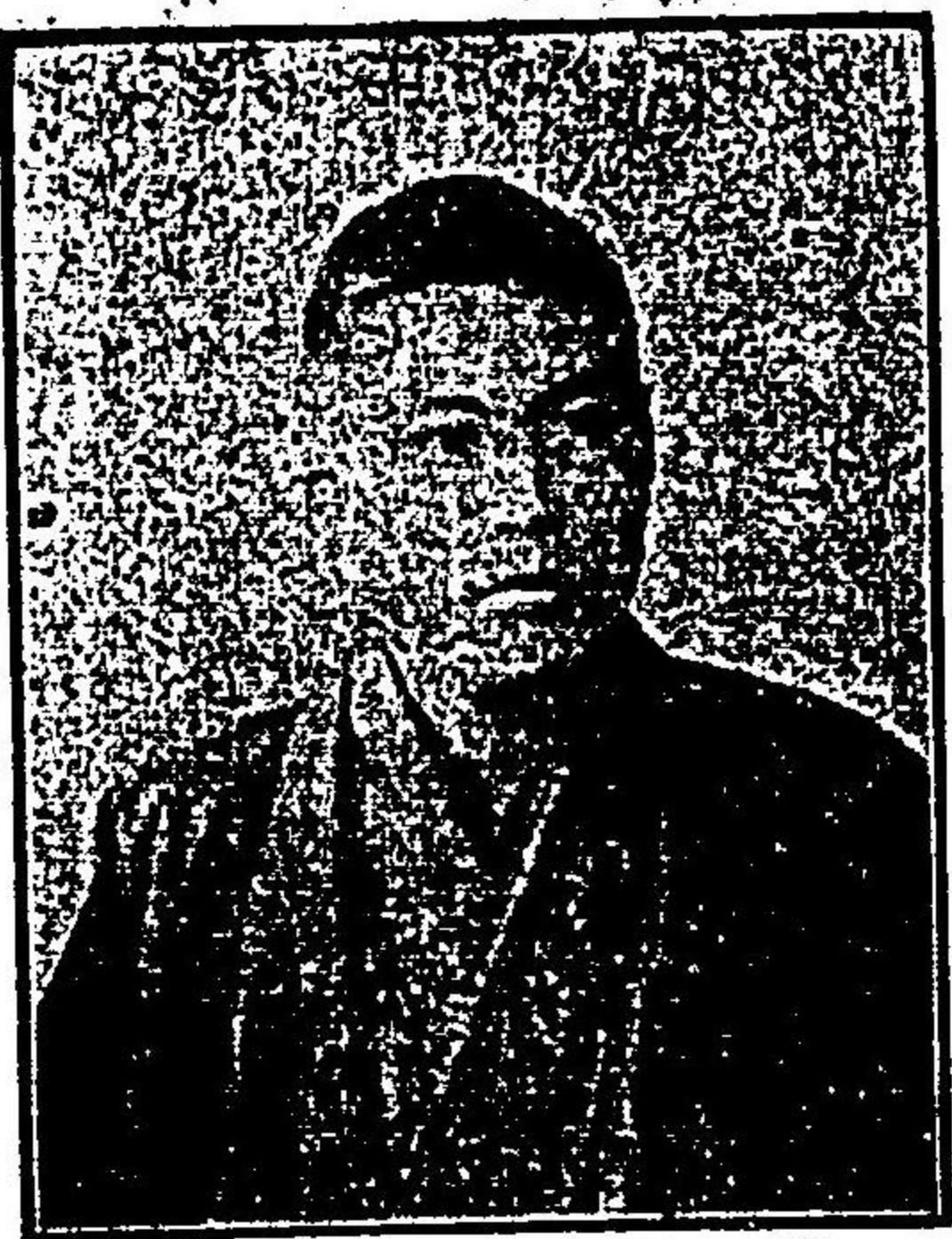
去る四十年以來、土木請負業増永組釧路出張所主任として、鐵道建設工事に従事し、後獨立して、土木建築請負業を開始し、全業間に重きをなす、佐藤伊藤次君は、明治六年七月十二日、長野縣北佐久郡東長倉村に生れ、郷里の中學に在學せるも、故ありて二學年を修

學したのみで退學し、爾來は實業に身を投じたのである。而して君が、始めて釧路に來りたるは、明治四十年四月八日で、鐵道建設工事請負人増永辰三郎氏の代人として、増永組出張事務を主理すべく來釧したのである。即ち君は、増永組釧路出張所主任として、釧路線鐵道の建設工事に従事してあつたが、全四十一年主

人増永氏死去し、營業停止の餘儀なきに至つたので、全時に君は退任して、獨立營業を開始し、爾來今日に及ぶのである。君の營業に對する方針は、極めて堅實に、謂ゆる請負業者流の放漫を喜はない如くで、夫れだけ營業振りが地味である。元來釧路の土木請負業者間には、一種の弊風があつて、極度の競争を試み、甚たしきは請負額の如きは、豫算の半額にも充たざる低額を以て、落札せしむるは珍らしからずで、其結果は、工事の成績に於て不良に、且つ双互に損害するのであるが、如上は、請負業者に誠意なく、實力なく、單に工事を請負ふために、生活の途を求むると云ふ、極めて危険なる遣方に過ぎないのであるが、之かために堅實なる方針の下に、事業を經營せんとする、請負業者の不利少からざるものあれば、君は此の弊風を打破して、確實の方法に改めんと、頗る努力する所ある如くである。蓋し請負工事の成績如何は、直接間接に、地方開發の上に、影響する少からざれば、釧路の土木界も、君等に依りて、早晚弊風を一掃されるであらふ。

岡田伊之助君

釧路町米町
貸座敷取締



岡田伊之助君

土木請負業に依りて、其の運命を開拓し、現に釧路貸座敷全業取締の位地に在る、岡田伊之助君の過去の奮闘生涯は、縦し仮に君の現在營業か、貸座敷なる名に依りて、若干其の光明を失ふ如くなりとするも、營業は以て、人物性行の總てを司配す、にわらずとせば、

君の如きは、人物傳中の人とするも、不可ならざるは勿論である。君明治八年九月十二日、香川縣高松市魚屋町に生れ、普通教育修了後は、煙草製造業徒弟となりて、實務に従事し、三年にして獨立開業したのであるが、時に明治廿六年、齡漸く十九の時である。君は此に獨立の生活に入り、煙草製造業を開始したのであ

るが、一敗地に塗みれて、營業僅かに一年を出です、閉店の不幸に陥り、之かた
めに、君は千餘の資金を失つたのである。此に於て君は大に發憤して、單身直ち
に大坂に出で、煙草仲買商となり、行商的卸賣を開始したのであるが、奮闘二年
有餘、漸次順調に進みて、資金の幾干を蓄積するに至つたので、君は一獲千金を
夢みて、堂島及び岡山の市場に於て、期米相場を試みたのであるが、再び失敗し
終りて、資金信用共に併せて失ひ、亦起つを得ざるに至つたのである。然れども
君の意思の強烈は、此の再度の失敗に屈せず、東京に於て再舉を圖らんと、全三
十年大坂を去つたのであるが、偶々途中、未見の人に會して本道渡航を勧誘され
東京以東の旅費を其人に給せられ、全年八月旭川に足を留めたのである。全行者
某氏は、狀況觀察の結果は、前途に望みなしとして、君にも坂郷を促したるも、
君は何物かを得れば、再び郷土を踏まざる決心を以て、單獨旭川に留まつたの
であるが、囊底素より無一物、眼前に生活問題の急に追はるゝので、請負業三田

某氏の許に投して、土工夫となつたのである。此の時代の君の惡戰苦闘は、容易
に想像すべからずであつたが、君は全時に請負業の趣味に感して、將來之に依つ
て、立脚の地を求めんとしたのである。全卅二年に至り前方稻や光明を認め、全
卅三年釧路線鐵道工事請負のため、三田某氏の代人として來釧、釧路驛構内全部
の土工を請負ひ、成績頗る好良、三田氏は旭川に販りて貸座敷業に轉し、君にも
共に販らんことを勧めたのであるが、已に請負業の妙味を覺へたる君は、飽まで
之に依つて健闘せんとの希望を懷き、三田氏と別れて、此に獨立の生涯に入り、
釧路在住の計をなしたのである。全卅四年白糖軍馬補充部の新設工事あり、君は
其の一部を請負ふて、漸次に補充部の信用を博し、翌卅五年は補充部の専屬請負
人となり、全時に御用商を兼ねて、物品供給者となり、連續して四十年に至つた
のであるが、此間に於て、君は全く成功の域に達して、釧路線茶路川の鐵橋工事
も、君は獨力之を竣成したのである。全四十一年手宮線復線工事の江別、岩見澤